

第七編 遭難記と見聞誌

一 四人の骨を拾ふ

山崎紫紅

私はいま收容されて居るバラックの中で、この原稿を書く。原稿用紙も無く、万年筆もない、机もない中で、端の焼焦れた蒲團の上で腹這ひながら、貰つて來た古筆で此の文章を書いて居る。

私はこの震災の爲めに、父以來住居して居た家を焼いた。衣服や調度類を入れてあつた土藏や、明治の中期を代表したやうな塗家造りとも見紛はれるやうな西洋館を潰ぶした。私は四十年來蒐集してきた三萬卷の書籍や、三十五年來日々記入を怠らなかつた日記まだ公けにしまなかつた幾多の著作の原稿、それは父が永いこと寄せ集めた數百點の書畫骨董の類と共に、悉く烏有に歸してしまつた。しかしこれらは「未だ」である。およそ今まで數へ上げたものは、まだまだ私の失つた損害の一部である。私はまだその外に自分の長女を失つてしまつた。私の長女は數年來私の家から別れて生活

して居た。そして郊外のある家から、養子をして既に二人の子を持つて居た。外へ出て能辯？の代りに家庭に於て緘口であつた私は、彼等の家庭がどんな生活をしてゐたかは知らないが、相當と思はれる財産の分け前と、奢つてゐない健實な暮し方で、相應の預金などとして居たやうである。いまだ一度も夫婦喧嘩をして、厄介をかけたこともなく、いはば平凡そのまゝの權化であつた。夫婦のものは永年使つてゐる長火鉢や箆、筒のやうなもので存在してゐるものの、いはばその存在は無意識のうちに承認されてゐる存在である。

九月一日の地震は強かつた。私の家族は残らず家に居合せた。この事はあとになつて考へると、實に天幸であつた。もしもあの地震がもう二時間もあとであつたら、どんな結果を齎したか分かつたものでない。丁度あの日は帝國劇場の初日で、其の時間になつたら、私は東京にゐたかも知れない。東京の災害も激しかつたかも知れないが、私の見た目から云うと、東京の災害は火事からである。横濱の災害は地震からである。東京は大火災である。横濱は大震災である。横濱は五十二人の市會議員のうちの六名が死んでゐる。裁判所では所長や檢事正が多くの屬僚や、十五名の辯護士、その他民刑事の原被告などと共に死んでゐた。路上には震災の當時感電して死んでゐた電車

の中の運轉手さへもあつた。火に焼かれ、煙りに噎んで死んだ人は、そもそも末である。

私には八十六歳になる父と、七十八歳になる母とがあつて、その當時は前にも云つた通り、幸ひに一同家にをつたので、地震の靜まるのを待つて外へ出た。この間の恐ろしさと言つたら、大きな響がすると、家が上下に動き出した。私は割合に地震に對して恐怖が薄いので、出るな出るなと呼ばはつて奥の間から茶の間に來た。そこには家族は一同集まつてゐた。次男の東京へ通學してゐるものの外は、そこにある大きな長火鉢の傍に蹲まつてゐた。これは老人達がいつでも云ふ訓戒が徹底してゐた爲めせう。地震の時には堅牢な差物の傍に潜んでゐるのが一番良い。もし梁が落ちても強固な方形のものがあれば、それが落來る木材を抑へて、身を免かることが出来る。この話を有意識が無意識のうちに實行してゐたのでした。

所々の小壁は落ちる。天井の間から煙りのやうな埃りが落ちる。用意してあつた中食の膳の上は乾いた土が盛上る。額が落ちる。本家と連絡されて居る座敷の間は、口が明いて、瓦が落ちて廊下の上で割れる。

座敷の隅にあつた三角形の置戸棚は、前さまへと倒れて、母の體の上になつた。私は戸棚を押除けた。戸棚に嵌めてあつたガラス類は壊れたが、幸に母は怪我をしてをら

なかつた

かくして、第一回の強震は止んだが、餘震はなほして居るやうである。

第一次の地震が最も強く、第二次の俗に揺りかへしといふものが微弱であるといふことを信じてゐた私は、もう此上に強いのがないと思つたので、當初居た座敷へ行かうとすると、驚いたことには、土藏の影もない、滅茶に潰されてしまつてゐる。座敷はゆがんだなりに、崩壊はせぬまでも、床の間の板ははみ出して、掛物は落ち、床飾は狼籍になつてゐる。私は藏書室になつてゐる西洋館を見ると、軒を竝べた土藏と同様の姿で、階上の客室も潰れてゐた。家族のものは、外へ出たやうである。私も跡から往來へ出て見ると、私の住んでゐた戸部町の通りの町家は、僅を残して、皆街路へと滑べり倒れてゐた。私はかくして我家の倒れずにゐたのを、奇蹟的にも感じ又喜んだ。

後になつて考へると、この喜悅は極めて殘忍なる淺ましい人間の心の現はれであつて、書くのも恥づかしい次第であるが、事實だから仕方がない。こうして淺ましい心を知つた。これが私の地震の恐怖の第一次なのである。

私は長男と一緒に倒れた家を指摘しながら、日本家屋の二階造りが、前の方へ崩壊することなどを話した。あとで思へば滑稽千萬である。二時間ばかりの後に焼けやう

とは、この時には思つて居なかつた。

この附近で私の所有してゐた二十餘棟の家屋は、五六棟を残したのみで、餘は悉く倒れてゐた。何方からともなく男女の悲鳴、叫喚の聲がする。

そこへ出入の大工の棟梁が駆付けて來た。「旦那、ひどい地震でしたが、お宅は倒れないうで結構でした。土藏には大事なものがありません。出して置かないと不用心です」と注意して、外の得意場へと廻つて行つた。

なるほどと思つて、潰れた倉の上へと雇人の乙と、私親子は行つた。云はれて見ると、この中には家内中の着類や、また父の集めた美術品もある。私達は上部の木材を跳ねのけて、少しの品を取出した。父の秘藏してゐた抱一上人筆の極彩色の屏風一雙を出したときには、よい鹽梅だと思つた。慾を忘れない私は、まだ探してゐたが、はからずも坂の下を見ると、火の手が一條「火事だ」。しかし、風は方向が違つて居る。東北へと吹く風は、決して此の邊の敵でない。

暫らく見てゐると、吹き行く方に火は暴んで、燃ゆる區域が廣がると同時に、尻火は段々と我等の方へと追まつて來る。坂の下の方からは、簞笥の引出しや、風呂敷包を背負つた人達が逃げて來た。

とにまれ、年寄をと云ふので、近い伊勢山に避難させた。

その當時の私は、潰れ残った自分の家が、まだ焼けるとは思つてゐなかつたが、一應はその準備をしようと思つたので、取引関係のある帳簿の類などを一包みにし手廻りのものを入れた箱、倉から出てゐた衣類などの一部などを包んだものを持つて、心ばかりは悠々として、避難の場所へ行つた。難に望んでの落付の無さ。この位にした積りで、下らないものを入れた机の引出しなどが持出されて、貴金屬の一部の入つてゐたものや、大切なある一部の書類などは残してしまつた。

私達は避難所で一緒になつて、禍の時の移るのを待つてゐた。が、風はなかなか静まらず、そして諸所に火の手が上つて來た。私の家は高地であつたが、その低地の二方から迫つて來た。

私の長男は私に云つた。「方文記のやうですね。」

「うむ、さうだ。お前たちには絶大の教訓だ。しかし、おれには少し時が遅すぎた。」

こんなことを云ひながら、私達はなすことなく火を眺めてゐた。遠慮のない火は避難の場所の下部まで迫つて來た。しかも、まだ私の家は焼けない。

ここに集まつた避難の人々の望みの的になつてゐるのは、戸部通りの四角に突立つ

てゐる私の家の運命である。下から迫つて來た火は、そこを境ひに静まつてしまつた。もし私の家が残れば避難の場所の人々は安穩であるが、それへ火がついたら、谷のやうになつてゐる一丁目は焼けるのだ。いくら常盤樹や雑木の森があらうと、この下へ火が來たら堪まらない。

この心配は事實となつた。火はついに脚下まで延焼して來た。地震には歪みもしなかつた太神宮の拜殿も、本社も、火を噴くやうになつた。

生きた木の燃ゆる音の凄さ、私達は械樹の枝を持つて、自他の荷物に振りかかる火の子を叩き消してゐたものの、もうだめだ。

乙と一緒に三十間ばかりも後へかへると、潰れたばかりでゐた太神宮の社務所へと火がついた。前後左右四方を全く火に圍まれた。

「南無妙法蓮華經」と、續けざまに老女の聲がした。老人の夫婦は狭い坂の中途を、上へも下へも免れもやらず、題目を唱へてゐた。この時に吹捲くつた旋風の恐ろしさ、火の海、火の空氣、私はもういかぬと覺悟した。

「こんなところで死ぬのか、口惜しいな。」下方を見ると、森の木に繋がつてゐる四五頭の馬が躍りあがつて叫んでゐる。

「馬がまだ死なぬ。あすこを突切れ。」

かうして乙と私とは、先きに上がった丘下へ出た。後で思へば恐ろしい事だが、その當時は夢中であつた。

私は持出した箱を持つて喘いでゐた。勞働に馴れてゐる乙は、人に教へられて、父等のゐる所を探して來たので、私も一緒になつた。

そこは火の最初に焼失した知事官邸の後部で、まだ四面は火の手が盛んであつたが、崖下の人家は既に灰となつて、このみは煙だけで、火の氣は既に無い。

鐵筋コンクリートの塀を便りに、盆栽の置物の芦簀を集めて、地上に敷き、人から貰つた木綿薄團の上に、一同蹲まつてゐたが、長男だけは形ちが見えない。火事よりも地震よりもそれが一番心にかかる。

避難の場所を悉く探したが見えぬ。煙の中を突切つて伊勢山の上部へ行つた。そこには過半は焼死したんだと過傳せられた。大勢は無事でゐたが、長男の姿が見えなかつた。

後數時間にして、私は自分等のゐる直ぐ傍で、毛布を被つて一人蹲まつてゐた長男を發見した。

そこで心配は別家してゐる人達の上へかかつた。その晩は不安の中にも、火に追はれて横濱驛の傍から、海近くへ逃げたものであらうと思つた。

明日になると、東京から次男も歸つて來たが、別家の人々の消息は一向に知れない。そこで私達はこう思つた。親子四人の者は養子の里へと避難したものに違ひない。それにしても老人がゐるのに、どうして尋ねて來ないのか。

來ぬのが道理である。彼等の悉くは、その住家の中で一同灰燼になつてゐた。彼等の死の明かになつたのは三日であつて、四人の亡骸は合せて小さな甕の中へ入るほどに焼けて居た。

その日僅か前のことである。別家には昨年生れた男子があつて、しかも其の誕生日は九月一日である。祝の赤飯を持つて、母親は二人の子を連れて來た。中飯時に近いので、食事を勧めたのに、何時になく歸つてしまつた。

その歸に買つたものらしい、新らしい人形の首ばかりは、色もかはらぬ生々しさで、長女の手の傍らにあつた。甕へ入れるとき、それも一緒に入れてやつた。

死の原因は、出場を失なつて焼死したのか、一層一と思ひに撲たれて死んだか、何れにしても火は早かつたさうであるから、無つた命であつたらしい。嘆きもしなかつた。

涙も出なかつた。だが、死骸をつくづく見られなかつた。

その翌日末吉橋附近で、二百五十有餘人の重なりあつた死骸を見た。こんなになつて死ぬのよりは、私の家族は仕合せであるとも思つて見た。他人の死を見て、せめてもの慰めにする私の心は残忍である。

朝鮮人が來襲すると云つて、代り代り鐵棒や、竹槍を持つて、寝ずの番をする、怪しいものと見ると、云分けも聞かずに撲殺する。食ふものに迫つて、倉庫から食糧米を掠奪するのを、當然の所置に感じる生活慾、焼けた死骸を心にもかけず、その傍らに數日を送つた自我心、實に恐ろしい。

私は思ふ、地震、火事の恐怖は非常なものである。しかも、その災害に原由して生ずる人間の心の奥を發揮する。その残忍さは、實に實に自然の破壊よりも一層の恐怖である。

二 慘 禍 の 犠 牲

横 田 芳 次 郎

三つの戒名

眞淨智現童子

顯成院妙歡日敬大姉

妙靜孩女

右の三つの戒名は、昨年九月一日、關東地方前古未曾有の大震火災あり。幾萬の犠牲を出せし時、當横濱に於て不幸歿死を遂げたる我が妻濱江及び我が二男忠男並に長女春子の佛名なり。

三人の來濱 夫戀し、父戀し、之れ夫婦親子の眞情なり。されど一家の事情は之を許さず。余は當時在濱一年十一ヶ月、單獨任にありて、一家を形成せず。七月十一日に至り、故山の妻子三人を招致し、市の中の中央横濱公園に近き横濱文化莊に樂しき家庭を爲して、二子の慈父となり、子女の教養に多くの希望を持ちき。二男忠男六歳長女春子二歳共に稚けなく頑是なく又愛しかりき。

曠古の大震火災 九月一日朝雷雨あり。十時晴れたるも、蒸熱一入高し。午前十一時五十八分、俄然地鳴り烈風起り、始めて大地震なることを知りぬ。人々舉措を失ひ、狼狽する事極りなし。忽ち聞ゆ、大厦の倒るる音、猛火の高樓を焼く響、人は泣き、犬は吠へ、現世からなる阿鼻叫喚の活地獄を演出しぬ。此日勤め先なる市十全病院にあり。(院

は市の中央野毛町高丘にあり。我住居を距る十二三町。「スハ」大變と、身を挺して應急指揮を爲し卅分後にして漸く表玄關に這ひ出づ、此時最早前面坂路に沿へる幾多の人家は倒壊し、火さへ燃え舉り、死傷者を見るの慘狀にて、家は倒れて路傍に燃え、交通さへ杜絶して、我家に通ずる安全道更になし。院前の空地に避難せる者、顔色土の如く、手震へ胸慄き、老幼男女の悲鳴頻りなりき。今は躊躇すべき時にあらず。火事は延焼し、一步は一步の危険、後より迫りたれば、勇を鼓して傷病者の救護に従事し、一轉二轉の末、遂に安全地帯たる水道山に避難し、曉夜を徹したり。避難したる水道山は、市の中央四十七メートルの高さにして、比較的安全地帯なりしかど、正午よりの震動は止もやらず、火事は増大して、火は山下に及び、刻々危険を傳へられたるも、幸ひ龜裂を生じたるのみにて、全崩を免れたり。薄暮紅焰天を焦し、烈火飛び、凄まじき光景を瞰下し、全く生心地せざりき。九時頃全市火の海と化しぬ。

避難場の光景。山に避難したる群集萬を越え、眼下の烈火、足下の震動に心身共に慄へ、草木また動き、物凄きこと限りなく、子は親を、親は子を失ひ、右往左往、狂亂悲鳴、不安焦燥有ゆる人生の活地獄を演じぬ。此日早きものは晝食を済ましたるも、遅きものは晝食せざるあり、用意なきの避難者多く、哀れと云ふも愚かなりき。

我が家の全焼。不安焦燥に曉を徹し、二日拂曉餘焰を眺めつつ山を下り、野毛道に出づ。別荘學校寺院商家皆な灰燼となり、大路は龜裂尺餘に及び、電線落ちて地に焦げ、鐵橋石橋悉く墜落し、昨日の股賑も、今日は荒寥たる燒野原と化せり。電車道を辿りて、漸やく午前十時、我が家の位置に達しぬ。我が三層の横濱文化莊は無慘や灰燼となり果てぬ。あたりに人なく、余や茫然自失稍、久しうす。されど手を下すを得ず。附近の避難場指して狂奔しぬ。此文化莊は七月一日落成し、工費拾參萬餘圓を投じたる近代式建物にて、一階二階三階に住ふ者八十人。中に俱樂部あり、食堂あり、理髮店あり。市營建物として誇るに足るもの。住む醫師あり、辯護士あり、會社員あり、中等以上の階級者を以て網羅し、内に自治會を組織し、堀田文學士を會長とし、余は顧問として微力ながら金港文化の爲めに努力せんとしたる希望の住家なりき。

不安の二旬。九月二日三日四日も尙震動止まず。人は裸一貫にて飢渴を忘れて、家族の捜査に狂奔し、その恙なきものは燒跡よりトタン板等を拾ひ集めて、小さきブラックの築造に餘念なし。余も亦一日不安焦燥その度を増し、氣力衰へたれど、さながら燒野の雉子、夜の鶴にて、悲歎の裡にも連日搜索を續けぬ。晩夏の暑光は焦土に照り返され、暑きこと限りなく、渴を製氷工場の殘氷に凌ぎ、飢を南京米に甘んじたり。五日頃ま

で全く無警察状態にて、掠奪行はれ、闘争を演じ、その力強き者のみ横行し、眞に命に心配なく歩行し得ざるの危険を見たり。夜な夜な鮮人暴徒に野營の夢を醒さるるのみか、男子は自警團の一員として、暴徒襲來に備ふるの任務あり。大正の今日、目の邊り此の無秩序な危険を見んとは、誰しも夢想せざりし所なりき。

嗚呼、遂に慘禍の犠牲。月の七日、遂に避難の見當つかず、稍や住家の餘燼冷へたれば、屍體發掘に着手しぬ。されど鍬もなければシャベルもなし。僅に一部外面をホゼクリたるに過ぎず(此時道具供給の不能と親戚故舊の乏しきを歎じたり)。されど他に避難したる形蹟なく、夜半の夢に引かれて、日を替へ再三發掘を試みたり。十三日故山との交通可能となりたれば、親戚の一人海路より救援の爲め來りたれば、勇を鼓して、近く發掘せる人の道具を拜み倒して借用し、稍や徹底したる發掘を試みたるも、僅かに器物の一部及衣類の焼片を得たるのみ。失望落膽遣る瀬なく引きあげたり。十九日、思ひ切つて鮮人を備ひ、今度は徹底的作業を施しぬ。嗚呼、無慘や裏稼と思はしき所に於て幾焼土の下に三人抱合して慘死しあらんとは。震火災後實に十九日目、有ゆる努力を盡して漸やく貴き白骨を得たり。此の時余は涙も出でず、タッタ天を仰いで冥目するのみ。されど鮮人は泣きぬ。(此鮮人は今も病院に使用せり)

始めての回向。九月二十三日、秋彼岸中日に當り、假十全病院たる平沼邸に於て、職員中家族の罹災者ある者の爲め、鄭重なる回向を行はれたり。座に列するもの院長片山博士、副院長及能博士、醫員入江博士、其他職員及看護婦百十三名。寺僧五人の經を誦する聲いと有難し。蓋し經は我が宗法華經にてありき。白き位牌は未だ佛籍に入らざれば、皆是れ俗名にて、正しく是れ生者の氏名なり。僅に故の字を冠せられたる相違あるのみ。嗚呼、白牌の竝立せるを見ては誰れとて當時を追懷せざる者やある。實に意義ある回向有難き讀經なりき。

白骨を抱いて故山に歸る。月の二十五日夜來の暴風歇みて、初秋の晨風涼し。午前九時、三重縣に歸省の同勤醫師某と共に歸途につきぬ。横濱驛は焼けて煉瓦の礎壁傾き、驛前の光景荒寥を極む。此頃尙ほ幾千の避難民は假停車場に殺倒し居り、中には裸一貫の勞働者めきたる群もあり。物騒極りなし。醫師との同行は詭向きにて、人意を強うするを得たり。途中馬入川の鐵橋墜落して、跡方なし。渡船して平塚まで徒歩し、更に乗車、薄暮箱根に進む。此邊山崩れ、石飛び、山北駿河驛間トンネル墜落、徒歩四十分は頗る苦しきを覺えたり。山峽の秋月高く、酒匂川の上流、流れ急に、水白く岩水を孕み、蟲聲唧々萬感禁じ得ず。同夜一時沼津に着きぬ。九月二十五日午前九時沼津發、亦も

避難民列車に身を托しぬ。静岡以西一驛は一驛毎に被害少なく、折柄の秋晴に禾稻秀でて、沿道の秋靜かなるは寧ろ羨むに堪へたり。名古屋にて友と別れ、晚景淋しく、余は孤景悄然として、同夜十二時三十分、大阪に着きぬ。疲れ果てたる身には神戸まで進むの氣力なく、綿の如き身體を驛前の宿に托し、震災後二十六日目をして、始めて入浴の愉快を得たり。

明れば二十七日、曇り勝ちなる空は風さへ寒く、須磨板宿なる叔父が邸に着きぬ。玄關前に着くや遅しと、迎へられたる叔父と、無言の握手を爲し、始めて生き心地したり。神棚に余が氏名の名札、佛壇に我が妻子三人の氏名あり。蓋し兩者の安否は決定的事實となりたれば、せめては生ける者の健康保全を禱り、不幸を見たる者の爲めに、其の冥福を禱られたるにありて、暫時の會話、悲喜交々至りて、逝きにし三人を悲しまるるの情や切なり。此日義兄及び神戸新聞記者某の來訪あり。横濱の近況を語る。其記事二十九日の新聞に出づ。翌二十八日朝、叔父と平安に朝食をすまし、歸路を姫路に出づ。是れ姫路には中學にある長男國男あり、長男が師事せる母校の舊師あれば、共に報告を兼ねる必要ありしによる。午後八時、懷しき我が家に歸りぬ。老母は余の健全を見て喜び、三人の不幸を悲しむ事限りなし。殊に余の携へ歸りたる遺品中二男忠男の飯茶

碗を見るや、慟哭止まず。蓋し來濱の際、老母が態々彼の欲する儘に持ち越したる品にして、茶碗には金時の繪あり。思ひ出深き遺品なればこそ。十月四日は、七五の命日なれば、葬儀執行の日と定め、豫め諸般の準備を爲す。此日秋晴。早くも準備成る。悔受は余及長男に於てす。正午西座敷より出棺し、先考の塋域上の山に葬りぬ。中川村長の弔詞、各宗協會長の弔詞、渡邊横濱市長の弔電に次いで、數十の弔詞弔電は舊友富永氏によりて代讀せられぬ。

郡内外の先輩知友の會葬せらるる數六百餘人、妻の妹は泣き、近親者皆な哀愁して面を擧ぐるなし。菩提寺住職の讀經は、松籟と共に天に響き、遂に三人の靈は悠久に此の先考の傍に眠りぬ。

而して會葬の諸賢涙の裡に逝きにし三人の冥福を禱られたり。神戸又新日報は「涙の葬式」として此の式を掲げぬ。

三 遭難とその前後

東京朝日新聞記者
西河 春海

なにごとの天變地異か。瞬髪を容れざるの裡に、帝都三百年の文化も、横濱六十年の建設も破壊され、焼盡され、廢墟としての都は、壘々數萬の死屍を横へて、秋風に晒された。

奇蹟の如く助かれる人々は、着るなく、喰ふなく、家なく、煙のため、鮮血の如く彩られたる月と、更に斷間なく、搖返す地震との不安に顫えつつ、知るも知らぬも「生きて居ること」を祝福しつつ草に寝た。

鮮人襲來の恐るべき報は相踵いだ。人々は自衛の外ない。白刃と銃聲の幾日かは過ぎた。到る處に鮮人は慘殺された。生きやうとする人々の營みは、斯くの如く人類相食まれればならなかつた。

又、生きやうとする人々の營みは、到る處に掠奪となつて現はれた。死馬の肉を求めて、焼跡を彷徨ふ子供もあつた。そして又、焼けて焦げて路傍に轉がる牛の肉を割く人々の群……。

日に夜をついで親は子は探し、子は親を訪れる、憐れな叫びが續いた。草原に生める母親もあつた。母子

相抱いて溺れたるものゝ指輪を割ぐ人も見た。焦げたる人の入商を盗む人も見た。

「愛」と「憎惡」の露骨なる現はれは至る處に見られた。

所謂道徳に節制なき人々の群は滿つる。彼等は憎むことに節制なきが如く、愛することに節制はない。奪ふことにも、與ふことにも、慰め合ふことにも、殺し合ふことにも……。

生くることこそが人生への義務であるのだ。人々は生くる爲めに愛し、生くる爲めに憎んだ。總てが何といふ呪はれた、何といふ慘愴さであらう。

◆
今、秋風は荒寥たる廢墟の街を吹く。……………雨後の夜は、燐が燃ゆるといふ。物凄く憐れに、燐が燃ゆるといふ。……………聽て、月は皎く明らかにその憐れな街を照し出した。港から空を射る軍艦の探照燈が思ひ出したやうに動く。……………月は愈々、明かに蟲聲は繁る。

◆
史家ギボン、は、月明の夜、羅馬の廢墟に釣する人を見て、興亡常なきに流涕し、萬感ここに湧き、遂に不朽の著「羅馬盛衰史」を爲した。今自分が奇蹟の如く生き残れる一人として、あはただしく書止むる斷片的な記録を、或は後生の史家をして「發掘されたる瓦礫」にならぬとも限らぬであらう。(日記から)

◆
あの地震で、半生の日記を焼いた私は、地震の年の九月二十五日から、地震の日を初めに、して、日記の筆を起したのであつた。此處に抄録したのは、その前書きなのである。まだ昂奮から醒めぬ生々しい感傷と、落着

遭難と其前後

その頃水道山に住んでゐた私はあの朝家を出て市長公舎の横の坂を下り乍ら傍の電柱に青ペンキで「グンテ坂」と書いてあるのを發見した。そして微笑しながら、うる覚えの地獄篇を鼻にして、好い氣持で坂を下りたことを覺えてゐる。根岸の山へ逃げて、中村町の石油倉庫が焼けるのを見てゐたが、その煙の渦巻く形さへも覺えてゐる。傍の人とした會話なども忘れられない。絶大な椿事であり、悲痛な體驗であつたが爲めにそれ程に深く印象せしめられてゐるのだ。

しかしいまそれ等の記憶の總てを書き記すことは許されない。餘り一般的でないこと、一般的であつても書残されてゐないこと、さうした氣持ちで、日記と記憶を迫つて見やうと思ふ。

なほここに、地震の當時私の周囲を廻つてゐた人々のことも、迷惑にならない限り、無斷で書き込んだことはお詫して置かればならない

(一四、四、二三夜)

「あら、しだな」と思ひながら起きたが飯の頃には陽が射したり翳つたりしてゐた。細い雨は珠玉のやうに光を増して來た。しかし風はしきりなしに吹く。塙には朝顔が咲いてゐる。雨滴は、その葉から、花びらから輝きながら落ちてゐる。

家を出る頃には、雨はもう降らなかつた。陽さへ照つて來た。九月一日の陽は、強烈ではあるが、秋らしく黄ろい圓みを帯びてゐる。

野毛の貯水池の横へ、新築された同僚の高岡の家彼れが自慢のその家に置いて貰つてゐた俺は、矢張りその家に愛着を持つてゐた。

加藤友三郎が湘南に病んで死んだ。山本權兵衛がその後を受けて、内閣の組織に奔走してゐた。新聞記者としての職業的な興味を以つて、新内閣の顔觸れなどを豫想し乍ら、高岡と暫らく話した後に家を出た。土曜日だつたその日は、俺達の水巷會(市政記者で組織されてゐる)と十日會(縣政記者で組織されてゐる)とピンポンの競技會があるのだつた。それで、いつもより少し早めに市役所の大玄關へ吸込まれて、二階の室へ入つた。……………地震前の新聞記者室の模様や、同僚たちの面影も忘れられないものである。地震の瞬間前まで話し會つた會話も忘れられないものである。しかし、それ等の詳細を極めるよりも、あの大事件への筆を早く進めねばならない……………。

「どら俺も一つ練習して置かう。」

時事新報の大島がさう言つて、バットを握つた。俺は彼れの相手になつて、ゲームを進めてゐた。俺の打つたボールをミスした彼れが、床へ轉つたのを拾はふとしてゐる。

俺は得意になりながら、氣の毒なやうな氣持で、それを眺めてゐた。
その時だ。

異様な恐怖を伴ふ音で、ゆらゆらと體が上下に動かされた。ハッと思ふ。

「オイ地震だ、上下動だぞ」。

此の市役所の煉瓦三層樓は、五寸ばかりゆがんでゐるといふ話した。基礎工事のコンクリートに龜裂があるといふ話した。頭をかすめて、こんな考が過ぎたのは、ほんとの瞬間である。そして「遁げやうか、遁げまいか」と思つてゐるうちに。上下動は止んだ。ホッと一息して、兎に角廊下へ出た。

その瞬間だ。

あの言ひ難い、呪はれたる瞬間が現出したのは……………。

その時なのだ。

大地の中軸から振り動かす激動が傳へられた。

前後左右に、そして上下に、地の底から傳はる大地の喰み合ふ異様な唸りに交つて、あらゆるものの破壊される音響が聞える。地上の總てのものはメリメリと揉まれてゐる。

ああ煉瓦三層樓のこの家が、メリメリときしむのだ。

ああ廊下が歩めない。よろめいては壁にぶつかる。そして轉ぶ。

漸くよろめき乍ら、階段の下り口まで來た。

眞鍮の欄干につかまつた。揺れる揺れるメリメリと煉瓦がきしむ。女が二人動搖に足を凌はれて、ヒラヒラと階段を轉がり落ちて行つた。しつかりと欄干につかまつた俺は、一段々、今潰れるか、今潰れるのか、今死ぬのか、と考へながら、しかも滑るとも、轉がるともつかぬ早さで、大玄關まで辿り出て、ホッとした。

ああ、何といふ慘虐さだ。灰色の空氣が言ひ様のない動搖をしてゐる。それは名狀し難い流動だ。呪そのものの流動だ。大地が無慘に割けてゐる。その割け目からは水道の破裂であらう、水が吹き出してゐる。電車のレールがねじきれてゐる。大地が動いてゐる。波打つて動いてゐる。何といふ物凄い光景だ。

俺はやうやくに、市廳舎を出て、ホッとした。

そして奇蹟の如く潰れもせず、崩れもしない煉瓦三層樓の、ゆらめきながら聳立してゐるのを見た。そしてその周囲の家々の、一軒さへ残らず、みじめに倒壊し去つたのを見た。

あの激動の初めより、今までに四十秒を出ないであらうにかくも變り果てた世の様を見やうとは…………。

見るも無慘、壊された家の屋根を破つて、這出して来る全身血まみれの人がある。異様な聲を立てて走つてゆく頭を割られた男がある。泥にまみれてよろめき乍ら叫んでゐる。群衆の顔の恐ろしさ、總ての呪ふ可き感情の表現からさへも見放された顔だ。それは、土塊の如く、あるひは死像の如く動かない顔だ。人類以前の顔だ。その叫びは何を叫んでゐるのか、何を傳へやうとしてゐるのか。言語以前の叫びだ。俺もかうした群衆の中の一人であつたのだ。そしてその群衆の中に、東日の阿部と、國民新聞の桶を發見した。間もなく阿部は若い妻を残してある。輕井澤の家へ歸つて行つた。地はまた揺れる。地の中軸から割けるのではないかと思はせる。電柱にもすがつた。柵にもすがつた。

市役所の二階の窓から、芝辻助役の青い顔が出た。そして街路へ向つて叫んでゐる。

「市の吏員は、みな來て窓をしめろ。」

見れば廳舎の裏手から、猛烈な煙が廳舎を包まうとしてゐる。一方を顧ると、中央電話局の附近からも、炎々たる火の手が昇つてゐる。更に眼を遠く轉ずれば、市内各所か

ら無數に黒煙が揚つて、總ての空を煙に包み、總ての地上を煙に捲かうとしてゐるやうである。俺と橋とは公園の中へ入つた。最う泥水が膝を没するほどに深くなつてゐる。地震は小やみもなく襲つて來る。公園は避難者で充滿してゐた。そして念佛や題目を唱へる聲に満ちてゐる。泥水の底にある龜裂へ落込んで、悲鳴をあげる女もあれば、折角運んで來た荷物を捨てて行く女もある。避難者は刻々にその數を増して行つた。そして知れる男も、知らぬ女も抱合つて祈つてゐた。それらの人々がその後、どれ程多く焼殺されたことであらう。また溺死したことであらう。

その日の午後、助かつた知り人達は手を握り合つては、「お目出度う」と言つた。何と言ふ悲痛な、斷腸の思ひの祝詞だらう。しかもかうして生きてゐることを祝福し合つた人々の何萬人が、吹きつゝの猛火に焼殺されやうとは誰が知らう。

「海嘯ではないか。」

刻々に殖えて行く泥水に、かうした不安が誰れにも湧く。果して、誰からともなく「海嘯だ海嘯だ」との聲が傳へられた。泥水の中に立つてゐる人々は、俄かに騒然とし、女や子供は泣き出す。屈強な若もの達は樹に攀登つたりした。

「子供が泣いて困りますから、お願です。」と傍にゐる中年の女が訴へるので、俺はその

「もう大丈夫ですよ。死ぬようなことはありませんまい。」

橘が若い女を慰めてゐる。それは關内の藝者だつた。泥水に堪えられなくなつた俺は橘を待たして、グラウンドの方へ入つて行つた。グラウンドにはまだ水は無かつた。見よ、避難者が雪崩のやうに雪崩れて來る。一萬、二萬……瞬く間に殖えて行くさまを……。居留地の方から來た一團がある。支那人の女が天を仰いで合掌しながら、異様な言葉で祈りをあげてゐる。唸るやうな泣くやうな、叫ぶやうな訴へるやうなその聲は、この大地の破滅しやうといふ日に人類の終滅を思はせる日に、底氣味悪い挽歌のやうに聞きなされた。

人々の想念を超越したこの恐る可き事實に遭遇し、更に恐怖と呪咀の瞬間々々を過

してゐる人々の顔には涙はなく、物恐ろしきまでの緊張さで、本能的に「生くるべく顫えてゐる。その顔で橘が言つた。

「俺達は火に蒸し殺されてしまうぞ。」

さうだ、公園の周圍はだんだん燐に巻かれて行つた。黒煙は熱氣を靄めた強い風に吹き煽られ、吹き煽られつつ、大空の殆んどすべてを覆つて仕舞つた。われわれは何といふみじめさで青空を探し求めたことであらう。」

「駄目だ君、朝までかうしてゐたら焼け死んでしまう。」

「うむ駄目だらうか。」

毒のやうな泥水は、刻々増して行つた。今は焔は公園の周圍を近く遠く巻き込んでしまつた。その焔はやがて水のやうに、公園の中まで流れ込むであらう。嘗ての日はここの誇とされた高麗芝のグラウンド、その上に腰を下して、少し落着かうとした。そして又直ぐ立上つた。名狀し難い群衆の雜音……。それは死そのものを物語るやうな雜音なのだ。恐怖に満ちた瞬間に叫んでも叫んでも聲の立たない時の雜音なのだ。死の靜寂が底を流れてゐるその雜音なのだ。二人はその雜音の中を歩き廻つた。そして話し續けた。靜止と沈黙は不安を増すばかりであるからだ。

「焼かれるぞ、朝までには焦がされてしまう。」

「焼かれなくつても空気がなくなる。」

「駄目だ、地震では助かつたが火で駄目だ。」

ああこの群衆が皆死ぬんだらうか。充分五萬人は居る。」

「ホ、どうだ来ること、来ること。」

流れるやうに、多くの人が公園へ公園へと雪崩込む。水は刻々に増して行つた。焔も益々猛烈に近づいて來た。俺はありありと煙に巻かれて、焚殺されて行く五萬の人々が見える氣がした。

「冒險だが遁出さう。え、朝まで掛つて君、ジリジリ焼殺されるよりは君、途中で火に捲かれたつて一思ひだ。……何うだ橋。」

「天祐があれば助かるかも知れない。」

「助かるのが奇蹟かも知れない。しかし何うせ死ぬのでも、考へ通りにして失敗したんなら、あきらめも着く。」

「うむ」

「遁げるとすれば何の方面だ。」

「あつちだ。」

その指さされた方は根岸の方である。いま、生死兩面の骰子が振られやうとして、俺達は空を見上げた。

煙は既に深く空を覆つてゐる。光はこの深淵の如き煙を通して、無氣味な赤黒い微光となり、どんとした鈍い光を地上に落してゐる。呪はれたる大地は、この呪はれたる光の下に絶えず揺り動かされてゐるのだ。そして群衆は死そのものの如く、うごめきさはいでゐる。この世の終りの如き天地の根岸の方面の一角にのみ、僅か五六寸ばかり青い空が見える。風はいまその方から吹きつゝつてゐるのだ。各方面から起つた焔は最早一團となつて中空に融け合ひ、もつれ合つてゐる。その焔の中央にゐるつばの如く置かれたのが公園である。そのつばの中にざわめき返す我々である。

あゝその僅に青い根岸の空が、どんなに我々を引つけたであらうか。それは大きな誘惑であつた。この空がなかつたならば俺達の「生死兩面の骰子」は振られなかつたであらう。

「斷行しやう。」

「やらう。一人では駄目だ。一人では死ぬ。死んでも一所に離れずに遁げやう。」

公園へは未だ断えずに避難者が雪崩込んでゐた。われわれはその人々と反對に進んだ。我々と同じに進むものはただ我々があるばかりである。花園橋に龜裂のために道路との間に四五尺もの口を開いてゐる。橋の下には傳馬船・石油發動機船など、無數に右往左往してゐる。それにも避難者が一ぱい乗つてゐる。……後にして思へば、此人々の中の多くが船と共に焼け、水に溺れ、慘憺たる悶死を遂げたのだ。この死前數時間を出でない人々は、水上であることによつて、地震と焔と海嘯とに安心してゐたであらうか。地上に生を求めてゐる人々を如何に憐れに見たであらうか。そして我々もその水の上を如何に羨ましく思つたであらうか。

花園橋を渡ると、橋の知つてゐる水上署の巡査が向ふからやつて來た。

「何うだ、向ふへ遁げられるか。」

「とても駄目だ。全部火だ。矢張り公園が一番の避難場だ。」

「駄目だよ。公園だつて火の底だ。」

巡査はそそくさと向ふへ行つてしまつた。しかし巡査に「駄目だ」といはれたことは、大きな打撃であつた。俺達は又橋を戻つて公園の入口へ來た。

「船に乗つて海に出やう。海なら安全だらう。」

「うむ、船に頼んで見やう。」

「オイ、船へ乗つたら海へ出られるかい。」

船頭は一言の下にこれを跳ねつけてしまつた。

「戯言ぢやない。橋は燃えてゐるし、家は河へ倒れ込んでゐる。海へなどとても通れるものか。」

なるほどこの大岡川に、うろうろしてゐる船は、只あはただしくうろうろしてゐる丈けである。石油發動機船なども、無暗にあはたらしい笛の音を響かしてゐる丈けだ。

「船も駄目だ。悲痛な情感をこめた駄目だ」といふ言葉は、死への標識のやうに、不安を増すに役に立つてゆくやうなものだ。

ああ又揺れる。又相當に大きな地震がやつて來た。

「遁げ出すなら、一刻も早くなければいけない。」

「どうせ焼かれる身だ、構はずに遁げやう。」

「しつかりして行かう。」

二人は再び花園橋を渡つた。無慘に倒壊した家屋や、落ちた電線に、さまたげられつつ走る。少し行くと前方は焔で壁をなしてゐる。左へ折れる。少し行くと又煙にさ

へざられる。又右折する。又左折する。そして顧ると、今走つて来たあたりは、もう煙に包まれてゐる。もう公園へ歸らうと思つても返られないことであらう。そして街上の人々、それは家から箆箆や長持を道の真中へ運び出して、地震を避難しつつその荷を守つてゐる。焰は最う近くそれに迫つてゐるのに……。

「荷を捨てて遁げる。焼き殺されるぞ。」

「早く遁げる。まわりはみな火だ。火に卷かれるぞ。」

橘と俺とは、乾き切つた叫びを擧げて、忠告しつつ走り過ぎた。そして前方に煙を望んだ二人は、細い街を又右折した。そして其處で最後の煙に突當つて、何れへも動けなくなつてしまつた。

「駄目か。」

それは絶望の聲であつた。疲勞しきつた二人は、呆然としてこの煙を見た。

その煙は、地震では崩れなかつたらしい木造の二階家が軒を並べてゐる。その兩側の二階の窓から、庇を炆めて吹き出してゐる。その煙は街を埋め、兩側の家はいまにも崩れ落ちやうとしてゐるのだ。その街には最う人影はなかつた。家の燃え崩れる響か、焰か、空気を吹ひ込む唸りと共に、あらしのやうに渦巻いてゐる丈けだ。

「オイ、水を飲まう。」

橘が言つた路傍に棄てられたバケツの中に泥水が入つてゐる。二人はそれに口をつけて飲んだ。飲んだら魚臭かつた。しかしうまかつた。存分に飲んだ残りの水で、ワイシャツや洋服をぬらした。焰の中へ飛込む決心が、言はずして二人にあつたのだつた。

ああ、此の時だ。俺達が行かうとすると反對に、その焰の下をくぐつて、向側から飛込んで来た男子がある。ただ真黒ないでたちとのみ感じたその男は、われわれを認めたのか。

「火に廻かれるナ……。」

と悲痛な叫びを残して飛んで行つた。ああその男は何處へ行かうといふのだ。焰の重圍の中へ飛込んで行つて、何うしやうといふのだ。恐らくは焼け死んだであらう。その男と反對に、その男の叫んだ瞬間に、焰の中へ馳込んだ。頭上一尺のところを這ひ狂ふ焰の空気を吸ふ。名狀し難い恐ろしい唸り、頭にかむつてゐる洋服の隙間から吹込む熱氣、熱し切つた大地に靴を通して焼かれる足……「落着かなければ卷かれる。」さう思ひながら下腹へ力を入れて驅けた。その驅けた瞬間だ、計り知れない焰の深淵

が、十間ばかりで盡きたのだ。

先づホッと一息した。

顧ると、焔に包まれた家は無慘にも崩れ出した。ガラガラと焔の渦と共に街を埋めたのだ。

ああわれわれが、最う一分いやもう三十秒遅かつたならば、果して何うなつたのだ。

ああ九月一日午後三時何分か、の僅か、三十秒の時が、我々の生死を境する時であらうとは…………。

次いで俺達は空を見た。

ああ、秋をみなぎらした蒼穹が、空の半ばをなしてゐる。二人は相顧た。二人は同時に「生きたぢやないか」と思つた。

「よかつたナ。」

「よかつた。」

この平凡な會話で、笑み交したことが何といふ千萬無量の情感をこめられてゐたのだつたらう。

根岸の山へ…………二人は威勢よく登つて行つた。

焔の横濱を俯瞰して、われわれが登つて行つた根岸の山は、横濱市の中心を一方に望んで、後ろに、本牧、根岸、磯子などを背負つて、境してゐる一帯の丘陵の一部である。そこには避難者の群が満ち満ちてゐた。遊廓から僅に脱れて來たらしい遊女等の群や、こんな時にはこれが一番の薬だといつて割られた額の傷へ草をむしつて當ててゐる男や、或る母親は既に子供を尋ねて血眼になつて居り、或るものは既に竿などを集めて露營の準備をしてゐた。そしてその何萬の人たちは、何れも慘憺たる遭難談を交してゐた。「これから、幾日絶食の日が続くか分らない。體をなるべく休めてゐやう。」

二人は焔に通ふ農夫の道であつたらしい道の叢の中へ腰を下した。避難者が續々と前を通る。何かに追立てられるやうに、せかせかした足どりで、何れもみな汚れ切つた浴衣一枚の儘だ。

或るものは手に唐梨の果を下げてゐた。

或るものは貧しげに瘦せた葱を持つてゐた。

又或るものは、秋近い日のうらなりの茄子に袂を孕ませてゐた。

その人達は西洋もろこしだから生のままでも喰へる」とか「茄子は叩いて喰へば生でも喰へる」とか言つてゐた。早くも飢に追はるる人々を見ると、俺達も何か心細い前途

を思つて見たりした。

そこへ、東京日日新聞の石川が、萬朝報の記者と二人で通り掛つた。石川は、
「女房と子供を見に行かねばならないと言ふ。」

「何處まで行くのだ。」

「藤棚の方面だ。山傳ひに行つて見やうと思ふ。」

「駄目だ、火で行けない。」

「しかし行かねば心配になつて仕方がない。」

「あきらめた方が好からう。細君も子供ももう助かつてゐれば助かつてゐる。死んでゐるなら死んでゐる。もう運命は定まつてゐるのだから、冒險して自分の體をなくしてもつまらないだらう。」

俺がさう言つた時に、石川は名狀すべからざる苦悶にゆがんだ顔をしたが、とうとう斷念して、そこに腰を下してしまつた。われわれは仲間の殖えたのを喜んだ。俺は最もらしい理窟をいつて、己れの淋しさをまぎすために、石川を引止めたのではないかと思つて見た。それは確かにさうした結果になつたのだ。俺はひそかに恥ぢた。

或は水を、或は煙草を、それは愛の表現としては、餘りにも貧しい分配が至る所で行は

れてゐた。知るものも、知らぬものも、抱き合ふやうな心で、眼と眼を見合せて、慰めたい心と慰められたい心とを露骨に表はしてゐた。そして夕暮が近づいてきた。われわれは丘に立つた。

焔は全市を包んでゐた。濛々たる黒煙は、數里に餘る火焔の大圓柱につながり、火焔に吸はるる空氣は複雑な旋風となつて、物凄じい唸りとともに空へ昇つて行く。

太陽は煙に染められて、眞紅に輝いてゐる。

その太陽の下、火焔の大圓柱の中に何萬人の人が焼殺されつつあるのでないか。

「三萬は充分に死んだらうと思ふが何うだ。」

「燃える燃える」とか「何うだいこの有様は」とか言つてゐた橘は、沈痛な顔に向けて、「もつと死んでゐるだらう」と言つた。

「横濱は全滅だ。東京も勿論だらう。何うなるんだ、此の國は……。」

「横濱はもう横濱ではないよ。」

「公園の五萬人は死んでゐやしないか。」

「ああ公園の五萬人は死んだかナア。」

橘も感に堪へず言つた。全市を包んだ焔は、あらん限りの亂舞を盡して、天に昇つて

行く。その燐の底にある可き筈の公園を探したが、眼には、只燐と煙の舞踏が見えるだけである。

火は吾々が語り合つてゐる丘の麓にまで押寄せて來た。麓の家々では、防火の萬策盡きて、女の赤い腰巻を家根の上に翻して、最後の手段を此の迷信に依頼したが、それ等も見てゐるうちに焼けて行つた。その左の方の麓には、揮發物貯藏庫が焼えてゐる。四尺位の長さの鐵筒の揮發油へ火が入ると、それは物凄い火焰を吐き乍ら、空高くくると躍り上つた。吐き出す燐が盡きると、風を切つて墜落する。普通の石油罐などは、ボンボンボンと連續的に連射砲のやうな爆音を立てながら、煙火のやうに空へ跳上る。それ等から空に冲する黒煙は、黒さそのものである。時々その煙の渦の空に冲するあたりで、空氣が煙の中へ突入すると、それは、メラリメラリと燐に代はるのだ。

この丘に群り集まる何萬人の視線は、時々一樣に、

「滅亡しつつあるわれわれの都へ吹寄せられてゐる。」

又地震が來た。その時である。「火藥庫の傍まで火が來た」といふ噂が、風のやうに速に傳へられたのは。……稻荷山の一角に在る火藥庫、それは、火が移らなくても、地震で自然爆破をするかも知れないのだ。何といふ新しい恐怖だ。

「遁げやう、向ふの山まで……。」

と評議が一決した。向ふの丘陵、それは谷一つ越して行かねばならぬ。その谷には倒れゐても焼けない家が多かつた。半ば倒れた家もあつた。土を落された土藏の骸骨がみじめだつた。

食糧品などを賣る店には、人が山のやうに群がつてゐた。われわれはそこで飽ちよこを一袋買つた。家の立つてゐる所は走るやうにして抜け、潰れてゐる所は寧ろ安心して、それを乗越へて行つた。そして漸く市營住宅のある鷺山まで辿り着いた。ここならば、火藥庫の心配も餘りないであらう。

もう充分夜になつてゐた。

燈火の設備は全然破壊されてゐた。しかし夜が更けて行つても、足許の薄明るさは消えなかつた。それこそは、全市を燃して得る光が微かに底深く流れてゐるのだ。

夜が深くなるに従つて燐の色は増して行つた。晝は黒く見える煙までが、眞紅に染められる。さうした燐の大圓柱は、三つに分れて空に續いてゐる。その一つは横濱だ。一つは横須賀であらう。更に一つは川崎か鶴見かと話し合つたのだが、今にして思へばそれは大東京が燃えつつあるものだつたのだ。

全部潰れた住宅のあとを探つて、藁を四五枚見つけ出した。傍に外人の屋敷がある。その庭へ入つて藁を敷いて座つた。そして飴ちよこを甜めた。聽て火焔に包まれつつ月が昇つた。ボンボンと物の爆發する音が聞える。少し大きなのが聞えると、火薬庫が爆發したのだらうと少し安心する。

更に又大きなのが聞える、火薬庫ではないなと思ふ。そして不安になる。

時々、又地は揺れる。

藁の上に眠らうと努めたが、眠れない。叢から蟲の聲が織るやうに繁く響いて来る。

「自然はその儘だ」

眠つてゐると思つた誰かが、聲を出した。蟲には科學もない。物慾もない。人類の世にも、物慾もなく、科學もなかつたらば、大地と共に臥し、草と共に生活してゐるのであつたら、か程までに悲惨な事件は起らなかつたであらうとも思はれる。

「かうなつて見ると科學なんて滑稽だね、結局、無きものは失はないのだ、つてことになりはしないかい……」。しかしこんな事は昔しから定つてゐる。ソロモンの榮華も、ここに鳴く蟲聲の一つに如くまい。」

又眠つてゐると思つた一人が言つた。

「人類の知識つて、それは餘り大したものぢやない。要するに淺薄なんだね。科學だつてそれは自然に對する反抗でなくて、自然に順應するところまで行かねば嘘さ。なまじいの知識が、いま覆へされたのさ。」

眠られぬ儘に、よく便所へ立つ。水道山の方に新しい焔が上つた。關東學院が燃えてゐるらしい。夜はもう眞夜中にまで更けた。その頃から「ブーン……ブーン……」といふ集團的な人々の叫びが、あちらこちらから擧げられるのが聞える。

「焚出しのむすびでも配つてゐるのではないか。」

「うむ、だんだん聲が近づいて来る。」

「オイ、今にも此處へ握飯が来るぞ。」

今から思へば、それは何といふ滑稽な想像であつたらう。それは鮮人騷擾の流言蜚語の第一聲だつたのだ。しかし空腹はこの微笑させられるやうな罪のない想像をしてゐたのだ。

眠られぬままに藁を體に巻きつけて、市營住宅の方へ行つて見た。するとそこに居た男が「何處へ行く」とがめた。不愉快だつたので、行つてはいけなひのかといふと、「實は、朝鮮人が燒残つてゐるあたりを放火して歩くさうですから、番をしてゐるので

す。

と話して聞かせた。

かうした混亂裡に夜は明け放れやうとしてゐる。夜をこめた蟲の聲も止んだ。騒亂の氣を底深く秘めたやうな靜寂さが滿ち滿ちてゐる。ああ言ひやうのない感慨に滿ちた朝だ。

燄の道を踏んで、ほのかなる黎の光りは、一夜にして、全市を灰燼せしめた横濱の上に、ほのかにも訪れて來た。

午前四時、われわれは横濱の街へ入る可く、鷺山を出たのである。「横濱の市街」に入る可く、……。しかし其處は横濱でなく、市街でなく、只荒寥たる焼野に過ぎないのだ。鷺山から谷を一つ越えて、地藏坂の上に出た。此の坂の上に「日光」の建築に倣つて建てられたテンブルコート、俗に言ふ日光御殿の榮華は無残にも焼かれ、徑五尺もある煉瓦の煙突は、ボキリと折られて、坂の中腹に轉がり出てゐる。あの有名な鬼面の鬼瓦……藝術味豊かな名物の面も破壊されたか跡方もない。道向ふの外人の家は焼けずにその儘になつてゐる。此の家とこの鬼瓦の面とには「横濱夜ばなし」とでもいひさうな挿話があつたのだ。テンブルコートの鬼の面に正面から睨まれてゐる此の外人の家

には、常に病人が絶えなかつたので、その主人は「魔よけ」の爲めに、小さい眞鍮の大砲を造つて、屋根に上げた。その筒口は丁度鬼の面の目玉を狙つてゐた。それから後、此の外人の家には病人は出來なかつたといふのである。その鬼の面は何處へか破壊されて飛散つて仕舞つたのだ。狙ひの對象を喪つた大砲は、飛んでもない方へ砲口を向けてゐる。

此處から全市は一目に見える。燄はその劫の最後を惜むやうに地を這ひ廻つてゐる。二里の圓を畫く燄の原は、滅亡そのもののやうに、灰褐色の一樣に彩られ、山下町の石炭貯庫と中村町の石油庫、それに神奈川のライジングサンの石油が街の三角に燃上つて、凄じい燄の柱を立ててゐる。そして此の燄と彼の燄とは、焼跡に短かく燃えくすぶる燄の波によつてつながれてゐる。

「何といふ慘憺さだ。横濱が無くなつて仕舞つた。」

「この街の回復も覺えないだらう。何億の損失だか分らない。」

「第一、通れるだらうか。」

「ホラ、人が歩いてゐる。焼跡に黒くつながつて、うごめいてゐるのは人だよ。」

われわれは、坂を下つて焼原に入つた。焼け切つた土は、聽てわれわれの靴の底を焼

いて行つた。靴はボロボロに崩れ始め、足の裏は熱氣のために傷き痛み、煙りは薄くなつてゐるが、火焰の吸ふのが多いためか、空氣は稀薄になり、熱氣に満ちて、呼吸は苦しい。焼け落ちた電線が、蜘蛛の巣のやうに道を覆ふてゐる。

「オイ感電するといけないから、電線に氣をつけて……」

いまにして思へば、それは滑稽極まる用意の周到さだつた。

「向ふまで抜けられるでせうか。」

「何うにか、かうに行けますよ。」

われわれは不安に顫へながら、幾度か向ふから来る人々に聲を掛けた。ここがありし日の長者町なのか。是れが羽衣町なのか。そうして我々は、在りし日の横濱の中心へ向つて進んで行つたのである。

「變な香がするね。」

「人間の焼ける匂ひだよ。頭がクラクラする。」

こうした慘虐な光景は、街の中心へ近づく程に、その程度を増してゐる。ああ此處に彼處に黒く焼け縮んだ死體が算を亂して轉がつてゐるではないか。或ものは虚空を掴んだままに焦げてゐる。或ものは大地にしがみついて焼けてゐる。又或ものは子

供をしっかりと抱いたまま土塊の如く黒く轉がり、又或ものは石炭殻の如く焼け縮んでゐる。焼けた電車の中などは、地震を恐れて火を知らなかつた人々であらう。そして、燃え近づいた煙に堪へられず、飛出さうとして電車から下りた所に倒れてゐるもの、片足下して死んだものなど、五六名は必ず死んでゐる。密閉せる石造建築物の地震にはビクともしないものの、鐵扉を溶かし硝子窓を溶かして、狂ふ煙のなかに、まこと、つばに投せられたるが如く、骨も残さず焼け去つた人々は、何萬人あるであらう。又焼残つた橋の欄干につかまり乍ら、危い足場を見出さうと下を向けば焼けて沈みかけた傳馬船の中に、焦げた屍が折重つてゐる。そしてその船の周圍には、煙に追はれて水に入つた人々が溺れて、青白く水にふくれて浮き上つてゐる。小さな寺や、祠などのある、小園風の廣場は、附近の人達に最も好い避難場とされてゐたらしい。二三百と算を爲して倒れてゐる。「これが人かと思はれる程に用捨もなく焼かれ、土塊の如く投げ出されて、まだ煙の風に煽られてゐる。」

ああ、何といふ慘憺さだ。

その人達が煙に追はれ、煙に巻かれ、苦しみもがき、反響なき救を求むる。悲鳴をあげる。その聲が聞え、その様が見える氣がする。

「たまらないよ。」

「ウム……なる可く屍體を見ないことだ。」

伊勢佐木町の、みじめさ、在りし日が華かなりし丈けに感慨は深いものがある。そして貴金屬商の跡なのだらう、淺ましい人達が灰を掘つて焼けた金を探し當てやうとしてゐる。伊勢佐木警察署の古い煉瓦はクラグラと崩れてゐる。巡査が二三名石油罐に水を入れて焼跡の火で煮てゐる。

「堪らなく喉が乾いてしまつた。」

俺がさう言ふと、巡査は「飲め」と奨めた。口につけて見ると、それはいやに臭い。屍體に埋められた川の水を煮てゐるのだ。飲める筈がない。

そして目の前の吉田橋の上にも、五、六人の屍體が轉つてゐる。丁度橋の中央には十五、六歳の少年が焼けてゐた。黒く焦げずに焼けて火のやうに熱した橋の石でザリザリと黄褐色にあふられてゐたのだ。

恐らく焼けた人の總てが、みな裸である。溺れた人のすべともみな裸形である。地震で遁出するとき裸身であつた譯でもあるまい。

おそらく火焔は狂亂して遁惑ふ人々の着物に着いたのだらう。着物を捨ると髪に

着いたのだらう。そして、ジリジリと人肉の脂肪が煮えて行つたのだらう。

橋は馬車道から、家が心配になるから……と言つて、歸つて行つた。残つたわれわれは、水道山を指して野毛坂を上つて行つた。

道の真中に馬が焦げて死んでゐる。泥と、こりを體にぬつたやうに、汚れた人達がそれに群つてゐる。

焦げた死馬の肉を割いてゐるのだ。

或るものは木片を以て割かうとし、又は花崗石の破片を以つて切つてゐるものもある。

その人と、その行働と、その背景と、それは石器時代に立返つたやうな、わびしさを感ぜしめる

下水道の流れを飲んでゐる一群がある。

糧食と水……横濱十萬の人が死んだとしても、尙ほ三十五萬の人々が居る。これ等の人達は此の焼けた曠野に如何にして糧食と水を求めやうとするか。都市文明の謳歌者であつた都人士たちは、只一本の鐵路に依つて糧食を得、只一本の鐵管に依つて飲料を得てゐたのだ。その鐵路もその鐵管も、いま破壊され盡したのだ。

その焼跡の砂を噛まうといふのか。それに比するならば死馬の肉は大牢の美味であるにちがひない。

その屍體の浮く運河の水を飲まうと云ふのか。それに比するならば下水道の水は此上なき甘露であらねばならない。

屍の浮く水を飲み、死馬の肉を喰ひ、草に眠り、焼跡を掘つて、人の骨を拾ふ。これが與へられた人生なのか。焼跡に人々は群がつてゐるが、何といふ淋しいことだ。

水道山へ登る。

ここの丘陵に竝んだ貯水地を圍んで、青草の上に避難者は群がつてゐた。そしてその人には僅の食物を分け合ひ、慰めの言葉を投げ掛け合ひ、遭難談を交し合ふなど、愛に満ちた情景が、微笑し度いやうな懐かしさを見せてゐる。

「貧しい分配は、多くの場合、愛の最高調を表はすものだ。かやうな異常時のみでなく、平常かくの如くに人々が愛し得たならばと思ふ。

ああ、又地震だ、地が揺れる。

人々は俄に不安になる。その不安を現はす、ひそやかな騒音が満ちて来る。しかし動搖が収まると、人々は又存外平氣な風で、話し合つてゐる。人々は悲しめないのだ。

感情を超越した感情で話しあつてゐる。

「あなたは子供をやられたんですか。私は親父がやられました。」

「私は女房がまだ見えません。」

かくの如く、異常にして、悲しむ可き會話が、平常の態度を以つて、寧ろ微笑を以つて交はされてゐる。他の不幸によつて、己れの不幸が慰められる。そして、不幸の人達の成る可く多いことを望み、多い程に己れは慰められてゆく。この呪ふ可き會話が、愛の言葉としての効果を齎らしてゐるのだ。總ては顛倒してゐる。異常が平常よりも多い時は、異常は平常となり、平常は異常に顛倒する。盲人の國では目の見えるのは不具なのだ。

「何處の何さんは居ませんか」と。人を探す人の聲が絶えない。夫を呼ぶ妻、親を尋ねる子、子を探す親……親が東を尋ねる時、子は西に親を呼んでゐるかも知れない。妻が南を求めてゐるのに、夫は北を探してゐるかも知れない。しかし、それ等の人々は聽て相會ふであらう。只その相會ふまで、骨を削られるやうな慘憺たる心で過さねばならないのだ。そしてその中には既に亡き夫があり、焦げた妻があらう。それ等骨肉の相會ふものは、只一片の焦げたる肉であり、一片の骨灰なのだ。

俺の寄宿してゐた高岡の家は、ビツタリと潰れて、高岡はその屋根を破壊しやうとしてゐる所であつた。もう陽は晝に近い。

水道山の裏である此處は、焼けなかつたので草も青い。

蜚語みつる夜……この邊から、私は私の記録を端折つて進めねばならない。

私の個人的な立場と、而してこの記録の餘り長くなることを恐れるので、總て地震に關聯するに貴重な物語りではあるが割愛せなければならぬ。例へば、私の多く知人たちの、いろいろ異つた遭難談の蒐録や、道徳の節制から、解放された人々の、放縱極まりなき「愛」と「憎惡」の實例や、新聞記者としての職業的立場から得た種々な挿話や、鮮人問題と日韓合併に關する批判や、私の個人的な内面的な記録などは除いて行く。そして結果を急がう。

さて、俺と高岡とは、ペンションになつた家を壊しに掛つたのである。家根に穴を開ける。天井を破る。そしてその下になつてゐる食糧品から探出しに掛つた。地震は未だ時々搖れる。四・五日前に男の子を産んだばかりの高岡君の妻は、半壊の隣家に休んでゐたが、その度に悲鳴を上げては庭に飛出した。

陽は午後になつた。

その頃だ。あの恐るべき噂は風の如く速に傳へられた。此の白晝、朝鮮人が攻めて来るさうですから……といふ囁きが、不思議なものであるとさへ、誰れも感ずるものはなかつた。掠奪と放火と姦淫と殺戮と、或は飲料水に毒を投じ、又は數百名團を爲して押寄せるといふその噂は、地震と焰との慘憺たる事實に直面して、脅え切り、混亂し切つた人々を、不安と絶望の那落にまで墜落せしめたのだつた。

俺と高岡とは何よりも先に、日本刀を掘り出すことになつた。

「まさか朝鮮人が來もすまいがね。」

「しかし、地震で折角助かつたのに、鮮人に殺されては、つまらないからな。」

「鮮人が仇を取らうといふのだらう。」

二人は話し合ひ乍ら、此邊に置いたと思ふあたりの屋根に穴を開け、やうやくにして取り出した。日本刀は少し曲つてゐたが、拔差しには差支へなく、仕込杖の方は満足だつた。

二人は、白日の下に日本刀を抜いて振廻した。庭の青草の上に腰を下して、昨日から初ての茶をすする。

地は又、しきりなしに搖れる。

そこへ市役所の山田内記課長と森田主事がやつて來た。山田は家を焼いてしまひ、森田は妻と生れたばかりの子供を殺して仕舞つた。

「天涯孤獨だ。」何でも出来るぞ。……細君なんか、又若いのが貰へるさ。」

さう言つた森田の顔は、苦痛にゆがんで見えた。

ああ、市役所で夕方まで働いて、煙の中で一夜を過して歸つて來た時、その家は焼けてゐた。若い妻と子供は灰の下に灰となつて埋まつてゐたのだ。山田は、

「地震や火事どころか、……戦争だよ戦争だよ」と言つた。身を護る用意に、二人は壊れた家の窓から鐵の格子を外して歸つて行つた。

かくて夕暮が來た。

恐るべき鮮人襲來の噂と共に、夕暮が來た。

水道貯水地の丘に立つた一人の男が、男のある家では、一人づつ出て下さアい……と怒鳴つてゐる。聽てその傍の空地へは、大勢の男が、手に手に何かの武器を持つて集まつて行つた。それは軍隊でもあるやうに、何箇少隊かに分たれた。そして此の丘へ登る道筋の要所々々を堅めることになつた。

或ものは獵銃を携へてゐた。

或ものは日本刀を背負つた。

又或ものは金剛杖の先へ斧を縛りつけた。

竹槍、鳶口、棒の先へ短刀を縛つたもの、鐵棒、燒跡から拾つた焼けた日本刀、かくの如く、雑多な武器が、裸體に近い避難者の手に握られて、身を護らうとする一心と、鬭争を豫期する恐怖とに、極端の緊張を以つて道を守り、その邊を巡回してゐるのは、物凄いい光景である。

俺や高岡は、貧しい夕飯を譲り合つて喰つた。

糧食も家もない都市に、燈火のあらう筈がない。只人間だけがある。そして暗は一面に、街をも包んで行つた。只三方に舉がる煙は、横須賀と、東京と中村町の石油倉庫とであらう。まだ天に冲する程に燃え上り、その微光が暗を縫つて、這ひ廻つた。しばらくすると、又煙に染められた月が登つた。蜚語はますます猛烈になつて來た。

俺達は日本刀を抜いて、家の前に立つた。

殺氣が満ちる。

「來たら切らずに突くんぞ。切ると間違つて味方を傷けるかも知れない。」

「ウム」

恐らく、二人がその一生交はすことのないであらう、恐ろしい會話を交換してゐた。殺し合ふことを待ち構へる心持の、氣味の悪い物凄さは、何と名狀して好いか分らない。不安・恐怖・戦慄・慘忍・焦燥、それ等あらゆる感情の交錯した緊張の最高調であると言つて好いだらう。脈搏はその影をひそめ、呼吸は自からひそやかに、動亂の極致の靜寂さとも言はうか。兎に角天地みな、ある異變を豫期する時の壓せられたる空氣に満ちてゐる。

「山と呼ばれたら、川と答へるやうに、……」

誰からともなく傳へられて來た。

何百年か前の世紀に、怨恨のために仇を報じた一團の士が使用したその儘の合言葉、只物語りにのみ相應しさうな單純で滑稽な此の言葉が、再びここに人類が殺戮し合ふため、己れの生命を托するために選ばれやうとは誰が知らう。

「山ッ」「川ッ」。

巡查が拔劔して馳つて來た。

「フーッ……フーッ……」。

一方に喚聲が上る。それは鮮人發見の聲なのだ。その聲は全部の丘陵に傳はり、一

大燥音となつて、しばらくは鳴り止まない。そのあとには又恐ろしい沈黙が來る。又喚聲があげられる。

突然、最も近い水道山に喚聲があつた。

ボンボン……ボンボン……。

ハッと思ふと、それは銃聲なのだ。何處で放つて何の方向へ向つてゐるか分らないので、銃丸は何處へ飛んで來るか解らないのだ。十發、二十發と、それは、だんだん殖えて行く。この銃聲は更らに人々の心を引締めた。

一本松小學校の方から來た男が、ピストルを持った二人の朝鮮人を通してしまつたといつて話してゐる。巡查が「この谷へ遁げ込んだのだらう」といつて坂を下つて行た。聽て歸つて來て言つた。

「追ひつめて見たら、日本人の掠奪者だつた。」

一人の男は獵銃を持つてゐた。そして言つた。

「向ふの家の二階へ遁込んだらしいので、二發うち込んで見たが居ないやうだつた。」かうして、標的なき銃丸のために、又は「山」と聞かれて、返事がなかつた爲めに、又は格構が鮮人に似てゐるといふ丈けのことで、何れ丈け數多くの同胞が倒れたことであらう。

俺は巡查に聞いた。

「朝鮮人の押寄せて来るといふのは、ほんとうなのか。そして彼等は、何か体系的な行動を取つてゐるのか。そうして何の目的を持つてゐるのだ。」

「ほんとうらしい。集團して来るか如何は解らないが、今日藤棚の方でつかまつた奴は、何々方面などと書いた紙片を持つてゐた。久保山の電柱へ縛りつけて擲り殺した奴は呼子の笛を持つてゐた。中村町の方にゐた三十人ばかりの労働者は、水のやうに見せかけて、揮發油を罐に入れて持つてゐたといふし、井戸水へ硫酸銅を投じた奴もあるさうだ。」

「さういふんなら、聯絡を取つての行動だね。」

「ウム」

根強く秘められてゐる情熱を持つて、目的のためには平氣で死ぬと聞いてゐる朝鮮の民族精神を思ふと、ありさうなことにも思はれる。

地圖は一舉に塗替へられる。しかし民族精神まではなかなか塗替へられないのだ。ああ、今酬はれてゐるのではないか。そして今後永遠に酬はれるのではないか。

斷間なしに喚聲が上がる。高岡の細君が子供の泣くのに乳をやらうとして蠟燭を

ともすと、あかりを消せ、……火を消せ、しッ……と向ふの丘で悲痛な聲で怒鳴る。燈があると鮮人の標的になるといふのだ。

「乳もやれませんか。」

何といふみじめさだ……。かくて不安と恐怖の夜は更けて行く。しかし敵は何時まで経つても見えなかつた。

焼けた足が痛んで来た。疲勞はその極に達した。病後の體はフラフラになつたので一先づ裏庭へ入つた。其處には隣りの婆さんが居た。庭に蒲團を敷いて、端座してゐる。此のお婆さんは、天理教の信者なのだ。そして頻りに天理教の教へる「世の終滅」を説いて聞かせた。

何處から何處へ飛ぶ銃丸なのか、銃聲は絶えず煩のために彩られた空を突いて飛んだ。ああこの二日間の眠り程、世にも恐ろしいことはなかつた。搖れ崩れる大地、燃ゆる大地、飢たる人々、鮮人の襲來、……其處には總ての政治も、道德も、權力も、金力も、そして思想も何の役にも立たなかつた。總ての組織が破壊され、總ての秩序が破壊された。其處に社會はない。只思想なき人々の群があるばかりだ。「思想するが故に人間であるならば、此の光景は、人類以前の混沌時代とも見られやう。その混沌として不安極ま

る眠りは一の組織の下に、一の対象を持つて、殺戮し合ふ戦場の眠りよりも恐ろしい者だ。ああ此の自然の暴逆と飢餓とを背景とした混沌境に、漠然とした対象の敵が、口から耳へと傳へられる。そして相會ふ人々は、先づ敵か味方かを確かめねばならないとは……。そしてそこには、無數の私刑が行はれたのであつた。……自分はいまその恐ろしき私刑について、親しく見聞した事のうちから、二三を話しは少し前後するかも知れぬが、記さねばならない。それはわれわれ自からを嘲笑する言葉であり、侮辱する言葉である。しがしわれわれは、この嚴然たる事實の前に立ちて、自からへの侮辱と呪咀とを語る勇氣と良心とを持たねばならないのだ……。

これは三日の午後、中村町の方へ、同僚の安否を訪ねての歸りに、あの日の濛雨に會ひ、千歳橋停留所附近に焼残つてゐる電車の中へ雨を避けた。その時の話である。

電車の中には、一の家族がゐた。焼けて赤くなつた釜や、瓶に詰められた水や、破れた七輪などもあつた。そして車掌臺は家族の爲めの勝手となり、座席はベッドともなり、居間の用を爲してゐる。

われわれと一所に四五人雨宿りの爲めに入つて來た。労働者風の硬い筋肉をした

眞黒の髯男が、その仲間と話してゐる。

「みな焼いて置いて、今度は水攻めと來やがる。」

「ハッハ……何うとも勝手におなりなさいさ。」

男はウスキーを持つてゐる。

「何うです、旦那一ぱい……。」

髯面が出してくれた茶碗に水を汲んで、それにウスキーを二三滴たらして飲んだ。足が痛み出して堪らない。俄に降りつのつて來たこの雨が、いつまでも歇まずにゐてくれると好い、とさへ思つた。

「旦那、朝鮮人は何うです。俺ア今日までに六人やりました。」

「そいつは凄いな。」

「何てつても身が護れねえ、天下晴れての人殺しだから、豪氣なものでサア。」

雨はますます非道くなつて來た。焼跡からはまだ所々煙が昇つてゐる。着物も、傘もない人々は、焼跡から亞鉛の焼板を拾つて頭に翳して、雨を防ぎながら、走り廻つてゐる。

凄い髯の労働者は話し續ける。

「この中村町なんかは、一番鮮人騒ぎが非道かつた。一人の鮮人を擱へて白狀させたら、その野郎、地震の日から十何人つて強姦したさうだ。その中でも地震の夜、亭主の居ねえうちで、女を強姦してうちへ火をつけて、赤ん坊をその中へ投込んだといふ話した。そんなのは直ぐ擱り殺してやつたが……。」

と言ふ

「電信柱へ、針金でしばりつけて、……焼けちやつて繩なんか無えんだからネ……。」
そして擲る、蹴る、鳶で頭へ穴をあける、竹槍で突く、滅茶々々でサア。しかしあいつ等、眼からポロポロ涙を流して、助けてくれつて拜がむが、決して悲鳴をあげないのが不思議だ」

といふ。底にたぎる情熱を持つて、決して死をも恐れず、黙々として寧ろ死に向ふといふ朝鮮の民族性が考へさせられる。

「け、さもやりましたよ。その川つぶちに埃箱があるでせう。その中に野郎一晩隠れてゐたらしい。腹は減るし、蚊に喰はれるし、箱の中ちやあ動きも取れねえんだから、奴さん堪らなくなつて、今朝のこのこと這ひ出した。それを見つけたから、皆で擱へようとしたんだ。」

昔、或る國に死刑よりも恐ろしい刑罰があつた。それは罰人を身動きの出来ないやうな、三尺四方位の箱の中に入れて、死ぬまで動かさずに生かして置くといふのだ。俺はそれを思ひ出し乍ら聞いてゐた。

「奴、川へ飛込んで向ふ河岸へ泳いで遁げやうとした。旦那石つて奴は中々當らねえもんですせ。みんなで石を投げたが、一も當らねえ。でとうとう舟を出した。ところが旦那、強え野郎ぢやねえか。十分位も水の中へもぐつてゐた。しばらくすると、息がつまつたと見えて、舟の直きそばへ頭を出した。そこを舟にゐた一人の野郎が鳶でグサリと頭を引掛けて、ズルズル舟へ引寄せてしまつた。……丸で材木といふ形だアネ。」

といふ。

「舟のそばへ來れば、もう滅茶々々だ。鳶口一でも死んでゐる奴を、刀で斬る、竹槍で突くんだから……。」

ああ、俺には此の勞働者を非難できない。何百といふ私刑が行はれたであらう。しかし總てが善惡の意識を超越して行はれてゐる。非難すべきでもなく、さるべきでもない。暗然たる淋しさのみが心を領してゆく。

これは七日に、大森で聞いた話である。大森に住んでゐる俺の同僚と、その妹とが、その夜一晩泊めて貰つた時に、かはるがはる話したのだ。話しは極めて短かい。斯うである。

「三日でしたか、四日でしたか、海岸で自警團の人達が、七八人團を爲して來た朝鮮人を生捕つてしまつたのです。七八人とかたまつてゐたので抵抗もしたこととせう。そのために只さへ狂氣のやうになつてゐる人達は、餘計に昂奮したと見えて、全部を針金で舟へしばりつけて、それへ石油を掛けて、火をつけて沖へ離したのですつて、………何んなでしたせう。」

といふのだ。如何なる暴君が、何年掛つて考へたとて、これ程に慘虐な刑罰は考案し得ないであらう。と思はれるやうな、こうした事實が、簡単に、平凡に、殆んど何の感激さへもないやうに人々に語られる、言ふやうに、道徳から解放され、感情から超越した人類以前の世界が再現したやうである。

兇器を捨たる日、四日、此の日も亦掠奪に明けた。鮮人騒ぎも續いた。朝から、潰れた家を破壊しては、その下から机だの、蒲團だのを取出してゐた。午に近い頃本牧から横

濱日日の小崎が漂然としてやつて來た。

そして近所にゐる都新聞の田中と三人で出掛ける。

小崎の持つてゐる仕込杖はいはゆる男達の連中の持つてゐた長脇差を直したのだといふことで、何處か江戸趣味のある、餘り高尚ではないが、才氣走つた感じのする刀だ。曠野に晒された屍の腐る匂ひの中を、殊に今年は暑いらしい残暑の陽を浴びて、汗にまみれて歩く。

「喉が乾いて堪らんから水を掘つてゆかう。」

「賛成だが………何處なんだい水倉は。」

それは確か長者町附近であつたらうと思ふ。黒山のやうな人々が怒號しながら、鋸屑にまみれた水を掘つてゐる。此貯水庫の地下室までは、あの鐵扉を溶かし得た焔も透し得なかつたのだ。鋸屑を掘ると、氷が出て來るのだ。人々はいろいろな得物で水塊を掘り當てやうとしてゐる。

或ものは産婦に與へやうために掘つてゐる。

或ものは掠奪して來た米を煮る水を得るために………。

或るものは負傷した病人を冷やそうために………。

鋸屑の間からは、冷たい水蒸氣が濛々と立昇り、人々は勞働の雜音を立てつつ、氷塊を掘當てる喜びを見出さうとしてゐる。しかしこんな涙ぐましい勞作の中にも掠奪がある。

「おい俺のを持つて行つてはいかん。」

「何を、この小僧。」

忽ち擲合が始まる騒ぎである。足の痛い俺は、刀を杖にして、人々の掘るのを見てゐた。聽て小崎と田中とが、大きな氷塊を三つばかり手拭に包んで持つて來たので、三人はそれを甜めながら、地藏坂を上つて行つた。本牧への坂を下りると、キリンビールの工場の倉庫の、巨大な樽が、暗褐色の腹を晒して倒れてゐる。

「火に追はれたのが、あそこへ遁げて行つた。腹は減る、喉は乾く、ビールをしきりに飲んだ。そして酔拂つてしまつて、その中に火に追はれるので、ビールの中へ飛込んで火を防いだが、酔拂つてゐるので、遂に溺れて仕舞つた。」

小崎が話す。喜劇でもあり、悲劇でもある。そこへ變な勞働者風の男が、鐵の棒を突いて來た。

「オイ、氷を少し分けて呉れ……………」

言葉にも態度にも、強奪し兼ねないものだ。俺は少し離れて例の長脇差の杖を持つて見て居た。

「遠くから運んで來たんだ、やれないよ。」

「欲しかつたら自分で取つて來給へ。」

二人は拒絶して、坂を下つて行く。男は鐵の棒で威赫するやうに追すがつて、

「何うしても呉れねえか……………」

「いよいよ喧嘩だな、と思つたので、俺は急いで近づいて行つた。」

「オイ何うしたんだ。」

男は憎惡に満ちた眼で、俺を睨んだ。俺は威赫するために、カチリと音をさせて刀を抜いた。

抜いてから「しまつた」と思つたが、抜いたからには仕方がない。その男が刀を見て、退かないならば、俺は殺さねばならない。殺さないまでも傷けなければならぬのだ。勢に引づられるより外に仕方がないのだ。男が遁いで呉れば好い。俺も助かる。處がその瞬間、それは實に都合よく行つた。男は刀を見ると一散に遁げて行つたからだ。

「馬鹿な奴。」

三人はさう言つて笑つたが、俺の笑ひは、眞物ではなかつた。小崎の家へ着いて、しばらく休んだ。

餘程、ひるすぎになつてから歸へることにして、本牧を立つ。今度はだんびらは捨てて棒切れを杖にして歩いた。電車道まで來ると、

そこに

「戒嚴令敷かる。神奈川縣廳。」

といふ貼紙と

「奥平少將の帥ゆる三ヶ聯隊到着せり。」

といふ貼紙と

「戒嚴令布かる。市民にして兇器を所持するものは銃殺さるべし。戒嚴司令部。」

といふ物凄い貼紙とが竝んでゐる。

これで漸く道を歩くことが出来るやうになつたのだと思ふ。そして、秩序も、これら多少は回復するだらうと思ふ。

又地藏坂を越えるのは並大抵の努力ではないので、まだ時々搖れる大地を、氣味悪く

感じながらも、櫻道から電車の隧道をぐり初めた。煉瓦の間から滴れる雫の音と、枕木を踏んで歩く人々の足音が、いやに反響して氣持が悪く、やうやく西の橋の出口まで來た。トンネルを吹き通す風が非常に涼しいので、その出口で暫らく休みながら、ウヨウヨ行交ふ人々の群をながめた。

ああ、その人々が、それは人間かと思はれる程にみじめである。それは動物のやうである。食を如何にして得るかの確信もなく、何故生きねばならぬも知らず、いや適切に言ふならば「生き度い」といふ意識さへはつきり持つてゐずに、只本能的に飢を満たすべく、食を探して歩く。飢えにのみ敏感の動物のやうである。

その人々が頭から脚まで泥にまみれて、持つてゐたものは何なのだ。

腐れ初めた屍馬の肉を、削つたのではないか。

黒く焦げた澤庵の二・三本ではないか。

焼跡に轉つた鍋とバケツではないか。

そして焼けても未だ破裂してゐない罐詰の類である。

そうして、焼跡から掘出した氷塊なのだ。

みじめである。しかし此の日から、人々の心には希望が育まれて行つた。人々は兇

器を捨てても安心して道を歩くことが出来た。この夜初めて、軍隊の駐屯を知らせる喇叭が、恐らく全市の要所々々から響き渡つたのだ。燈光なく暗黒の空を港の軍艦から放つ探照燈が、僅に走つてゐた。横濱は横濱であつても市街でない。曠野である。横濱の上を囁々と渡る喇叭の響きは、先づ人々をして流言蜚語の恐怖から救つたのだつた。

……あの震災の體驗者としても、矢張り私は、私だけの經驗しか持たないのであるから、餘りに長く、そして詳細を極めて、それは横濱のあの事件を、文字通りの九牛の一毛しか傳へ得ないのである。軍隊が派遣せられて、あの混沌たる横濱に秩序らしいものの曙光を見出すに至つた所で、筆を擱くのが最も好い一段落であらうと信ずる。(終)

四 山下町會社から公園まで

五月 女

思ひ出すだに身の毛も竦つ彼の物凄かつた慘狀が、今も尙ほまざまざと目の奥深く刻まれてゐる。大正十二年も恐怖の中に過ぎ、十三年も過ぎた今、此處に新しく云はん

とすれば萬感交々至つて、思ふ半も記し難い。唯筆の進むがままに、吾が再生を得し一事を記して置かう。

私は大災害の起る數分前に、外出先から社に歸つた。私の居た會社は、他の何處の會社にも味ふ事の出来ない自信する程、同輩愛に充ちた會社であつた。吾々は常に晝食を外に需めに行く代りに、事務室の一部に食卓を設けて珈琲を沸し、麵麭を焼き、一つのバターを共につついて、家族的に食ふのであつた。而して吾が常に一家の如く團欒の中に食を取る事が出来たのも、他に主婦の役を勤めて呉れたA子嬢と云ふ女事務員が居たからだ。私は後に至つて、此の女事務員の再生を得た天運を記する爲めに、吾々のグループの一として、特にA嬢の名を記したのである。私共の會社には他にS君、I君と呼ぶ親愛の友が居た。

室内に入つて汗を拭く爲めに、上衣を脱いで帽子を机の上に置いた儘、晝食も近いのでS君を呼んで、食卓に近い窓口に冷氣を食つて居た。異様な音響と共に、大地が覆へるやうな感がした。「アッ地震だS君出給へ」と云つた儘、自分は戸外へ飛び出した。私は咄嗟の場合、公園を思ひ出して、其處へ逃げる爲めに裏口へ出た。私が此瞬間に公園を思ひ出したのには原因があつた。それは前年の春、吾々の胸を驚かした突發的大激

震があつた事だ。其の時も南京町の某支那料理亭の娘が、同家の二階倒壊の爲めに無惨の壓死を遂げた。之は私も目撃した。私は未だ曾て此時程の地震を経験して居なかつた。而し之が此後に起るべき大地震の前兆であらうとは、世の人々の大半が豫想し得なかつた事であらう。此時から私は、地震があつたら逸早く公園に逃れば先づ安心と、深く胸中に印されたのであつた。故に斯る咄嗟の際も、無心に公園を思ひ出したのであつたと思ふ。而し私が戸外に出た時は、激震の眞最中で、迤も公園どころでない。足は浚はれて轉ぶが如く、眼は眩暈のした如く、事物の眞正をさへ判じ得ず、殆んど自分の身體を弄ばれる感がした。此瞬間百雷の一時に落下した如く、大音響と共に私共の會社に隣接して居つた二階建の煉瓦造りの倉庫が、俄然私の目前に投げ出されたやうに倒壊した。思はず再び室内に駆け込んだ。而しこんな寸分の餘裕もない時に於てさへ、理性は機敏に働くものだ。私は飛び込んだ時、目前に大石炭函が見えた。此中へ入ればまさか此の函が潰れる事は無からうと、淺慕な考への中に其の蓋を取つた。而し他の神経が又けたたましく我を呼び返へす。危険危険それは若し壁や天井が倒壊したなら函は無事であつたにせよ、其の中に入つて上から押をされたなら、いくら自分の身體は無事を得ても、出ることは出来ない。蓋し私は此の時に火災と云ふ事を更に豫期して居らなかつた。こんな瞬間に、總ゆる神経は頭の中で混亂した。壁は崩れる。天井はバラバラ落ちて来る。もうたまらなくなつて、何物も考へる術なく、例の食卓の下へ轉ぶが如く潜り込んだ。こんな事をして居た間に何時か自分の頭の上に何か落下したと見えて、大きな瘤が出来て居たことを、避難した後に見出した。此位の事で済んだ事は僥倖だ。若し大きな石塊でも落ちたのであつたら自分は今頃歸らぬ旅の人となつて居たかも知れない。而し私は何うやら身の安全を得たが、友のS君が氣になる。周邊は暗黒で、何物も見えない。S君の悲壯の聲が頻りに聞える。私は續けさきに彼を呼んだ。而し彼の姿は見えない。地震が稍、静まつた頃、彼は夢中になつて轉がり込んで来た。彼は私の身體へしつかり齧付いて聲を震はせながら云ふ。

「H君大丈夫だらうか。私も固より非常な恐怖に襲はれて居たので、返す言葉がない。もう此うなつたら天運を待つ許り。」

二人はテーブルに齧付いて居た。然しテーブルは僅か二人の頭を隠すに過ぎなかつた。ほんたうに頭隠して尻隠さずだ。地震は漸く静まつた。取るものも取りあへず、外へ飛び出したが、餘りに災害の大きいのに茫然としてしまつた。總てのビルディングは殆んど形のないまでに倒壊して居る。横濱本町通りの一偉觀としての建物、羅馬

の舊都にでも見られるやうな古代を偲ばする六階の建物インターナショナルビルディング、エレベーター迄も架けられてあるのだから、如何に高い建物であつたかは想像が出来やう。之が殆んど一階位の高さに平になつてしまつた。此ビルディング内丈けでも多大の犠牲者を出したと云ふ。

私の會社は木骨コンクリートの建物であつたのと、階上に餘り重量の物が無かつた爲めに幸ひに酷く潰れなかつた。同じ建物であつても、隣れる會社などは階上に大金庫が幾つも据え付けてあつた爲か、目茶々々に潰れてしまつた。

逃れ出た人々は、各、公園々と叫びながら倒壊した瓦石や木材で埋められた道を攀りながら、公園指して逃れた。私どもの直ぐ筋向ふにあつた大坂商船ビルディングの建物も三階であつたが、それが一丈位の煉瓦の山の様に潰れて、家の形など更に無い。血に塗れた外國婦人が寢衣姿の儘で、半狂亂の如くになつて、愛兒の救ひを求めつつ、其の煉瓦の山へ登りつ下りつ、逃れ行く人々の手に縋つて泣き崩れて居た。然し誰もが手を延すべき術がない。地震は尙ほも止まない。

吾々二人は再び室内に入つて、出来る丈の整理をした。然し此の危険を冒した努力が、後に至つて無意味に終つた事が、口惜しくも残念であつた。此日は朝から陰慘な空

模様であつたので、私は長靴を穿いて雨用意をして來た。然し會社に居つて、彼の馬賊じみた長靴も穿いて居られないので、上草履に穿き代へて居た。勿論再び室内に入つて来る餘裕があつたのだから、長靴に穿き代る暇は充分あつたが、其事にも氣付かず上衣を手にした二人は外へ逃れた。もう人は餘り居ない。ふと見ると裏通りの彼方に煙が上る。火事だ。此處には居られない。二人は手を取つて公園へ向つた。然しこれが數時間の後に全市火災に包まれやうとは、山下町邊の石許りの中に居た吾々には考へられなかつた。吾々二人が商船ビルディングの下まで來た時に、潰れた商船ビルディングの上で、頻りに救ひを求める婦人がある。然し彼女自身は別に痛手を負つて居る様子も見えない。吾々は云つた。「早く下りて來なさい。」其時彼女は云ふ。私ではない、此の煉瓦の下に一人埋まつて居るから、出して下さいと。吾々二人は躊躇した。逆も出す事は出来まい。火は見えて來た。人を助けるどころではない。吾々の身に危険が迫つて來た。氣の毒とは思ひながら、吾々二人は行き過ぎ様とした時、尙ほも續けて叫ぶ。聞くに堪え兼ねて、二人は上に登つた。其際其婦人は此處に埋つて居るから御願ひしますと云つた儘、下りて行つてしまつた。煉瓦の中から男の聲がする。「どなたか知りませんが、頭の上の石だけ取つて息をさせて下さい。」吾々二人は必死になつ

て其の聲のする所を掘つた。約二尺許り煉瓦を取り除くと、黒いものを發見した。私は頭かと思つて手を差延べた。其の時彼は云ふ、頭に洋傘を被つて居りますから、それを取つて下さい。私は不思議に思つたが、直ぐポケットからナイフを取り出して、洋傘を引裂いた。此のとき彼は、もう首が出ましたから、行つて下さい、これで息が出来ます。然し彼は首が出たきりで肩から下は煉瓦で埋つて居る。此人もまだ火災を思ひ出さなかつたのだらう。もう君そんな場合でない。吾々も必死に掘るから、一時も早く出なければ、火は近付いて居る。漸く身體半分頃まで掘り出したので襟のところを掴んで二人で無理無體に引っぱり出した。彼は不思議と云はうか、微傷だに負つてゐなかつた。彼は狂氣の如く喜んで、公園に走つた。吾々二人が下に下りた時、其處に一人の大男の外人が倒れてゐた。君公園へ行かう。もう火が來た危険だ。彼は涙をたたへて、頭を左右に振る。見れば足を折つて居る様だ。吾々は見捨てるに忍びず、此大男を二人で荷つて、公園へ辿り着いた。電線は蜘蛛の巣の如く地を蔽ひ、電柱や瓦石は通路を遮つて、吾自身の歩行さへ困難を感じる。公園附近まで來た時は、水は膝を沒して、危険此上もない。公園へ入つた頃は、火は一面に擴がつて、邊は四方からの火攻め、爆音は頻々として起り、鐵片や瓦石の破片は空を飛散して、群集の中に落下する。私は終始力め

て大きな樹木の下に腰を下して居た。それは爆音に因つて空を散飛する鐵片や瓦石の落下を恐れたからだ。公園迄無事に避難して、不幸にも酸素罐の爆發したのが落下して三人同時に無慘の死を遂げた哀の人もあつた。火勢は益々猛烈になる。風は加はる。火は刻々と公園に近づく。午後五時頃には、吾々の避難して居つた處から、約二十間位の處迄燃え抜けた。之が一軒か二軒位の火事であつたら左程でもない。四方火の海と化した中に、何萬の群集は宛然生地獄の感だ。顔はびりびりする。呼吸は胸苦しく感ずる。吾々は此處迄逃れて、此處に最後を遂げるのかと、互に顔を見合はせて、無言の儘俯向く。猛火は更に衰へず、數時間は天運に任せた。南無妙法蓮華經の唱へは、悲壯に聞える。眞に神の御恵を希ふ時はこんな時だらう。

夜の十二時頃になつた時、附近の殆んど凡ての者は、九分通り焼き盡されて、火勢は稍、衰へた感がした。どうやら吾々は死線を脱した。翌二日午前一時二時頃に至つて、漸く安堵の胸を撫で下す事が出來た。今迄の疲勞が一時に沸いて來る。互にしだらなくぐしやぐしやの泥の中に横たはる。私の直ぐ側に老外人が日本人の介抱に熱涙を浮べて感謝して居るのを見た。頭部に仲々の重傷を負つて居た。こんな時に負傷した者は實に悲惨だ、醫藥の手當は得られない。苦痛と悲しみの中に悶々と過さねばな

らない。

夜の白々明の頃、米國船から食料を施して居ると云ふ事を聞いた。吾々は甦へつた感じがした。前日の晝から、一滴の水も口にしないのだから、安心をすると益々空腹を訴へる。然し一日や二日食はなくとも吾々は死なない。唯無心の子供が饑に泣かれるには、迎も見るに忍びない。米船の着いて居る海岸へ行く道の兩側は未だ熾に燃えて居る。この危険を冒して行くのも、仲々容易のことでない。私はS君と二人で、萬難を冒して海岸に走つた。此時は既に船に積まれたパンや清水は殆んど盡きて居た。私共は空しく歸らねばならなかつた。漸く夜も明けた。火も大分下火になつた。公園にあつた人々は漸く我に歸つた。斯うなると我家の安否が氣付はれ、S君と別れて、我家に急いだ。勿論電車も汽車も破壊されて、何物もない。幾里あつても徒歩で行くよりはかに方法がない。道の兩側は未だ薄氣味の悪い程炎々として、煙を揚げて居る此中を走りに走つて、櫻木町から神奈川に出で、一目散に鶴見まで走り續けた。無事だ無事だ。我家は依然として立つて居る。近所の人々は皆私を嬉し涙に迎へて呉れた。こんな時の感想は迎も筆舌には盡されない。

私の近隣から東京横濱方面に勤めて居た人も多かつたが、殆んど一日の夜半迄には

歸宅した。二日の晝迄に歸らなかつた人は、私と他に一人あつた。私は二日の十一時頃歸へる事が出来たが、他の一人は其の夜迄には歸へらなかつた。翌朝に至るも歸らない。其日も暮れた。其人の妻女は愛兒を抱いて、朝な夕なに驛の彼方に夫の安否を氣付ひつつ出て行く。遂に其人は永遠に歸らなかつた。

三日に至ると、ふと暴動騒ぎが勃發した。吾々は此處に三度恐怖に襲はれた。頻々として暴徒襲來が宣傳される。三日の夜からは、夜を徹して吾々男子の凡ては、老若を問はず、之が警戒の任に當らねばならなかつた。宛然戰鬪準備だ。手に手に兇器を携へて、往々濶歩する。銃聲喊聲は頻々として起る。老幼婦女は泣き叫ぶ。眞に戰亂の巷は斯くの如きものであらう。吾々は數日を経て、最後の不安に襲はれた。食料問題だ。ありとあらゆるものを食ひ盡して、今は何物をも食ふべき物が無い。

私は之より數日の後、I君とA嬢の無事を聞いた。I君は東京に在つて餘り苦痛を感じなかつた。A嬢は丁度暑中休暇であつた爲め、兩親の下にあつて、共に難を免かれた。若し彼女が常の如く會社に在つたならば、彼女の運命は斷たれて居つたであらう。それは彼女として晝食時間には外出するのが例であつた。吾々は彼女を失つた時、何ぞ翻々として彼女の兩親に見えられやう。

聽て光明は聞かれた。不安の日は一日と薄らいだ。平和の鐘は吾々を暖き睡りに導く。私は此處に吾々の幸福を欣び親愛なる友の永劫に幸あらん事を祈る。

附

「災厄當時私は山下町七十二番館久仁眞珠株式會社横濱支店に勤務して居りました、避難の途筋は本町通りを真直に、大坂商船株式會社の前を薩摩町消防署前の電車通りに出で一路公園に逃れましたが、途中電車通りに於ける兩側の建物は、相當破壊はして居つた様に覺えて居りますが、倒潰して居つたのは餘り見受けなかつた様に記憶して居ります。僅か一二町を隔てた同一地に於ける建物が、本町通りに面して居つた者が殆んど倒潰して居るにも拘らず、電車通り即ち公園に沿ふた側の建物が、比較的倒潰して居らなかつたのは、眞に建築の方法や、基礎強弱の關係もありませうが、地形に依る影響も大なる者であると云ふ事が考へられます。」

五 神奈川柳町方面に於ける遭難談

佐 藤 嘉 平

大震災の當日も、私は朝九時頃居を出て、神奈川郵便局へ一寸立寄り、其れから西平沼

の株式會社帝國蓄音機商會へ赴き、契約の納入石炭の話をして、更に神奈川縣港務部へ行く筈になつてゐたが、此時既に十一時三十分過ぎにて午前中には間に合はず、最早晝餐に間近いから、行くのは見合せて、近い所へ一二箇所立寄つて歸らうと、南幸町權田伸銅所へ立寄り、要談を済し、其所を出て、直ぐ隣の醍醐鐵工所の前を歩ゐてゐたが、生溫い南風が吹いて居て、今日は何だかイヤに氣持の悪い日だと思つて居ると、俄然ドーンと云ふ音が何處とも知れず、聞へたと思つて居る瞬間、續いてゴーンと云ふ一大音響と共に、目の前の電柱が非常に烈しく搖れ出し、邊りの塀や、家屋が激烈な震動で倒壊し始めたので、此れは大變！大地震だなと氣付いた時には、自身は既に路上へ倒されて居た。直ぐ立上つたが、倒れ又起き上つては倒され、こんな事を十數回繰返しながらも、死にたくないと云ふ一念から、よろめきながら這ふ様にして漸く、四ツ辻へ出ると、恰も横濱ゴム會社の大煙突が唸りを生じて倒壊したのは、咄嗟に、アア大地震と猶一層より以上大きく恐怖の印象を與へしめた。瓦の雨に一つ二つ打付かつたかも知れないが、もう唯夢中で逃げようと焦つたので、氣付かなかつた。

邊りの濛々とした土煙の裡に、助けて呉れ！助けて！とアツチ、コツチから物凄い悲鳴猛烈な地割からは水を噴き出し、其れの搖れ返しが連續的に襲ひ來り、グラグラする

ので、奈落へ落ちるのじやあ有るまいかと、身も魂も消え入る思ひであつた。そして、是で世が終る最後審判の時かも知れない！どうか妻や兒供に一目逢ひたいと夢中になつて、淺間町の方へ歩いたが、何分搖れ返しがはげしく、思ふやうに歩行が出来なかつた。この時横濱ゴム會社や、ライジングサン石油會社油槽所から、火災を起し、火の手はドンドン上り、火事だ火事だと、泣叫びて騒ぐ人々、あの音響は海嘯だと逃げ惑ふ人々の、阿鼻叫喚、刹那は眞に此の世からなる地獄の責苦を顯出し、アア如何に凄絶の極みであらうと思つた。私はこんな所にぐづぐづして居れば、死ぬより外に道はない。然し歩いて行つても、途中で死ぬかも知れない。ドオセ死ぬなら、行ける所迄行つて死ぬふと、更に勇氣を鼓舞して、漸く淺間町へ駆けぬけ、輕井澤へ來ると、比較的倒壊家屋は少い計りで無く、殊に地割なぞ殆んど目立たず、人々幾分落付て居る様であるから、茲で始めて自分も死なずに済むかと思つた。そして自分の家は、昨年四月の地震でさへも、可なり、震動が烈しく、棚から物が落ちたと云ふ程度だから、所詮倒壊は免れまい。其れにしても妻や兒供はドウであらう。又店の方はドウなつて仕舞つたらうかと氣が氣でなく、心を急め、駆けやうとすれば、する程歩みは遅々として、抄取らず、眞直ぐに、上臺町を通つて來たが、上臺町には一軒の倒壊家屋をも見受けず、唯中程の或る大きな家の

石垣の崩壊して居るを見たのみで、至極靜穩に返り、路上に出て居た人々は私に「横濱の方は如何ですか？」と不安そうに聞いた。私は横濱のことは解らぬが、随分酷いでしやう幸町や岡野町でさへ倒壊家屋が澤山有り、其れに地割が猛烈で危険でした。死人も澤山あるでせう。横濱ゴム會社や、ライジング石油會社から火災が起り、おまけに海嘯が來ると云つて大變です」と云ふ言葉を殘して、神奈川の鐵道橋を渡り、宮の町迄來ると、頻りに渴を覺ゆる事甚だし、遂に堪り兼ねて、勢國堂パン店の勝手口へ飛込み、水道のコックへ手を掛けて廻して見たが、一滴の水だも出ぬ。丁度其處に居た二三名の人が「井戸の水なら有りますから、お上りなさい」と親切に杓へ一杯呉れた。感謝して喉を潤し、成程此の大地震ぢやあ水道の出る筈がないと、後で氣が付いた。水一杯に心身も甦つた目で、神奈川通りを眺むると、地割はなく、倒壊家屋の目立つてないのは寧ろ意外であつた。此れでは自分の家や、店の方も大丈夫かも知れないと思ひつつ、店へ戻つて見ると、果せる哉大丈夫であつた。ヤット安堵の胸を撫で下す閑も無く、柳町が火事と聞き、天空を驅る様に急いで自宅へ歸つて見れば、幸ひ半倒壊ではあつたが、何しろ直ぐ近所の日本リネット株式會社乾燥場から發火した火は、忽ち同工場數棟の建物を猛火に包み、濛々たる黒煙を吐きつつ、見る見る中に亦北側の家屋十四五軒をも焔々たる紅蓮

の舌に包んで仕舞つて、私の隣りの家からもチラチラと炎が見えて居た。私の家も正に危機一髪、物凄い火炎の一砥めに見舞はれんとして居るので驚いて無我夢中で、家中へ飛込んだ。妻や子供の名を呼べども、何等答へ無く、多分近所へ避難して居るだらうと、我れに答へ、倒れて居た簞笥より、常に非常持退として引出しに入れ置いた小風呂敷包(通帳等)を取出し、更に子供の着類若干と共に大風呂敷に包み、其れを妻や子供の居る所へ持行かんと、近所を尋ねたり人々に聞いたりして見たが、妻子の行衛一向不明なのに聊か疑問を胸に抱ゐた。止むを得ず一時其風呂敷包を柳町野原に避難中の知人に預け置き、四丁程距離ある妻の實家に付いても聞質したが、矢張り不明。

私は歩きながら殊に依ると二ッ谷通りには凄惨な全潰家屋が數軒あつたから、或はいつも買物に行く大安市場の往きか返りに軒先を通り、運悪く其等の下敷になつて仕舞つたのではあるまいかと、憂慮措く能はなかつた。折柄、二十一、二歳位の令嬢が、凄しく息急切て駆け来り、「お母さんが死そうですから、ドオカ助けて下さい」と泣聲になつて叫ぶ。私は救助しやうと直に行つて見れば、日本リンネツト會社の前なる角の二階家にて、第一震の一搖れで脆くも滅茶々に全潰し、母とか云ふ人が逃げ遅れ、無慘にも其下敷となつて仕舞つたが、直ぐ前の會社から火災を起したので、誰れしも逃げるが先で、救

ひ出す暇が無かつたと見える。猛火の中からは時々黒煙の渦巻立昇り、紅の火炎は遠慮なく火勢を延ばし、火の粉は雨霰れと飛び頻り、實に危険であつたが、其近所の二三名の人達と協力して、危く付いた飛火を必死になつて何度か拂消し、漸く救ひ出して見ると、哀れにも既に事切れ壓死して居た。噫、其令嬢の歎きは一入悲痛であつた。亦私達も悲愴の涙に咽ぶ。

私は猶更自分の妻子が斯く悲慘になつては居ないだらうかと思案しつつ火炎で自宅が焼けて居るかいけないかをうち忘れ、自宅裏へ一旦ひき返すと、神奈川第一消防署の自動車ポンプが馳付けて居て、小川の水を利用して、風下の私の家の所で防火につとめて居たが、幸ひ急に風向が變り、火先が鈍つたのと、猶他の場所にも火災が起つたので引上げて行つた。御蔭と私の家も辛うじて類焼を免れた様に思へたが、未だ隣りの板塀の火が消へずに燃へつつあつたから、風向の模様で、いつ何時類焼するか解らず、實に危険に瀕しつつあつたが、私は最初から妻子が無事なればよいがと、其れ計り思つて居たので、火災に驚いて居たが荷物は何一つ取出す勇氣がなかつた。否寧ろ地震の揺返しが止まないもので、恟々として此先未だドウなるか解らない。荷物なんか焼けても仕方がないと覺悟して、唯一同の生命さへあればよいがと、諦めて、拱手して居たのである。此

時にはもう疾に近所の、日本光機工業株式會社の職工さん達數名が出て来て、邊りの類焼した七八軒の家の荷物を焼けない前に悉く取出して救つてやつて仕舞つて、猶私の家の道具をも親切に取出して呉れて居た。其れ計りでなく、一方の人数は燃へつつある隣りの板塀の火を必死になつて消止めて呉れたので、北方の火の手は幸ひ私の隣りで全く喰止まり、焼残つた私の家から以北は、もう安全となつたのである。私は自分の家が焼失は止むを得ざる者と覺悟して居たにも拘らず、不思議にも焼残つたのは、不幸中の幸ひであると思つた。然し不思議ではなかつた。其れは職工さん達の必死な防火の努力と、美しき救助する精神空からずして、焼失を免れた所以であつた。こうした未曾有の天變地異の際には、誰れしも何を扱て措き、自宅へ駆付けるのが人情の然らしむる處であつて、中々人事處ではない。其れであるに職工さん達數名は、自家の事を忘れ、自己を忘れ、何の由縁もない唯會社の近所に住んで居ると云ふのみで、私共を救て呉れた。其行動たるや、眞に義俠的と云はすして何ぞや。沈着なる其の態度は實に見上げた立派なる美談であらねばならぬ。私は此の賞讃すべき模範的行ひに對して、心から熱誠をこめて感謝した。そして猶其の美しき舉動に對し、精神的永久に謝意を表したいと思ふた。聽て此の職工さんの中の一人に、私の妻子の事を尋ねると、多分アッテ

の方へ行つた様に思ひましたけれども、中川の方へ指差したので、其方面へ行き、妻子の名を呼びながら探し歩いたところ、果して中川先の田圃中に於て避難して居るのを見出した。ここで妻子の無事なる事を見て、本當に喜んだ。亦妻子も私の無事なるのを見て、泣いて喜んだ。此時もう何時だろうかと、洋服の内側ポケットから懷中時計を取り出して時間を見ると、正確か狂つて居るかはよく解らなかつたけれども、幸ひ止らずコチコチ動いて丁度三時を示して居た。妻の話は斯ふであつた。

「私は晝飯の支度を仕様と思つたが、蟲が知らずか、壽本年四月生の男兒が急に泣き出して、ドウ騙しても黙らないので仕方がなく抱いて、玄關の敷居の上に立つて、表の方を眺めさせて居ると、突然ガタガタ、ああ地震だ、亦例の地震かと思つて油斷して居ると、其中非常に強烈な震動が始まり、壁が崩れる。さあ大變大地震！と躊躇めきながら、夢中で表へ飛出したが、道路が狭いので、瓦の雨が頻りに降り、小兒に打つかりさうで危険であつたけれども、漸く二軒先の空地へ逃げた。美枝子(十一歳の女子)も近所へ遊びに行つて居たが、無事に逃がれて、丁度其所へ來合せて居た。未だ此時は盛に震動中であつたが、既に日本リネット會社から火災を起し、人々がああ火事だ大變！と騒ぐ瞬間、南風に煽られ、直ぐオルガンのある學校の先生の家、火元の會社からは北へ約二十間程離れ

て居て私の家よりは南へ五軒隔て居る所に飛火したので、恰も兩方一時に火を出した様に見え、兩方からは益々燃え擴がり、空地に居ても忽ち危険が迫つて來て、近所の人達もアッチコッチへ思ひ思ひに逃げ走るから、私共も更に此所まで逃げ延びて避難して居たが、私共が此所へ來ると間もなく、横濱へ行つてゐた人が二人ばかり歸つて來て、横濱は實に酷い地震で、潰れると直ぐアッチコッチから火事が出て、逃げたいにも逃げられなかつたけれども、僕等は一歩早い方だつたから、漸く逃げて來られた。今歸て來ぬ人は皆やラれて仕舞つたらうと云はれ、私は幸ひ夫が神奈川に居れば助かつたかも知れないけれども、横濱へ行つて居れば六ヶ敷いかも知れないと思ひ、其れに助つたものなら疾うに歸つて來る筈だが、未だに歸て來れぬとすれば、或は危いかも知れないと、其れ計りが非常に心配に堪えなかつた。

そして妻は地震と同時に、直ぐ近所からの火事、おまけに乳呑兒を抱へて居なければならぬ、爲めに極度に危険を感じ、恐怖と狼狽とで、必要品をさへ何一つ取出し能はなかつたのは、誠に残念であると悔んで、自分の家が全然焼失した積りになつて居たから、私は自分が可なり早く南幸町から逃げ歸つて來たが、妻子の行衛を探して居た爲め時間の経過した事や、日本光機會社の職工さん達が、一生懸命救つて呉れた故に、幸ひ我

家も類焼を免れ得た次第や、亦荷物も總て満足なる譯を話すと、妻は其意外に寧ろ驚き、少時茫然としたが、之も偏に、日本光機會社の職工さんの御蔭かと深く鳴謝して悦んだ。妙なもので、安心すると急に空腹を覺へた。夫計りでなく、妻が一度食を斷てば直に乳兒へ影響を與へ、度々續けば衰弱の因と考へ、ゾボンのポケットへ手を差入ると、昨日受取つた月給の幾分かが紛失せず、幸ひ所持してゐたから、其金で直ぐ近所の駄菓子屋へ行つて有り丈けのパンと、ラムネを買占めて來て、私一家の者や其所に一團となつて居た人々と喫した。充分とは行かぬ迄も、兎に角一時空腹を凌ぐ事が出來た。避難して居るには自宅附近の方が知り合が多くて都合がよいと、夕方五時半頃、此所を引拂つて、自宅裏の空地へ移つた。焼けた日本リンネット株式會社は柳町通りの北端なる曲り角に在りて、面積約五千坪を有し、周圍には生垣、板塀等を廻らし、其の中に數棟の木造建物を包容したる相當の織物工場であつて、表口は柳町通りにて、東南に向つて居た。會社の右横手には約千坪の柳町野原あり、左横丁は道路の向側が鳥越町であつて、其の直ぐ裏は鳥越山である。西裏手に當る所は、細き裏道と小川を隔つて平尾前の埋立地へ續き、二ッ谷工業學校裏になる。北裏口には板塀を稍離れて、大小幾多の住宅が並立し、白樂町・中川町・齋藤分方面へ接續して居た。

私共の家は此の北裏口から少し隔てた所にあつたが、此時焼け残つた、私の家の所から、日本リネット會社の焼跡を見て、只目に入るものは、煉瓦の大煙突の倒壊残りが未だ一丈ばかり地上に淋しく立つてゐた。其の哀れな姿のみだ。猶其の先へ行つて東南を見て更に驚いた！一望荒涼と變り、茫々と萬物を餘さず灰燼に歸し去つて居た。ここに東神奈川北部に於て誇る唯一の新開住宅地も、建設の日未だ淺くして、蕾の中に一朝にして斯く哀れな焦土と化し、只焼瓦や焼トタンが残骸として幾分其の倂を偲ぶに過ぎないのみであつた。先刻私の隣で燃えて居る時、反對の方向へ風向きが變つた事は知つて居るが、僅の短時間内に、コッチの方面がまさか斯ふ迄廣く一物も餘さず焼拂はれて仕舞ふとは思はなかつた。其焼失した區域は、柳町過半、鳥越町山上の十二三軒を残して外全部、富家町、東海鉛管株式會社の一角を除く外全部、稻荷町全部、立町過半等であつて、猶ほ東海道線の鐵道線路を越へた先の浦島小學校や其他も、神明町の横濱製網株式會社から出た火で燃へて仕舞つて居た。私共が驚く計りでなく、亦近所の人達も此の空地へ集つて來て、荒寥たる焼野原を眺めて、皆口々に「随分酷く焼けましたね！知らない間にこんなに廣く焼けて仕舞ふとは思ひませんでした」と驚いて居た。私は曩に知人へ預けて置いた風呂敷包を取りに行くと知人は既に其所の野原を引拂つ

て、他へ移つて居たので、何所へ行つたろうかと思つて、何氣なく路傍の草叢の中を凝視して居ると、一つの風呂敷包が隠してあつた。よく見ると、自分の風呂敷であつたから、直ぐ持歸つたが、考へて見ると、知人と云つても、所も知らず名も知らぬ唯顔を見知つて居るに過ぎない人であるが、此騒然として居る最中、よく他人の邪魔物なんかを預かつて呉れた。そして避難場所を變へる際、多分其れを返へさうと思つて、私の居る先を探したらうが、生憎不明なので、持て餘した末、仕方がなく、人眼に觸れない様に草叢の中へ潜めて置けば大丈夫、若し逢へなくても其の中に私が探して持つて行くに違ひないと思つて、態と草叢の中へ隠して置いて呉れたものだろうと思つた。私は其親切なる知人に出會次第厚く謝意を述べる積りで居た。

もう徐ろ徐ろ晚餐の時刻であつても、此所へ集つた人達は、何等其仕度の氣配なく、遠く望むと各所から燃え上る火災の煙りに恐愕して、只騒いで居たけれども、中には氣の毒に焼け出された人々も居るし、亦夫が勤め先から歸らぬ人も居たから、喰ふ事などはソッチのけで心配して騒ぐのは無理ならぬ事であつたらう。私は飯を喰ふ餘裕がある時に充分喰つて置かないと、いざと云ふ場合に困るだろう。それに未だ間斷なく、斯う搖れ續けだから、此先が思ひやられると思つて、自宅の米櫃に残つて居た米を、二町餘隔

つて居る鳥越山の麓の清水で洗つて来て、釜に入れ二度程炊いた。之を女人達の手を借りて鹽結びにして、集つて居る一團の人々と共に腹一杯食した。そして私は今晚は此所で皆露宿をするより外に仕方がないと思つて、自宅の疊を十二三疊運んで来て並べ、其れへ蒲團を敷詰めて置いたが、夜に入るにしたがつて、横濱も神奈川も新子安方面も一面火の海と化し、呪ひの火雲は空を壓し、殊にスタンダードやライジングサン石油會社のタンクが爆發する度毎に、大音響と共に火炎が大空高く飛び上り、魔の舌の如き猛火を吐き、凄慘の氣は邊りを蔽ふた。皆此物凄き光景に慄き、誰れ一人として寢に就く勇氣は無かつた。只各の身寄りの事や、亦夫の未だ歸らぬ人は、夫の身の上を案じたり、神奈川の火の海が段々近づいて来て、あの二ッ谷工業學校や、此の日本光機會社などへ付く様な事は、なかりうかと心配したり、亦遙に東京の空も酷く明いから、東京も火災が起つて居るだらうなどと話し合つて居ると、零時三十分頃、私の隣りの柿崎さんと云ふ人が、東京丸の内某會社へ勤めて居られたが、猛火や種々の危険を冒し、漸く九死に一生を得て、自轉車で此所へ還つて來た。此人の家は疾づくに燒けて仕舞て跡形もないが、少しも驚かず、唯妻君の無事なる顔を見て悦んで居た。

此の柿崎さんの話しに依つて、東京も亦劇烈な！大地震續いて到る處から、火災が起

つて、今帝都の全市も猛惡なる魔火に苦しんで居る事が解つた。それで皆互に口を揃へて、東京迄がこんな風に酷けりやあ、もうドウする事も出来なかりうと云つて、がつかりして居た、此時分には、新子安方面の鎮火した事は、柿崎さんの通過して來た話しにてよく解つた。夜の深更につれ、神奈川の火の海も次第に火勢が鈍つて來た。横濱の猛火の海も幾分火氣が薄らいだ。黎明に近き頃には、何れも全然火勢が衰へた様に見へて居た。然し夜明けても、未だ此所彼所の石油や石炭が盛んに燃へて居て、猛惡なる黒煙は渦卷いて濛々と上空に漲り、天日を閉ぢ、暗黒となつて、宛然現世を地獄かと疑はしめ、大震災火災の慘劇が如何に酸鼻を極めて居るかを物語つて居た。

私は妻と、馬車道の某店へ務めて居た妻の兄の事や、南仲通り取引所前の妻の叔母の家に久しい以前から行つて居た妻の妹の事、亦其の叔母一家族竝に店員女中達の身の上を、何度か色々に案じて見たが、逆も横濱の真中に居ては生きて居る筈がないと思つて諦めた。けれども夜が明けると、亦案じ直しを一層繰返してみた。私共を始め皆斯うした極端な不安と恐怖に襲はれ、戦々兢兢々として徹宵したので、非常に疲勞しては居たが、兎に角大地震の翌日とはなつて居た。

朝になると、今度は、此所へ集つた避難者中の岡本さんと云ふ家で、米を持つて來たの

で、其れを女人達が直ぐ山麓の清水で洗つて来て、大釜へ一杯朝飯を炊いた。そこへ誰れかが梅干を持つて来たから、早速其梅干を入れた握飯を拵へて呉れた。之を皆んなで甘い甘いと舌鼓で腹存分食した。其後も、此の空地で近所の人々と共に配給を受くるまで、斯いふ風に有る者が出し合つて、共同生活を續けて居たから、食糧には不足なく、食ふに困難を感じなかつた爲め、更に饑餓の憂ひを知らずに通つて来た。猶ほ飲料水も山麓の清水を飲んで居たから、汲み取り来る不便は甚大であつても、缺乏と云ふ程の心配もなかつた。

二日朝、此所の避難者の中の主人公や其の他の關係者で、未だ勤め先から歸らず心配の的となつて居る人は、關内の某回漕店を經營して居た中澤氏と東京京橋邊の某建築會社へ勤めて居た岩田氏及び私の北隣の關東學院の大下先生の家に下宿して三井物産横濱支店輸出入部へ勤めて居た深澤氏の三人であつた。

然るに幸ひ中澤氏も深澤氏も、同日午前十一時頃何れも眞黒な顔付ではあつたが、無事に歸られたので、其の家人は勿論、外の者までも皆大喜びであつた。兩氏が命辛々横濱公園へ逃げて助かつた話や、又物凄き悲慘劇を目の邊りに見た物語りは、實に想像外の酷さであるのに、皆な驚愕の目を見張つて居た。

三日目の朝、妻の兄が馬車道から高島驛構内迄逃げて来て、無事で居て歸宅した事が解つた。亦南仲通りの妻の叔母の一家族や、妻の妹、其他店員女中残らず、横濱公園へ避難して一晩苦しんで危ふかつたが、漸く命丈は助かつた話も聞いた。私も妻も、其の叔母の家の人達が全部助かつたと云ふ事は、一時寧ろ不思議に思つた位である。然し只管祈り甲斐があつてよかつたと重荷を下した様に嬉しかつた。岩田氏も同日の黄昏時無事に歸られたが、心配しきつて居た妻君の悦びは一通りではなく、皆小説か芝居の場面の様だと評して居たが、然し誰れでも其身になつて見れば、皆同じであつたらう。是れで、此空地へ避難して居た集團の者の家族には、誰れ一人の死傷者も無く、全部揃つて無事であつた譯になる。焼け出された者はあつても、皆斯ふ生命の無事なるを得たのは、先づ一口に天祐で盡きて仕舞ふが、然し考へると、近所に一人の死傷者すら出さなかつた事は、御互に誠に心持ちのよいものである。自然夫れ等を語らずには居られなかつた。唯ここに困つた事は、露宿の爲め少しでも風があると、蠟燭の火が直ぐ消へて保たないのと、蚊帳を釣る事の出来ない爲め、恐ろしい蚊咬の襲撃とであつた。私の出て居た店も、自然に地盤のよいのと、多少念入れに建ててあつた精か、地震には瓦一枚落ちなかつた事は知つて居るが、亦火災にも免れた事を聞いたから、安心して居て、四日目

に漸く店を訪れて、店主と今後の方法に付き談話を交した。其後私は市中を一巡して歸つたが、成程鬼神も顔を背ける悲惨事が到る所にあつて、涙の種も盡き果て、氣も變になりさうであつた。

加之此日あたりから例の流言蜚語の朝鮮人騒ぎが勃如として起り、女小供が一時地震以上に脅えたのには尠なからず閉口した。是等の事は何れも私の遭難談とは筋合が違つて居る故に略す。

空地へ集つて居た一同も、震災後四日、哀愁深く第一秋雨の降つた時から始めて自家住居に移つた様なものの、配給を受くる頃迄は少し搖れて來ると、亦直ぐ空地へ集つて矢張り露宿氣分を味はつ居てた。

私は其後一層詳しく横濱市内に於ける慘憺たる震火災跡の光景を見たり、亦各方面の種々なる幾多の悲話慘話を聞いて、そうして私共一家が震災に遭遇した事を綜合して考へて見るに、自分の一家は本當に運のよい方であつた事が始めて解つた。其れから數日後店の石炭部も漸く復興の芽生がして營業を開始した時、私が本縣港務部へ行くと、震災の話があつて、同港務部から壓死者九人を出した悲惨事を聞き、思はず慄然として驚いた。私があの時今十五分乃至二十分早かりせば、必ず港務部へ行つて居た

筈であつた。若し行つて居たと假定すれば、先づ十中の八九壓死は免れぬ處であつたろう。其れを思ふと、漫ろに身の戰慄を禁ぜざるを得ない。私の生命はあの時實に風前の燈火であつた。遅刻が齎す幸ひか、或は天祐なるか。畢竟少し時間が遅れた爲め、行くのを見合せて命拾ひをしたのであつた。

遅刻を譽める譯ではないが、然しあの時の遅刻は私に取て救の神であつたと思ふ。斯うして私が命冥加のあつた事も、要するに結局一家の運のよかつた譯になるのである。

六 蓬萊町での遭難 植木寅吉

私の家は蓬萊町一丁目の仲通でした。其朝私は磯子方面に用達に行く積りでしたが、急に兩踵が痛みますので、雨のやむのを待ちながら店にゐますと、何日しか晴れました。足の痛みも薄らいだので、出かけ様と自轉車の仕度をしますと、先よりは一層兩踵がズキズキ痛みますので、午後に延ばして奥の座敷で寝ころんでゐますと、何時か眠りに入つてしまいました。

「お父さん地震だ」と、長男晴十一が呼ぶのに飛び起き、轉りながら子供と共に表に出ま

した。之と同時に二階建の家はめちやめちやに潰れました。臺所にゐた妻(三二)は共に駆出したのですが、一足違ひで家の下敷となりました。私は驚きながらも「大丈夫か」と聞きますと、「大丈夫です」と云ふのに安心しましたが、次の子供(三歳)が見えませんでした。修は如何したと聞きますと、中村の家だと申す故今すぐくるから待てと云つて、すぐ横の洋菓子を卸してゐます中村方へ足向けますと、其時角の蓬萊亭から火が揚つてゐます。そして大變な勢で燃え走つてきます。私はこれは大變だと大聲に「火事だ火事だ」ととなりながら中村の家に来て見ますと、其前の長屋も中村の家も長屋も、跡形もなく道路に潰されてゐます。私は其上に乗つて、兄さん、修や、姉さん、と一人一人の名を呼ぶと、ここだと臺所の少し持ち上つた處に、兄夫婦と子供三人と私の子供と六人丸くなつて、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と稱へて抱き合つてゐました。「大變だ大變だ火事だ火事だ焼け死んでしまふ」と家根の上からどなりながら、裏の二階の窓から一人一人引き出した。姉は手首と唇に怪我してゐました。他の五人は無事でした。

地震の一寸前に、臺所の際で晝食をしようと膳に向つた時でのた。店の方にゐたら全部憐れ慘死してしまつたのでした。何たる幸運でしたらう。私の子供は他で食事する時には、キット聞きにくるのです。處が此日に限つてお飯をおあがり、兄夫婦

が申すとすぐ御膳に坐つたのでした。何時もの様に家に聞きに出れば、丁度道の真中で兩方の二階家の下となつて慘死の運命になる處でした、幸なる子よ。

「伯父さんどうしよう」と中村の長男(十九)と姉が申しますから、停車場の前へ行け。伯父さんは伯母さんを出してすぐ行くから」と二人の子供を頼んで、修を姉に負せて、七人潰れた屋根の上を渡りながら逃がしました。火は目の前に來ました。地からは水道が破裂して、一面の水となりました。一同は着のみ着のまま揃も揃つてシャツや繻絆ぎりでした。手に何物も持たずに走つたのです。私は水の中を再び家に來て、よく待つた。皆は無事だつた。停車場前へ逃がしたと申しながら、欄間の戸を毀して、やうやう妻を引き出しました。晒中形の單はすたすたに切れ、左の眼は強く何かに當つたと見えて、黒あざとなつて腫れ上つてゐます。腰も同じく強く打ちしと見えて、一時は立ち得なかつたのです。しつかりしろと云ふて、潰れた二階から、其處にあつた單物を二枚引出して來て、裸かでふるへてゐる妻に二枚一度に着せ、私は梯子段の處に飛出した。帳薄と重要物まで一包にして持つて表に出ますと、水は膝の上までになつてゐます。其の水のために流れた溝の中に落ちたので、あとから逃げる人が又落ちてはと、二階の戸袋を毀して溝の上に敷き、妻の手を引いて逃げ様としますと隣の家では細君と子供

三人が奥の方で下敷となつて助けを呼んでゐます。妻を待たせて、隣の主人がぼんやりしてゐるのを勵まして、聲する方に助に入りました。然し嗚呼々々お氣毒にも二階家の下敷となつて如何ともすることが出来ません。私は助けを呼び聲のする度に隣家の主人と二人で「今助かるよ、今助かるよ」と返事をしてやりましたが、ああ何と云ふ残念な事でしたらう。火—火、火が參りました。風に狂ふた猛火は少しの慈悲もなく、私共の顔は熱くなりました。其先隣の家からも助けの聲は大きく聞えてます。紅蓮の煽は私達を包もうとしてゐます。今は是迄と涙を流して、石川さんに一足先に別れて、妻と家根から家根へと桂湯の流湯の中を電車道に出ました。此時はもう近所は一面の火でした。

伊勢佐木署では壓死者を出してゐました。私共二人は先に逃げた七人の後を追ふて、停車場差して吉田橋の人込を走りながら河岸に出ました。橋の際の洋品屋の裏の方と馬車道の角の方から火が高く揚つてゐます。港町六丁目の公設市場と教會のあたりから火焰があがつてゐる。貞喜丸の發着所の前に、石油を満載した荷馬力が地割に片輪が陷つて、其石油が物凄く燃え、黒煙火焰を吹き出してゐる。馬はゐなかつた。右も左りも四方火だ。今は船より外に助かる道はないと、多くの避難者の後について

船の渡しを妻の手を取つて渡りました。今一步で船へ移らうとした舟は、其刹那沖へと離れたのであつた。云ふ間に二人は川の中に眞さかさまに帳簿や重要物の一包を負ふたままもんどり打つて落ちたのです。無我夢中で岸近くへすぶ濡れになつて二人ではい上りました。

ああ悲惨夢か、幻か私等の前に轉回する焦熱地獄、紅蓮の舌は水の中迄強烈に見舞ました。舟と河の中に避難した幾百千人の男女の叫び、助けを呼ぶ者、親を呼ぶ者、子の名を呼ぶ者、苦痛を訴ふる者、念佛を唱ふる者、動哭する者、背負つた子の泣き叫ぶ是れ等の聲は、猛火の響きと共に天に地に、ああ何と云ふ凄さでしたらう。實に大正十二年九月一日の正午を過ぐる卅分位の吉田橋と柳橋の港町川岸の川中に起れる最初の大叫びであります。舟は十艘位ありました。小蒸汽も一艘ありました。河の中は満々としてゐます。舟の中は人で埋められてゐます。河の中程迄も桶の中の芋の様に、人が黒くなつてます。ああこの有様を見た私は、今の今まで助からうと神や佛に念じた心から、心氣一轉しました。

助からんより助けよと、河の中の一團の中に入つて奪鬪し始めたのです。生命の前には何者もない。重要物が何だ。帳簿がなんだ。折角持つて來た一包を川の中に投

げ捨てました。そうして先づ自分の單の袖の左を切つて頬冠りして、水をかけ廻りました。妻が着ていた上の一枚の紺帷布の緋をぬがせて、齒で袖や身頃を切りさいて、誰れ彼れと云はず婦人の頭を包んでやりました。私は自分の天竺の股引を脱いで、四五寸位に輪の儘引切つて、泣き叫んでゐる背負れた子供達の頭に帽子の様にすつぽりと、四五人の子に被せてやりました。残りの處も女の方に頬被りしてやりました。そして又人々の頭と云はず背と云はず、後から前から水をかけて廻つたのです。足は膝までぐちやぐちやする中を、右に左に彼方此方と一生懸命でした。然し苦痛は一刻一刻と追つて來ました。呼吸は時々將に窒息しようとなります。危険は一秒一秒襲ふてきます。もう叫んでもだめだ。泣いてもだめだ。舟は焼けてきました。河の中は又一騒ぎ大くなつてました。水に溺るる者、焼かるる者、傷く者、焦け蒸される者。今迄泣いてゐた背負はれた子も泣きやんだ。苦痛に堪へず遠い國への眼りについた者である。河の中から道路へ戻らうとして、石崖にかじり付いて其まま堅くなつた白髪の老女、其の死體に取り付いて共に窒息した十四歳の娘、舟と舟の間に挟まれて苦痛を訴へつつ死の國に行いた者。ああ目の前に浮かぶは慘絶凄絶……。

如何にしたらよからう。最後は私等二人も同じ運命になるのだと思ひあきらめた

時、天の與へか神の恵みか、舊濱港館の前の道路の真中に蒲團の包が燃えてゐました。私の心は躍りました。危険も何にも考へずに、着物のまま頭から體中を水によく浸してはいづり出し、焼けつつある包の中から一枚の紡績の座蒲團を川の中に引き入れました。そしてそれをよく水に浸して擴げて、其中に六名の婦人を入れました。其時の私は今迄にない喜びでした。私も其々入りながら、蒲團に水を間斷なくかけて、焼け様とする蒲團を防ぎました。恐ろしい火の粉と炎とは幾らか樂になりました。然し息は苦しいのです。喉がきりきりします。風を入れるために皆なで時々蒲團を振ふのです。少し手が休むと、頭の上で蒲團が焦げ臭いので、皆な一所になつて中から水をかけるのです。河の水は地震の起るたびに、水が引いたり上げたりするので、其度毎に深い方へ行つたり、浅い方へ行つたりしました。幾回だつたかわからない位です。體は首まで水の中に浸つたきりです。其時一抱もある風呂敷包を背負つた婦人が一人もぐり込んできました。子を負ふた人も入れるだけ中にもぐり込ませました。私は出來るだけ多くの人を入れようと思ひましたので、大風呂敷敷の人に包を捨てる様に申しますと、其の方は中々應じませんでした故、私は少し手強く申しますと、これは主人から預つた大切な包です。死んでも放しませんと云ふのです。ああ其行爲は誠に結構で

すが、人の命より大切な物はないですから、それは箱の様ですから、中の物だけに小さくして下さいと申すと、承知しました。水の上で箱を毀し、免状と證書様のものが澤山ありました。包は小さくなりました。右の肩から斜に背負せました。其れで又一人を入れる事が出来ました。預つた主人の品を大切に、身を替へても此場合離さないと云ふ言葉は、私をして又涙を新らしくしました。

此感すべき人は吉田町の藥種屋の女中さんだそうです。御主人は何たるお仕合せな方でありませう。年は二十一二位と思はれました。箱は流れて行きます。私は再び其の尊ぶべき眞心を嬉しく思ひました。今は僅か五布の蒲團の中に十幾人の人々が不安の中にも少しく樂に入つてゐます。吉田橋の際の舟から捨てられた麥粉袋を拾つて、婦人方のお尻の下に敷いてやりました。流れてきた木や板は沼の様な河底に敷きました。いくらか氣持がよいと思ひました。時は進みますが、火は益々強くなる。風は狂ふ。妻さは加ります。私は同じ事を繰り返してゐます。川のそばの電信柱が途中まで焼けて、僅かに一二寸位残つた處からチヨロチヨロ火を吹いてゐます。もし其の柱が燃えて川の中に落ちたなら下に居る十數人は怪我をするに違ひ無いと思ひましたので、私共は三四人の人と共に先の方から丸太を捜してきて、道路の方へ一生懸

命倒さうといたしましたでしたが、中々倒れませんでした、長い事かかりまして道の真中に落しました。

何時しか夕刻になりました。少しは樂になりました。命の親の蒲團も、いらなくなりました。水の中に立ちながら、互に恐ろしかつた苦しかつた今の今迄の事を話し合ふ様になつて、目の前に數限りなく死んでゐる人々を見ながら無事を喜びました。

いよいよ夜に入りました。見渡す限り目の届く限り火の海です。野毛山の方も十全醫院の方も南太田の山も、遠く神奈川根岸山手の方も四方八方火！火！火です。

それから間もなくです。思ひ出してもぞつとする第二の機危が起つたのです。それは大旋風です。兩側の焼跡からガラガラゴウゴウと凄じい音して、地にある何物でもをくるくると十間四方位巻き上げながら、それが木と云はずトタンと云はず、空中高く巻き上つたと見るまに、恐ろしい音を立てて猛烈に落ちてくるのです。さあ大變だ。今迄川岸に腰かけてゐた者も、河の中にゐた者も、再び騒ぎ始めました。

愈、絶體絶命、今度こそ死ぬんだと叫喚き騒ぐのです。私は大聲に「死ぬ時は皆さん一所に死にます。私の云ふ通りになつて下さい」と、一同を一塊りとして水に潜らせました。

然し四五分置き位に吉田町側に起ると、今度は尾上町の側に起るのです。それが丁度河の中に落ちるのです。ああその物凄さ耳も張り裂けんばかりの音、爆破する音、誰れも彼れも別はない、皆無我夢中で助からんと騒ぐのです。此時には申し合せた様に、何時とは無しに貞喜丸の船積場の小さい棧橋の下に潜り込みました。私は神がこの一團の人々を見捨てずにゐてくれて、此の焼け残つた小さい棧橋を與へてくれました事を深く深く感謝いたします。

旋風は幾回となく繰返されました。私と二三の男の人は、板や俵の切れ端で、水を其の棧橋の板の上にかかけました。そして旋風が静まると其の上に乗りました。旋風が起ると、その下に下るのでした。一人として恐ろしさに泣いてない人はありませんでした。目ははれ上り、顔は眞黒に、まどつた着物は泥だらけです。私の右の片袖は何處かで受けた傷にさいて卷かれてました。三十歳位の女の方で、私の様に足の裏に傷ついた方にも卷かれました。それ故私の着物は胴だけです。右の手首と左の二の腕に何時か火傷をしてゐました。鼻の下にも火傷をしてゐました。股から下の傷は、足の裏と共に幾つあつたか数が知れませんでした。何處から來たのか二尺僅の黒犬が一疋、私のまたの間に潜り込んできました。私は思つたお前も助かりたいかと。頭をなで

てやりました。黒犬は震へてゐます。生んとする心に變りはない。最後の動哭念佛、妙法蓮華經、神に佛に今一步の救を願ふ微かな聲は、途切れ途切れ乍らも河の中に強く響くのです。かくして一時間以上も間斷なしに起つた恐ろしい大旋風も、此一團の人に對して無事に静まりました。薄ぼんやりした月が見え出しました。其色は煙を通して赤く、私はもう大丈夫ですと岸へ上りました。一同石崖に腰をかけました。ああよかつたと天を仰いで、又皆々泣きました。其顔には何とも云へない悲痛な眼ばかり血走つたお互の顔を見合はすのみでした。其れ迄私は廻りの人々に氣を取られてゐましたが、竝んだ人々の數の少ないのに驚きました。僅に三十人位でした。其中で男の方は私と共に七人でした。あとは女の方で、十月お産をすると云ふ大きなお腹をした人もゐました。不思議と知合の人が一人もゐませんでした。舟はと見れば僅に三艘しか残つてゐません。残骨は彼方此方に焼けてゐます。その焼けた舟の人々は蒸され焼かれ溺れたのでしよう。何たる慘事ぞ。あの幾百千の人々よ、ああああ。

私は腰を地に少しく落付けますと空腹を感じました。同時に先に逃げた七人の事を思はずにゐられませんでした。一列に竝んだ人々も、親の事兄弟の事雇人の事、死んだか生きてゐるか、涙は又新しく湧きます。時刻はもう一切分りません。通りかか

つた男の人が、千咆が、大江橋のそばに焼けてゐると教へてくれました。私は丁度よいと、停車場前へ逃ると云ひ聞かせ七人の安否を尋ねながら立上りました。然し然し晝の十二時半頃より月が中天にある頃迄、水の中に努力した體は、自由がききませんでした。私は苦痛を妻に訴ふる事も出来ません。それは共に共に私と同一に動いてくれたからです。私が今行かうと歩き出しますと、そこに竝んでた人々が、危いからと云ふて留めてくれます。私は七人が心配だからと申しますと、一人の方が川の中で拾ふたといふ女の草履の片方をくれました。又一人の方が、駒下駄の片方をくれました。私はそれをはいて、ヨチヨチ出かけました。

道路は物凄く龜裂してゐます。電信電話線は無數に道を塞いでゐます。焼けただけた死骸が幾つも横たわつてゐる。馬も焼け太つて、見るも無慘に死んでゐます。柳橋はあと形もない。私は只ああああと一步一步ため息しつつ、ヨチヨチ大江橋を渡りました。車道と人道の境に腰かけてゐる幾人かの人々を覗きながら、停車場前にと參りました。此廣場を處狭しと多くの人々は、彼方に此方に一固りとなつて避難してゐます。窒息して倒れてゐる人が幾人もありました。私は隅から隅迄大聲で七人の名を呼びながら、次へ次へと呼んで廻りましたが、返事がありません。私が停車場前へと

云ふたのに、舟に乗つたのかしら、それとも公園にでも行つたのかしら、とがっかりして戻つてきつつ、橋の際に箱から燃えてゐる干あわびを棒切れでかき廻して、よいのを懷に一ぱい両手に持てる丈け持つて、又元の川岸へヨチヨチ返りました。妻は安否を待ち兼ねてゐました。居ないと聞きまして、心配しました。私はこれから川岸を公園まで尋ねると申しまして、その人達に千咆を二つ三つ位づつ渡しますと、吾れ勝に手を出して喜びました。然し私の手には自分の一つも残りませんでした。分けた妻から一つ貰つて、あの黒くなつた死體の浮いてゐる川の水で、ごしごしとみまして、少し軟くなつたので、朝からの初ての食物として、口に入れました。其の美味さに喉がぐうぐうと鳴りました。皆の喜びの顔を見つつ再びヨチヨチと川岸から川岸を大聲に尋ねました。公園も幾回となく尋ね廻りました。水溜りに落ちたり、針金に躓いたり轉んだりして、七人の名を呼びましたが、遂に答へはありません。又停車場前又公園と三回繰り返しました。自分が疲勞するのみで、何の得ることもなく、いよいよ舟にのり込んで、一同七人とも溺死したのかと思ひますと、私は狂人のやうになりまして、聲高く泣きながら、名を呼ぶのでした。あななせ一所に逃げなかつたのか、安全と思つて先に逃したのが、かへつて禍となつたのかと思ひますと、身も世もなく、私と妻と二人とも、

うこうなれば二人で河の中に飛び込まうかと相談しました。其時に一所に助かつた中に、常盤町とかの中山と云ふ四十五位の婦人と、今一人名を忘れましたが其方とが、「キツと遠くへ逃げて安全になつてゐますよ。私達が助けてもらつたかわりに、キツトキツト助つてゐます」と力づけてくれます。泣くにも泣かれません。今一度公園をと吉田橋の前を過ぎ様としますと、崖の處から水が出てゐると云ふ聲がしますので下りますと水道の鐵管が破裂して、水が噴き出してゐますので、兩手ですくつて飲みますと、瓦斯と交つて臭い水でしたが、飲みました。この水を一同に飲ませたなら、公園を後にして又元の道をぬり、やの裏迄きて、ビールの空嚢を五つ拾つてゆきまして、其れに一ぱい水をつめてきて、一同に飲ませました。次から次へとどくどく飲む様は何とも申まされない場面です。

私は又尋ねに出かけました。すると橋の上に焼け死んだ人がゐると云ふ聲がするので、足向けますと、橋の人道のそばに五十位と二十位の男、それより真中頃に三つ位の男の子が女の腹の上に斜すに乗つて焦げてゐます。すぐ其の先に十位の男の子、其の先にもう灰になりかかつた子供、電柱の側に三十位の若衆姿の人の焼けたのが目に入りました。

私はああ大變な事になつた。これは姉でこれは子供だ子供だと、そこに見てゐる人々に構はず叫びました。そして其の子を抱上げて見ましたが、少しもわかりません。子供と女の人の腹と腹との間の重なつた處が、二寸位丸く白くなつてゐました。他の全部は薄赤黒く焦げてゐました。前の二人の子供と云ひ男二人と云ひ、ああ私達を待つてゐて逃げ後れて、此の悲惨な死をしたのではなかつたかと思ふと、もうたまりませんで、わいわい泣きながら、其の死骸の廻りをくるくる廻つたのです。そして、私の身の方です、どうぞ見ずに下さい」と、一人一人立つ人を追ふたのです。私は無意識に馬車道通りにかけ出しました。そして一枚の焼けた鐵板を持つて來て、其の死骸の上に覆せました。其の鐵板には一尺位の丸い穴があいてありました。先の子供にも又一枚覆してきて覆はせました。ああ萬一の望みを遠く場所に求めた私等夫婦は、もうてつきり其の焼死者を七人の者と思ひ定めてしまひました。

ああもう何の望みもない、ああああ。暫らく其處に立つて泣いてゐましたが、何の考へも浮びません。終には涙も出なくなりました。運命だと元の場所で無言のまま夜の明けるのを待ちました。

妻は何處かに安らかに、七人無事である氣がしてならないと、力づけてくれますが、あ

りし昔の事など、それからそれへと想ひ出されて、夢の様です……………。

長い長い夜の時間は、悲しみの中に明け初めました。殘虐の後の天の静けさ、明くれば二百十日の空は澄み渡つて、何事もなかりし様である。私は昨日よりの人々に厚く禮を述べて、何れの日か又お目にかかる時のあるべき事を名残りに、二人は再び七人を捜すべく其處を引き上げるのでした。此の方々は種々厚い言葉をかけてくれました。禮の言葉を繰返し繰返しつづ、私の名前を知らせてくれと申しましたが、私等の助かつたのも、皆さんのお蔭ですと申して、遂に名乗りませんでした。二三人の方が同じ様に、公園の方へ尋ね人の爲に行くと申すので、一所に歩き出しました。今一度橋の上の死骸を見廻りました。そして鐵板を持ち上げますと、女の人足の下に五寸四方位の焼けのこりの切がありました。手に取つて見ますと、羽二重の黒地と赤地との鹿の子のだんだら絞りでした。姉も子供も此の切は用ひなかつたと氣が付きますと、必らず何處かに生きてゐるのだと云ふ感じが、深く深く二人の上に表はれました。又元の様に切を戻して鐵板を覆せ、念佛を厚く唱へて、少しは安心の心になつて、川岸通りを名を呼びつつ公園の前まできました。

夜はすつかり明けまして、朝日の光りの輝きが我等の醜くき姿を照します。

「中村善之助中村善之助山形屋山形屋」と體をヨチヨチしてゐますが、昨夜よりも枯れた聲で大きく叫ぶのです。すると向ふ方からも又「山形屋山形屋」と云ふのではありませんか。

ああ其時です、私等夫婦は嬉しく目の前に甥の姿を見て、一步もあるけなく、聲も出なくなつたのは其時です。「ああ無事か無事か」とようよう言葉が出た。「皆な無事だ、伯父さん、嬉しい」と云ふて、私に三人一所に抱き合ふて公園の入口の處で泣きだしましたのも此時です。「ああ嬉しい、ああ嬉しい、よくお前は捜しにきてくれた。伯父さん伯母さんはお前達七人を殺してしまつたかと思ふて、二人一所に死んでしまふと思ふてゐたのだ。ああ無事だつたか、嬉しい嬉しい、私は狂人の様に、嬉しい嬉しい」とおいおい泣くのでした。一生此時の嬉しさは忘れられません。ああ私等は幸福でした。それから三人連れ立ちて、焼け残つた木を杖にとぼとぼと、先に逃げて「電車道に出た停車場前よりも、山の方がよい」と鶴の橋を扇橋車橋と、二日の午後三時頃無事に遊行寺山の上の松山に、何の苦痛もなく、只恐ろしさに吾等を心配しつつ逃げのびた處へと歩き出しました。そして公園から夜の二時頃、松山へと逃げのびた方が、偶然と近所の人であつたので、私が狂人の様になつて、名を呼んで捜してゐたと云ふをきいて、夜の明けるのを待つ

て、迎ひに捜しにきたのでした。長い時間を費して、私等は其避難せる松山につきました。其所はまるで戦場の様でした。修はござの上にすやすやと眠つてゐます。兄も姉も其他の子供も無事の嬉しさに、私等の姿を見て泣いてゐます。姉はあまりに修さんがなつので、二人とも死んでしまつたのではないかと、一夜中泣いてたと、嬉し泣きに兄と共に喜んでくれました。

私等二人は其處に腰を下して、無事が嬉しい、無事が嬉しいと、泣きました。

七 噫 九月一日

横山軍平

自分は勞働者であります。毎日汽船の荷物積取りの人夫として、毎朝五時頃波止場へ出掛け、そして足舟といふ人夫の澤山乗る小さいサンパンで、本船(目的の荷物積取をする各汽船の事を云ふ)へ行き、そして荷物積取を毎日の業務として居る、沖人夫である。雨降りの日を除くの外は、大概出掛け、そして働いて居る。併し「おさん日」と云つて、昔から職人等の休む一日、十五日、二十八日の三ケ日は、大概晴雨に拘はらず、休む習ひとして居たのである。

九月一日は例の「おさん日」の日である。自分のきめた所の休日である。併しいつものごとく朝はやく四時頃に起きて空を見るに、雨模様で風も少しはあつた。なんとなく厭な氣持の朝であつた。然るに五時頃になると風もなく、雨雲も去り、誠に氣持の好いお天氣具合となつて來た。自分はいつも休む可き此日に限り、急に仕事に出掛ける心持になつた。それは其頃澤山の外國汽船が立込んで、かなり忙しく又急ぎの船も澤山あつたから、自分として此忙しい時に働いて置くと云ふ様な心持で、急に仕事に出掛ける事にしたのであつた。然るに妻は、今日は朔日と云ふ厄日である。まして危険な仕事でもある。又翌日は二百十日と云ふ昔から人の厭がる厄日であるからと、休む様に勧めたのであつた。あの時自分が妻の云ふ儘に若し休んで家に居たならば、此身は何うなつたか知れなかつた。或は焼死をしたかも知れぬ。なせならばと云ふに、あの時に自分の休んで居た處、泉谷戸三七三の長家一棟は潰れず、火も地震の時より約二時位も間を置いて燃えた相である。人の慾として、誰しも例へ一品でも助け度いは人情である。僕とても同じ事、必ず慾に目がくれ、荷物を出す事に氣を取られ、火の來るのも知らず、其の爲め或は焼死をしたかも知れない。丁度泉谷戸方面は火は、二時頃來て、自分の住家邊は其の火災の中心地帯となつて、近所の男達二三名は、各自の荷物を出す爲

に氣を取られ、火が一時に四方八方より來るのも知らず、既に焼死をする處を、漸くにして命からがら逃げたと云ふ事を後で聞いた。自分は留守の爲め、妻は十歳の長男と一年生の女兒を連れ、命からがら安全なる地帯へ、一品も持たず逃れた爲め、負傷一つなしで済んだのである。

さて是より自分の出會つた處の、あの恐ろしい悲惨の有様を書き記す事にしよう。自分はいつもの如く、朝六時頃、本船へ乗り込み、此の本船は俗に十五番と云ふ英國ビ―オー汽船會社の船である。仕事に取り掛つた。午前八時頃俄に大雨は降つて來た。其の上大風を加へ、雨はまるで盆を覆す様な大雨となつた。皆大騒ぎで荷物のぬれぬ様にと、其れぞれ其の仕度に骨を折つた。ところが間もなく此大雨はけろりと晴れた。又半時程たつと降り出した。斯くする事二三回、海上は其暴風雨の最中は、實に物凄い有様であつた。兎に角其翌日は例の二百十日と云ふ大厄日である。必ず前危の兆であらうと話して居た。然るに十時半頃から、此の恐ろしい大風雨も全く晴れ、誠に快晴の日となつた。其處で最早大丈夫であらうと、各々其の受持の部署に就いて仕事を始めた。

十一時になつても無事である。丁度十二時に十分前に、僕の仕事は終り、其跡の取片

付をして居つた處、丁度十二時に五分前、彼の恐ろしい大地震であつた。其時は別段音はしなかつたが、船は甚しく上下に搖れた。其震動が餘り激しいので直ぐに大地震であるといふ事が判つた。水の上に浮いて居る此大船（一萬噸級の船）でさへあの様に搖れたものを、陸の方ではどんなに凄く搖れたかと思ひやられた。自分は船底にあつて、これは大變な大地震であると思ふと同時に、大急ぎでタラップを上り、そして甲板に出て、市中を見た處が、實際に驚いた。家の崩れた眞黒な砂ぼこりで、市中はおろか、方角さへも判らない。四面一體は眞暗となつて仕舞つた。自分の乗つて居た船は、彼の防波堤間近に居たから、目を返して其の側の防波堤を見た處が、水が殖えたのか又は堤が沈んだのか、此堤は影も形もない。（平常は満潮の時でも三四尺も海上より出て居る）只其の上に建てあつた税關の見張所は、目茶々に潰れてゐた。自分は此有様を見て、市中は今土ほこりで眞暗で見えぬが、必ず建物は全部潰れ、そして土の中深く潜り込んで仕舞つたと思つた。其中に間もなく大きな風が一時に吹いて來た。其爲め市中より來る砂ぼこりは益々ひどくなつて來て、四面は眞暗やみ、又海上は此大風の爲に起つた浪が凄い程大きくなつて、見る見る内に大海嘯にでもなつた様な、凄く凄く大しけとなつて來たのである。太陽を見ると、此の黒い暗い砂煙の爲め、其光は全く無く、只々黒板に赤い

盆を出したと同じ様な具合であつた。實に物凄いと云つてよいが、氣味が悪いと云ふか、其有様は逆も筆や話にはする事が出来ない。海上の大きな浪は次第々々に大きく、凄く其海の荒れ様などは、僕は北越地方に生れて、彼の日本海の荒浪の實に凄い事は知つて居るが、此時の大浪も丁度秋によくある直江津海の荒浪の如く、大山崩れ來るかと思はれた程であつた。其の時刻は一時頃からであつた。

各汽船内兩側に荷物積取りの爲め、大小の澤山な舢舨が繋いであつた。其澤山な舢舨百噸から百五十噸位も積むものは見る見る内に此大浪の爲に沈み、又其の舢舨に乘込みの船頭や其の妻子も、共に船諸共海底の藻屑と消えて行く。其の有様は無慘悲慘、然しそれを助ける暇もない。只見て居て、あれよあれよと云ふ許りである。

さて此暗中より市中を透し見れば、最早四方至る處より火災を出し、そして此火は東西南北に大風にて吹き廻し、あらゆる生物をば一つも残さず呑み盡す凄い勢ひ、又其火災のために、方々の倉庫や工場の種々雑多の品物は、大音を立てて爆發する凄い音は、丁度百雷の一時に落ちたと同じく、大戦争の様にドンドンと絶え間なく大きな音がして實に恐ろしい有様であつた。此の音を聞き、此火災を見て居る吾々四十餘名の入夫の心の内、皆共に陸には妻子もあり、又相當の家庭を持つて居るものもある。それが何う

して此の船の甲板で安閑として、此の凄慘な有様を見て居られやう。然るに僕等を朝夕送迎をする處の通船小蒸汽艇は、今は早何處へ逃れ去つたか影も形もない。上陸して丘の安否を知り度くも、其の足はない。と云つても、此の大風浪では板や木の切を抱いて海上に飛び込む事は、尙更危険で出来ないし、只陸の事を氣に掛けながらも何うする事も出来ない。そこで一同で相談して其の時の責任者である入夫世話役大澤組の山根平太郎(俗名金さん)の謀ひで、船長に對し本船備付のボートを引下し、借りる様に掛合をして貰つたのである。處が此船長は何うしてもこれを聞き入れて呉れない。船長の云ふには、今君達は此大火災に出かけても、火の爲めに逆も上陸は出来ない。よし上陸はしても、必ず皆共に焼死をしてしまふから、逆もボートは貸す事はならんと云ふ。けれ共僕等は強いて暴力に訴へても、強請的にボート借入の決心をした。處が世話役たる金さんも、此船長の云ふ事を尤とし、僕も今となつては、人道の責任上、君達を此際上陸さすと云ふ事は絶対に出来ない。僕も君達の知る通り、陸には可愛い子や孫もある。其子や孫も、今頃は悲慘な目に出合せて居るであらう。それを思ふと君達と同じく飛立つ程行き度い。然し今強いて上陸して妻子を救ふ心であつても、見る通りの此大火災では、逆も何うする事も出来ず。却つて自分達も共に死に行く様なものである。此

道理を君達も宜しく聞き分けて思ひ止り、市中の静まる迄僕に同意してとどまつて呉れ。是非頼む。」と涙と共に申された。後で考へて、成程此金さんの言はれる通り、あの時に無理にでも上陸をしたならば、必ず此四十餘人の内多少は焼死をしたに相違はない。實に此沈着な而して親切な金さんに、深く深く感謝をして居る。後で聞けば、此の金さんの家は石川四丁目にあつたため、第一番に火に包まれ、家財道具はおろか、可愛い子を二人と孫とを、三人も焼死をさせてしまはれた相である。そして金さんは其翌日も翌々日も歸る事は出来なく、三日目に漸く歸つて來て見れば、此悲惨の有様、泣く泣く娘や孫の行衛を尋ねたけれ共、何うしても知れぬ。後に人の噂を聞けば、石川附近の人達は澤山吉濱橋の河中に逃げ込んだと云ふから、其時大勢の人達と共に河へ入つて溺死をしたものか、又途中で焼死をしたものか、未だに其行衛は不明である」と、後で僕に涙と共に話された。實に氣の毒の至りである。

さて自分達は上陸をしたくも、前に書いた通り舟は無く、陸へ行く事も出来ず、止むなく残念ながら市中の焼け行く模様を「アレヨアレヨ」と見て居る許りである。やがて午後一時過ぎには、最早市中一帯及神奈川方面は全部火の海となり、濛々として天を衝いて立昇る黒煙、地を這ふ紅蓮の火、四方皆眞暗やみ。山々に建つ多くの外人の家迄も、

皆共に火を出さざる家とはなく、其凄き様を見れば、横濱市中はさて置き、日本全國皆斯の如く全滅になつたものと、各自此の船にあつて覺悟をして居た。只海上より見るに、山手の山を越して、北方の方面は二三ヶ所に煙の昇るを見、其様子にては澤山焼けて居る様子はないから、此北方に住む自分丈は、稍、心強い感じはして居た。それに古老の話では、横濱が町となつてから、北方泉谷戸方面には昔から未だ火事を出した事はないと聞いて居たから、確に焼けないだらうと空頼みをして居た。何のそのあの凄い天災、何で容赦をするものぞ。皆他と同様影も残さず焼けて了つた。

風は益々強くなり、そして最後迄残つて居つた赤く塗つたグラントホテルの建物も一時半頃には火が付いた。又岸壁にある税關の上屋、棧橋の上にある上屋等も、同じく飛火を喰つて盛に燃え上つて居る。時々刻々と四方は暗くなる許り。そしてその暗中より見る市中の燃ゆる凄い火、煙、連も言語に盡し難い。市中を通ずる各河川は平常澤山の積荷をした多くの艇、又俗に「象の鼻」と云ふ艇の避難所には、何百と云ふ艇に、それぞれ材木や雜貨を滿積した其舟、全部に火は付て、繋いである綱は焼け切れ、風に吹かれ、海上へ海上へと流れ出し、そして此の小舟幾百となく、皆火に包まれ、其爲めあの廣い港内は、隙もなく一面火の海上となり、何んな巨船でも連も危険で、居る事は出来ず、皆港外指

して逃げ出して仕舞つた。けれ共自分等の乗つて居た此のビーオー丈は逃げなかつた。

斯の如く材木、其他の雜貨を満載した澤山な舢舨は、火で包まれ、そして互に衝突をしては沈み、焼けては沈み、其の沈む舢舨には、船頭や其の妻子等も乗り込み居るため、舟と共に海底の藻屑となる者も澤山あつた。誠に悲惨と云ふか、酷たらしいと云ふか、其の言葉が無い。

此の日、此の慘狀の砌り、澤山の哀れな人々を救ひ、そして人の務を盡した船は、自分の見たもので三ばいあつた。其船は(一)英國の汽船で、俗に二百番と云ふ、船名はエンブレスオーストラリヤ、(二)米國の汽船セールと云ふ船、(三)自分達の乗つて居た英國汽船俗に十五番と云ふ、ビーオー汽船の船であつた、さて英國船エンブレスは、其前日三十一日、米國より横濱着、彼の棧橋に横付をして居て、あの九月一日、然も正午の香港向けの出帆、その爲め澤山な見送り人や、乗込みの人達、自動車、人力車、外國人又は日本知名の人々で、殆んどあの廣い棧橋も立錐の餘地もない程であつた。その棧橋は出帆間際の五分前、あの恐ろしい大災難、何條たたらん、此の巖丈な棧橋は脆くも中央より二つに折れ、海中に落ちてしまつたのである。其の刹那、澤山の見送人乗込人は、忽ち棧橋と共に海中に落

ち入り、悲鳴を上げて救を求めて居た。これを見た此エンブレスの船員は、共力して此澤山な人を救ひ上げ、又残りし棧橋の上の人々をも、皆船に收容して呉れた。又風の爲めに市中からの飛火で、火災を起した彼の棧橋の上屋に、ホースを向けて、一生懸命に消火に盡力して居るのを見た。併し其の効なく、上屋は遂に焼落ちて仕舞つた。誠に此船の偉大なる働きに厚く感謝の意を表して居たのである。

次に米國汽船のセールは、此日四號岸壁より澤山の人(殆んど満載)を乗せて港外指して逃れ出るのを見た。此船などは四號岸壁に在りて、あの地震の爲めに岸壁と衝突して船腹に大穴があき、其處より盛に海水が入り、其危険の甚しきをも顧みず、市中より火に追はれ岸壁差して逃れ来る多くの人達を救ひ、其數幾千を算し、二時半頃港外差して逃げ出し、本牧沖の淺瀬へ行きて避難した。此船では随分澤山な市民が助かつた。此船で多くの人達を助けるに際し、實に大膽な、然も勇敢な人が居た。此人を僕等は救ひ上げ、そして話を聞くに、あの哀れな澤山の市民は、火に追はれて、逃場を失ひ、岸壁に繋ぎありし、此セールを見て、ドンドンと船へ逃げ込んで来る。其の人達には老弱男女の差別なく、押合ひ壓し合ひ、飛び込んで来るのである。其逃げ込みに際し、足を踏み外し、又は後より押されて、海中に落ちた人達は随分あつた相である。其落ちた人々は、木片や

板切にすがり付き悲鳴を上げ、浮きつ沈みつ助けを求めて居る。これを見た此人たちは大膽にも堅く決心し、長いロツプを自分の腰に結び付け、浮袋を抱いて、此大荒れをして居る海中差してザンブと許り飛び込み、そしてこの哀れな死にかかつて居る人達を救ふ可く決したのである。處が其際此セール船は、前に述べた通り船腹に大きな穴が明き、其處より盛に海水が入り、其の危険さ今にも沈み相である。是非なく岸壁を離れ、港外の淺瀬に向つて逃げ出したのである。此時丁度此人は海に飛び込んだと同時に此のセール船は岸壁の綱を切り、港外へと向つた。此人は長い綱の片方を自分の腰に付け、片方は此船に固くしばり付けて置いたため、自分も船の出るにつれて、沖へ沖へと引かれて行くのであつた。最早自分の身の危険は迫つて、連も人を助けるどころではなく、却つて其身は溺死せんとする計りになつた。止むなく自分の腰の綱を切り、體の續く限り、腕の續く限り、泳ぎ出し、あの大浪と戦つて、二時間餘も海中に漂ひ、漸く四時頃僕等の乗つて居るビーオー汽船の側へと、浮きつ沈みつ來たのである。そして殆んど半死半生の有様で、僕等に助け上げられたのである。若し汽船を岸壁から離さなかつたなら、此人の勇敢なる働きに依つて、必ず多數の人々を助け上げたに相違なかつたのである。それが不幸にして船腹に穴の明きし爲め、一人も救ひ上げる事が出來ず、むざ

むざ多くの人達を殺してしまつたのは、返す返すも残念であると、此人は涙と共に物語られた。此人の名前は聞かなかつたが、あの當時海岸の須川組の人夫であつて、あの時は丁度岸壁のセールへ仕事に行つて居たのだ相である。

さて僕達四十餘名の人夫は、上陸をしたくも小舟は無し、まして大きな風は益々激しく、其の爲め浪は一層と大きくなり、又陸より來る眞黒な煙で、四面は眞暗やみ、其の慘狀を此の安全なるビーオーの甲板に在つて見て居る心の中……。

斯くする内に、大岡川の川口、彼のグランドホテルの海岸方面より、約十坪許りの家屋が一軒流されて來た。それを始まりに、その後より後よりと、葛籠行李、蒲團、衣類種々、多な品物が續々として流れて來る。又岸壁の方よりは、何十ばいとなき傳馬、船火に包まれた儘が、皆港外の方を差して來る。其の凄慘な狀、連も話しや筆には表す事が出來ない。

さて之から自分として生涯忘れる事の出來ない、悲慘の有様を見た事柄を書き上げやう。

時は將に午後三時頃である。吾々四十餘人は共に此ビーオーの甲板をあちこちらと走り廻り、市中の凄慘の狀を眺めて居た時、暗黒の海上二十番ホテルの海岸方面か

ら、此大浪に弄ばれ、恰も木の葉の如き小舟に、人が一ぱい乗り込み手を上げ悲鳴を出して大浪のまにまに流れて来るのを見た。其危険な事、今にも引繰返つて沈むかと、逆も目を明けて見て居る事が出来ない。只々アレヨアレヨと手に汗を握る許り、其時丁度一ぱいの小蒸汽艇が、是も浪に流されつつ、其側に來た。これには二三人の人が乗つて居た。そして今陸上近く差して走りつつあつた。彼の小舟と小蒸汽とが側近くなつた時、小舟の哀れなる多くの人は、手を出し、聲を擧げて、小蒸汽船に救を求めたのであつた。之を見てゐた僕等は、實に自分の事の様に喜んで、必ずあの小蒸汽はあの氣の毒な、哀れな多くの人々を、救つて呉れるものとのみ思つて見て居た。處が意外々々、此の小蒸汽なるものは救の神どころではない。實に鬼であり蛇であつたのである。平穩の時、さへ十二三人定員位の、至つて小さいサンパンに、乗るわ乗るわ三十五六名も重なり合つて、此恐ろしい海上へ流されて、漸く救ひの神船に出合ひ、皆々喜んで助けを求め、中には手を合せて拜んで居る者もあつたであらう。哀れな人々を見向きもせず、一時も早く此の小舟の側を遠ざからうと、一生懸命逃げ出して居るのを見た、吾々の胸中は、實にくやしさに震へた。僕は小さい時によく人は死んでから地獄と云ふ處に行き、赤鬼と青鬼に何と申譯しをても聞き入れず、何う頼んでも、頓着なしに酷い切諫をして

打殺すと云ふ事をば、よく聞かされた。今此の仕方を見て始めてそれは必ず死んでからでなく、あの小蒸汽の様な奴を、赤鬼青鬼と云ふのであると直に覺つた。そして其の憎い憎い小蒸汽の形を、自分は生涯忘れない。其の形を後に思ひ出す様に一寸書き記して置く。

其小蒸汽は小さい凡そ五十噸位の、本船へ通ふ處の通船で、フツナは黄色に塗り、その上部五分の一位を黒に塗り、丁度あの當時に横濱税關や山下汽船で、使用して居た、本船通のランチに良く似てゐた。火急の場合、故其船の名前は見なかつたが、實に憎むべきランチであつた。併しあの場合であるから、彼小舟全體の人達を救ひ上げたならば、あの大浪故、此小蒸汽は確に危険であらうが、併し其中の幾分がせめて手を出し、救を求めて居る人達や、其の手近の哀れな人々を助けたならば、五人や十人は助ける事は出来る。そして其後は又何とか方法もあらうものを、只自分達の身にかかる危険のみを考へ、多くの大切な人命を見殺しにするとは、逆も人間の風上にも置けぬ動物である。僕は其後ランチの黄色い煙突を見る度に、遺憾の念を増すのみである。斯くて此哀れな小舟の人達も、此小蒸汽には見離され最早頼みの綱も切れて、流れ流れ自分達の乗つてゐる船の方へと、大浪をくぐりつ抜けつ向つて來た。此れを見た吾々一同は、共力して必

す助ける心組であつた。まして自分としては身命を捨てて此哀れなる小舟を救はなければ、人道に背く、人間の義務は濟まないと、固く固く決心をして、小舟の近寄るのを待つてゐた。大浪にもまれつつ、次第に本船に近付いて來た。此れをよくよく見ると驚いた。此小さいサンパンに、三十三四名の人々が重なり合つて乗つてゐた。その多くの人達は主に女と小供であつて、大浪の寄せ來る毎に、ヒーヒーと悲鳴を擧げ、各舟ベリにしがみ付き、生きた顔をして居る人は一人もなかつた。中には子供を抱いて居る、子持のカミサンも居た。男も五六名は居た。見れば舟には早半分、以上も水が入り、人々は頭から腰からビチャビチャに濡れ、そして一生懸命に此本船に向つて各々聲を限りに助けを求めて居る。兩手を合せて拜んで、救ひを求めて居る、人達も澤山あつた。之を見た自分は、最早狂氣の如く、肉躍り、血は湧き立ち、是非共此身を犠牲にして、而して全部の哀れな人々を助けばやと、心はあせれ共殘念な事は此ビーオーは荷物を全部陸揚げをし、今は船は空船である。その爲に船の高さは高く、浪の上より甲板迄の高さは約二十尺位もある。何うしたものであらうと、稍躊躇してゐた。此時朋友の蛭田と云ふ人夫は、此小舟を目掛けて長い綱を投げた。そして此綱の端を小舟の舳に立て、頻りに救を求めて居た五十位の男は、綱の端を取り、ビーオーの側へと手繰り寄せたのである。

これと同時に、此の哀な全部の人達は、必ず助かるものと、喜びの色は顔に充ちた。處が之は皆裏切られて仕舞つた。

さて此小舟に居て、綱の端を取り、本船へ引寄せた五十位の男の話を一寸書き記す。此男は實に勇氣のある人で、自分自から綱にすがり、本船へ上つて助かつた。この男は元町一丁目の人で名は聞かないが、鳶職であつた。地震後僕は毎々元町で此の人を見る事がある。今では健全で、而かも家業は益盛んにやつて居られるやうである。此人の助かつた話を聞くに、あの地震の時は丁度晝飯最中だ。それ大地震だと家を出やうとした時に、最早其の人口は潰れ、又二階は落ち、出る事が出来ない。漸く穴を明けて飛出さうとした處、直ぐ自分の側で大切な倅、當年二十二歳とか云つたは、落ちた二階の梁の下敷となり、哀れな即死をしてゐる。此れを見て、一生懸命其の梁の下より倅を引出して、表へ飛出した處、近所より火災を起し、其火は風に煽られて、危険は迫り、逆もまぢまぢして居られず、夢中になつて其の死んだ倅を負つて、火の中を潜り、元町の大岡川河岸へと驅けて行つた。處が此邊も一體に火が廻り、其近所の人達も逃場を失ひ、皆河へ河へと飛込んだ、人達が澤山あつた。此時丁度河岸に繋いであつたのは、前に書いた小舟であつた。そしてか弱い澤山の女や子供を乗せて、小蒸汽で山下の埋立地へと避難さ

せる可く、小蒸汽が引出されたのである。此サンバンに此人と共に死んだ作を負つて逃げ込んだのである。處が不幸にして、小蒸汽は此小舟を引出し、大岡川口彼の二十番の海岸へと出ると、あの大風浪だ。たまらない、忽ち小蒸汽の引いて居る引綱は切れて仕舞つた。あつと云ふ間もなく、早小舟は海岸數丁海上へと流されてしまつた。そこで引いて居た小蒸汽も、何とかして助けやうとて、後を追ひ近付き、綱を投げた。幸ひ小舟では其の綱を取り、いざ引出さうとした刹那、又も綱が切れてしまつた。其後は益々浪が荒く、何うする事も出来ず、此小舟の人々は最早此小舟と共に運命を浪にまかすより外は無い。大浪の来る毎に、舟には水が入り、風は益々加はり、互に重なり合ひ、頭から水がかぶり、口々に神佛を祈りつつ、流されて居た。大浪の寄せ来る度毎に、何回も何回も、小舟は返り相になる。皆は今沈むか今沈かと、最早諦めては居つたものの、其れでも助かるものならと、大聲をあげて、信ずる處の神々を祈つて居たのであつた。此時にあの眞暗の海上から、微かに見えたのは此船「ビーオー」を云ふである。そして浪に送られ、近付いた時、此船から綱を投げて貰つた時の嬉しさは、何と云つてよいか解らない。そこで自分は御蔭様で救つて貰つたが、只々残念なのはあの哀な全部の人達も共に助けて貰ふ事が出来ず、むざむざと殺して仕舞つた事で、誠に残念であると、涙と共に語られた。

此時に、助けた人々は、女が三人、小供が五人、男が六人、十三人しか助ける事が出来ず、後は全部二十幾人と云ふ人達を見殺しにしてしまつたのである。誠に残念な事であつた。

さて之からが、自分として何時迄も何時迄も、忘れる事の出来ない涙の種である。彼の救つた人、見殺しにした薄命の人達の、あの時の模様を書き記して置く。

自分の友の人夫蛭田と云ふ者の投げた長い綱は、小舟の舳に居つた元町の頭が手繰り、ビーオー近くへ小舟を引寄せた。處が此のビーオーの兩側には荷物を揚げる爲めに澤山の舳が付けてあつた。その舳百五十噸積位のもの、は全部大浪の爲めに沈み、只一ばい丈、此の本船の舳の方に、未だ沈まず浪の来る毎に本船とぶつかり、今にも沈み相であつた。處が彼の人を乗せた小舟は、綱を手繰ると共に運悪く此舳と本船との中へ挟まつて仕舞つたのである。何かは以てたまる可き、此恐ろしい大浪だ、本船と舳の爲め、メリメリと大きな音と共に、彼の小舟は微塵に碎けてしまつた。さあ之に乗つて居た多くの人達、主に女や小供は見る見る小舟と運命を共にし、海底の藻屑と消えんとし、て居る。之を見た僕は、何でほんやりとして見て居られやうか。早速に甲板より綱を下げ、其の綱より舳に飛び下り、そして今にも沈まんとしてゐる。小舟の人達を救ふべ

く苦心したのである。碎けし小舟の人々は、浮きつ沈みつ水を飲み、其の中にも早五六人の小供や女は、海底深く沈み行く様、哀れ悲慘の極みである。

自分は舁より又綱を下げ、其の綱を片手で掴み、そして片手を出すや、其の手には一時に二三人の人達が掴まり、其の爲に自分は海中へ引込まれ相で、如何に自分が力があつても、此二三人をば、何うして、引上げる事が出来やうか。是非なく可哀想ではあつたが、此二三人の手をば振り離して、最初に十歳位の男の子、次に十五六歳の女の子を引上げ、それから又十歳位の男の子を引上げた。其間に甲板より大坂といふ男が綱に捉まり下りて來たので、僕と兩人で共力して、七八人を助けたのである。中には溺れて居る人の中で兩三人の女は甲板より下げた綱に掴まり、上らうとしては落ち、再三再四其綱にすがり、遂に力盡きて海中へと沈み行く悼まじき様、何に喩えん様もない。何しろ大浪の爲め、自分は綱にぶら下つて手を出すと、向ふでも助かり度い一念で、浪間より手を出す、そこで其の手を取らんとすると、大きな浪が来る。其の浪の引く度に、人も共に深く引かれ行く。自分は之では手が届かないと、綱を下げれば、今度は自分も共に浪に潜り、一生懸命苦心に苦心の結果、大坂と二人で、十一人許り助けた。其外男で自ら下げた綱によつて上つた人も、二三人はあつた。そして全部で救つた人達は僅か十三人。其他

の人達を如何ともする事が出来ず、どうとう殺してしまつたのである。一番最後に自分は女を一人引上げた。此人などは最早多くの水を飲み、殆んど死んだ様な狀であつた。然し此ビ―オーの船醫の手厚い手當に依て蘇り、其後丈夫で居られると云ふ話である。此見殺しにされた人達の中に自分が一度助け上げ、もう少しで舁の上へと引上げやうとした刹那、力の足りない爲めに落して仕舞ひ、遂に二度と引上げる事が出来ず殺してしまつた。此人は二十二三の非常に肥つた女であつて、自分が引上げた時は、實に喜びの色を出し、そして一心に力を出して、自分の出した手にすがり付いた。そして互に力を出して引上げ、今少しと云ふ處で、不幸にして互の手に水が付いて居るために、滑つてとうとう落してしまつたのである。其落つる刹那、女を見た時に、其の女は實に失望の目で自分を見詰め、そして海底へ沈み行く其顔は、逆も今でも忘れる事は出来ない。

まだ一人氣の毒な人がある。年の頃は三十歳位で、子持の母親である。二歳位の子供を片手にしかと抱き、そして片手で僕の手にすがり付くのである。僕も如何にもして此親子丈は助けてやらうと、様々に苦心をした。何しろ片手は綱、只々片方の手でもつて、此重い親子を引上げやうとするのであるから、あせればあせる程、片手の力は抜け

る。それに此女の方では、やはり片手で子供を抱き、片手丈で自分の手にすがり居る爲め、何うしても上げる事は出来ない。其内自分は最早耐え切れなくなつた爲め、遂に此親子を落してしまつた。大きな浪は遠慮なく、此親子に打ちかかり、無邪氣なる、子供は大浪の寄せ来る度毎に、目と云はず耳と云はず、口よりは海水が入り、其可哀想な様實に目を明けて見て居る事は出来ない。僕はどんな苦心をしても、此親子だけは救ひ度い一念であるが、逆も親子諸共に引上げる事は不可能であるから、其親に對して子供を先によこせと怒鳴つた。けれ共何うしても親は首を振りて、子供を離さない。これ皆運命、あの時に僕の云ふ事を聞いて、子供を離したならば、或は親子諸共助かつたかも知れない。けれ共あの場合、親として最早夢中であるが、何うして子供を離す事が出来やう。子を思ふ親の心は、皆あの通りであるかと、自分はしみじみと胸に覺えた。彼女は飽く迄も子供をしつかと抱いて、浪の来る度毎に、海水を飲み苦しんでゐる。然し何とする事も出来ない。そこで僕も涙を流し、最早仕方がなく、兩手を合せて、「これ皆前世からの約束事である。何うか迷はずに成佛して呉れ」と、心を鬼にして申したが、其女は之を聞いたかどうか、僕が手を合せて居るのを、實に悲し相な目で見た。此女は澤山な人達よりも、一番遅れて最後迄浮きつ沈みつ苦しんで死んだ。之はきつと抱いて居る子供に

念が残る、死に切れない爲であつたのだらう。然し子供は早く死んだ。其死んだ子供をしつかと抱き、そして苦しんで居る様、實に實に可哀想であつた。此女は最後迄苦み、約一時間半位の後死んだ。そして港外の方へ浮いて流れて行つた。

甲板には多くの人が居るが、此手狭まの個所故何うする事も出来ず、斯の如く多くの人を見殺しにするも、皆約束事であると自分は思つた。

其の内に一人沈み、二人沈み、遂に全部海底の藻屑となつてしまつたのである。其時は午後の四時であつた。實に悲惨の極みである。

自分はそれから甲板へ上つて見た處、それぞれ自分等の助けた人達を、船醫が手當中であつた。此助かつた中に、一家族三人助かつた人達があつた。其人達は以前元町の呉服屋、其當時主人は死んだ爲め無職、一家族で、母親と娘、長男、下女と四名、共に此の小舟に乗つて流されて來たのである。然るに如何なる約束事か。此杖とも柱とも頼む、大事な大事な母親だけを殺し、十五六歳の女の子と、十歳位の男の子、それに下女が救はれたのである。そして僕は甲板へ上つて來た時に、其姉と弟とは聲を上げて、母様々と泣き崩れて居る。其姿を見た時は、共に貰ひ泣きに泣かされた。後日僕は電車の中で此可哀想なみなし兒の姉弟にあつた。其何となく淋しき面影、又々涙を催ふした。

さて彼の恐ろしき大浪も次第に静まり、風も止み、四時半頃には平穩となつた。併し陸の方では盛に火が燃え廣がり、又自分の住んだ北方泉谷戸の方面は、此時盛に火の手が見えてゐた。それ故自分は最早諦めてゐた。それから皆と共に種々と前後の相談をしてゐた時に、又々海面の方に當つて、助けを呼ぶ聲がした。そこで皆と共に海面を見れば、一人の若い男が裸となり、拔手を切つて、此船目がけて泳ぎつつあつた。直に綱を投げて、此男を救ひ上げた。此男は前に書いた須川組の人夫で、四號岸壁のセールで人を助ける爲め、自分も共に溺れんとした人であつた。

さて次第に浪も穩かになり、五時過ぎになつた。本船では之等助かつた人々と、僕等に夕食を出して呉れた。そこで之等の氣の毒な人達と共に、悲しき夕食についたのである。斯くして夕食後、共に甲板へ出て、悲慘なる市中の焼け行く様を眺めて居たのである。此時始めて陸の方から、この船目がけて走つて來た小蒸汽があつた。これを見て絶望して居た自分達は、飛び立つ許りに喜んで、あの小蒸汽は確に自分達を迎ひに來て呉れたのであらうと、此小蒸汽の付くのを待つて居たのである。處が此小蒸汽は自分達の考へとは全然相違して、それは誠に氣の毒なる外國人の婦人、又は子供等の大負傷者を澤山乗せて、本船へ來たものであつた。自分達は失望しながら、其人達を見る

に、實に見るに忍びない程の大負傷者許りで、頭から足の先迄血だらけ、此様を見た自分達は、如何に市中が慘狀を極めたかと云ふ事を思ひやつた。

此負傷者を何うして此のビーオーに送つて來たかと云ふに、此の船には平常醫師が乗り込んで居るので、此事を同じ英國汽船會社の青筒汽船(俗に七番と云ふ)の横濱支店に勤めて居られるマーテンとか云ふ英國人が、自己の謀ひで、此の澤山の負傷者を送り、そして自分も共に乗り、親切な世話をして呉れられたのである。此人の爲めに實に澤山の外國人が助かつたのである。

斯くて小蒸汽は、タラップに付くや否や僕と大坂及蛭田等五六名の者が共力して、此負傷者を本船へと運び上げた。この小蒸汽はまた陸へ引返して、負傷者の運びをする様子であつたから、吾々五六名の者は此機逸すべからずと相談して、此小蒸汽の機關部へとかくれて居た。案の條小蒸汽は陸に向つて走り出した。本船を離れてから、自分達は飛出して、彼のマーテンと云ふ外人に詳しく話して頼んだのである。マーテンも心好く承知して呉れた。其時の嬉しさ、そして自分達を山下の埋地へと上げて呉れたのであつた。時はかれこれ八時半頃であつたらう。暗くなつてゐた。

さて後に残された友達の人夫三十五六名達中には、責任者の金さんも居られた。あ

のピーオーに救はれた人達と共に残り、そして三日の午後とかに上陸した相である。此三日の内に、此等の人々の家では、随分と悲しい事が澤山にあつた。彼の世話役の金さんも可愛い子供二人と孫とが焼死をした相であつて、又此家族達も、當人は三日も歸らない爲めに、海で死んだものと思つて居た相である。誠に氣の毒である。併し自分達五六名は、うまく小蒸汽に乗つた爲め、其の日の内に無事上陸する事が出来た。

さて其の夜八時半頃、山下の埋立地へ上陸して見て驚いた。あの廣い埋立地は幾萬と云ふ數の知れん人々で、又其の人達は皆各、探す人許り、其尋ねる處の名前を呼んで、右往左往に走り廻り、其悲しき聲、泣く聲、又其人々の間には、負傷で倒れて居るもの、焼傷で苦しんで居る者、又死んで居る者等で、足の踏み場もない位い。自分達は此の様を見る、と、尙更住家を思ふて、一分間の猶豫もなく、此人々をかき分け、飛び越え、そして走つた。そして見晴しの山を越し、漸く泉谷戸へと歸つて來たのである。飛んで來る道々も、まだ自分の家は満足である様な心持ちがして居た。來て見れば、何のその一面は最早燃える可き木片一つなく、只々四面は赤々としたオキに化して、あらゆる物は皆灰となつて居た。そこで自宅の焼跡を見れば、何物か未だに少しづつ音を立てて焼けて居る。これはきつと懐しい妻子の死體が燃えて居るのであらうと、最早心もぼんやりとなつ

て涙を流して見詰める許りである。然し氣を取り直し、何時迄も果しなき事なれば、せめて骨丈けでも拾つて行かうと、其の焼けて居る物をかき廻し、骨らしい物を拾ひ、自分の被つて居た麥藁帽子の中へ入れて、そして此後の行末の事を考へて居たのであつた。後日家族と此事を思ひ出し、實に話しの種笑の種となつた。それは此骨だと思つて大切に帽子に入れた品物は、焜爐の中の方にある穴の明いて居るカケラで、音を立てて燃えて居た品は、死骸でも何でもなく、鼠入らずが引くり返り、其の下に焜爐があつて、それが燃えて居たのであつた。

さて此の大切な大切な妻や子供の骨を横抱きにして、トボトボと當もなく、小港の方を差して出かけた。丁度其の途中に一つの小さい原がある。これは平常は麥酒會社の空瓶を澤山置いてある所、この原には澤山の人々が荷物を持つて共に避難をしてゐた。其中に自分の近所の人も居た。そこで若しやと云ふ念が起り、大聲を出して長男の名を呼んで見た。あな嬉しや嬉しや、其子の名を呼ぶと等しく、倅は飛んで來て、自分にすがり付き、聲を限りに泣き出した。漸く慰めて、母子の安否を聞いた處、母も乳飲兒も共に無事で、三人が此先に逃げて來て居たと聞いた時の嬉しさ、何に喩え様も無かつた。

さて妻子に會つて見れば、彼の帽子に入れた疑問の骨、マッチの明りでよくよく見れば、何の事七輪の缺け土で、それを涙を流して大切に横抱きにして居たのであつた。時は丁度九時半、妻は涙と共に話す。海は大海嘯が來て、船と云ふ船は全部沈み、それに乗つてゐる人々は、一人も残らず沈んだ。そして僕も共に溺死をしてしまつたものと諦めて居た相であつた。處が幸に皆共に怪我一つ無しに、無事に親子對面が出來た。共に嬉し泣きに泣き、其の様子を寫眞にでも取りたかつた。

さて妻の避難の模様を聞くに、大地震早々何の慾も出さず、十歳の長男と當歳の次女を抱き、身には襦袢一枚、素足の儘子供も同じ事、命からがらあちらこちらと逃げ廻り、漸く此の安全なる地へと逃げのびたのであつた相だ。さて自分達は此の原に於て、澤山の人達と共にありし事、又此先きの事等を語り、互に稍、安堵の思ひをなし、慰め合をして居つた時、又しても大變な事が湧いて來た。夫は彼の恐ろしい暴徒騒ぎである。時は夜の十時頃であつた。自分達は別に敷物とでもなく、草の上に親子して一塊となつて、子供や妻が恐ろしがつて振えて居た矢先き、何處よりかの噂を、或人が知らせに來ての話を、今此先きの方で暴徒等が大勢で、市民の避難して居る所へ片端から火を付け、今にも此處へ來るから、皆で用心をして呉れとの事。其上まだ下町、北方の山を越して本町

の方を指して云ふの方では、此暴徒の爲めに折角持ち出した荷物を全部石油をかけて焼かれ、又女をば片端から強姦し、男には澤山の怪我人があつたとの話を、此澤山の避難者の居る所で、大きな聲で告げた。さあ此話を聞くや、人々の驚は實に大變で、女子供は泣き叫び、又地震以上の大騒ぎをしたのであつた。そこで此處に居た多くの人々は、兎に角男共全部は手分けをしてそれぞれ武器を持ち、此恐ろしい暴徒に當る可く、互に用心をして居たのであつた。然るに幸ひ噂丈で、其夜は何事も無く過す事を得たのであつた。

明くれば二日、又一難は來たのである。それは吾々人類の一日も缺く可からざる水と米の無い事である。然し幸に水は近所を探して井戸を見付けた。自分は仕事着の儘、妻子は互に襦袢一枚、其上お金などは一文も持たない、幸ひ自分だけは仕事に行く時に參圓許りの小使を持合せて居た。口へ入る物は横濱市民一般誰しも同じ事、一粒の米、一掴みの鹽もなかつた。今迄は只々危い怖いの一念で、食ふ事を忘れて居たが、夜が明けると同時に、腹の方で催促をして來た。そこで今度は食ふ方の心配となつて來た。幸ひ箕輪下の方面で、米を賣つて居ると云ふ事を聞いた。自分は早速、其の米屋を探して、持合せ全部で、米を六升買ひ込んだ。米は玄米であつた。尙其の側の酒屋で味

噲を拾錢分けて貰つた。それも喧嘩でして漸く買つた。此近所は焼けなかつたのである。驚く勿れ此玄米一升の相場が四拾五錢であつた。

さて自分は喜び勇んで歸つて來て、早速自分の家の焼跡へ行き鍋の焼けたのと茶碗三つとを拾つて來て、此處に始めて朝食の仕度に就いたのであつた。平常まづいものを食して居たお蔭で、この玄米に生味噌も、さのみまづいとも思はず、互に腹を肥したのである。それから自分の家の焼跡に、木片や焼トタンを集めて、バラックを建て、そして此の玄米と生味噌で三四日を過したのである。

其三四日の間には、随分種々の悲しい事や、變つた事が澤山あつたが、此處にて筆を止める。兎に角九月一日の大震災に、自分の身にふりかかつた事柄丈けをありのままに、後日の爲めに記したのみである。

八 病兒四人を擁して

神奈川在 瀧田 枕水

大正十二年八月の初旬頃、私共の居村たる市外大綱村に、腸チブス病が流行し始めましたので、警戒を加へて居りましたが、何うして感染したものか、其月の二十三日に三男

が先づ發熱して、床に就くやうになり、次いで當時横濱第二中學五年生であつた長男、淺野綜合中學二年生在學の次男、それから搜真女學校英文專科在學の長女、合せて四名が枕を併べて寝るといふ始末。早速村醫の來診を乞ひし所、疑もなくチブスであると確診されたのでありました。程近い所に村の避病舎もあるが、患者は滿員、其上に萬事設備も行届かぬといふ話であつたから、郡部の委託患者として、約二里半も隔つてゐる横濱市立萬治病院に入院させましたのは、八月二十六日の雷鳴烈しき夕暮でありました。病氣が病氣故、誰を附添ひに頼むと云つても差當り人もない所から、自分自ら當ることにして、設備の完全した所へ入院させたのでした。先づ是れで一安心と思つてをりますと、二十八日の朝、次男が腹痛と痙攣とで、危険状態に陥り、夫れと前後して、長男が極度の腦症を起し、四十一度の高熱に騰るといふ有様で、四人の附添看護婦は、全く不眠不休で、看護怠らず、夫に手厚い院醫の治療で、二男も大分平靜になり、長男も稍意識も判明して來て、九月一日の朝などは、是れならば多少の望みあると、心竊かに喜び、偏に佛陀の加護を頼み、斷えず病兒の枕邊で、延命十句觀音經を讀誦してゐたのでありました。丁度正午頃、私は長男の側に立つて居りました所、俄然としてあの大地震が起つて、今にも病舎は倒れやうとする。私は長男の上に馬乗りとなり、寢臺の鐵柵に諸手を掛けて、長男

を蔽ひ、渾身の力を込めて「南無大悲觀世音菩薩」の御名を唱へ、天井落ちなば落ちよ、梁木頭上に摧けなば摧けよ、我れは死なじと堅く信じて、長男の顔を見れば、極度の腦病に、前後不覺ながらも、チット私の顔を見詰めて居るのも心細い。廊下では三四人の看護婦が轉倒して、聲を限りに叫んでをる。昨年新築成つた許りの病院の柱といふ柱も歪み、窓硝子といふ硝子一枚として満足なものはない。一瞬にして變り果てたる慘狀夢ではないかと思はれた。同じ室に居つた三男は、聲を吞んで寢臺にしがみ付いてをる。看護婦は小さくなつて、寢臺の下に蹲踞つてゐる。病人の寢室は波に浮ぶ船のやうに、左右に動いてゐる。震動が漸く静まつたので、三十餘名の患者と共に、廣い庭内の芝生に避難しましたが、サアかうなると、一塊の氷もなければ、一杯の清水すらない悲しさ、大地は斷えず上下動して、今にも人類は奈落の底に落つるではなからうかと思はれ、横濱刑務所の猛火は、病院近くに紅蓮の焔を卷いてをる。来る人来る人、何れも市内が火の海と化し、焦熱地獄を現出して、死傷十萬横濱全滅といふ、恐ろしい報道を齎して來て、氣が氣でない。半潰の病室から、恐る恐る持ち出して來た白布や、莫塵で、急造の圍ひをしたけれども、初秋の鋭い日光は、遠慮もなく三十、九度何分といふ、高熱の病人の顔や手足を照して、その慘狀は親として平氣で見ではゐられない。自分はバケツを提げて、病院の

堀を飛び越えて、つい一町ほどある松山の崩れた所へ、田の中を涉つて、駆けつけて見たが殆ど水氣もないので落膽して、止むを得ず、田の中の泥水を一杯汲んで來て、病人の氷囊の中に入れてやつたが、それさへ暫時にして、湯のやうになつてしまふ。そんな騒ぎの中に、秋の夕日は西に落ちて、四邊が闇になるに随ひ、炎々たる東京横濱大火の焔は天をも焦さんばかりに見え、それに、折々大地を揺がして、爆發の音響が聞える。恰度午後九時頃であつたらうか、「海嘯だ海嘯だ」といふ消魂しい聲が、暗を衝いて病院正門の邊から起つた。地震と大火とで戦々洶々としてゐる醫員も看護婦も附添人も、一同總立ちとなつて、「山へ早く逃ろッ」と叫ぶ聲がする。磯子海岸から僅に十餘町しか隔つてゐない所であるから、大津浪が來たら、片端から浚はれて了ふ。と見れば今にも此處へ山なす大濤がドツと押し寄せて來るやうだ。黒い大きな雲か、あらず大濤か、一呑に自分の方に迫つて來るやうだ。スワ一大事と、二名の看護婦は早くも三男と長女とを背負つて道さへない小高い丘の方へ避難した。十五歳になる次男を一人の看護婦が背負ひ、十七歳になる長男は自分と及び體格の好い若い看護婦とで、ベツとごと持上げて見たが、長男は體格が好いので、ものの二三間と運べない。ママよと自分は度胸を定めて、芝生の上に坐つて、四邊の様子を見たが、何んだか海嘯襲來も、一片の流言蜚語ではなから

うかと不圖思つた。ただ草間に啣く蟋蟀の聲が物悲しげに聞ゆるばかり、次第にそれが事實でないことが解つて、一同漸く安堵の思ひをして、山へ避難した者も呼び戻し、皆々不安の一夜を過ごした。明けて二日は、前日にまさる暑さなるに拘らず、病院附の氷會社が全滅したといふので、一片の氷さへ來ない。水を求め氷を望む患者の苦しみは、血を吐くやうだ。中には病める兄を救はんとして、三里餘も隔つる田舎から、僅か二貫目程の氷塊を背負うて、アノ大火裏の横濱市中を突破し、川を泳ぎ、火を分けて、病院へ駆けつけて來た健氣な若者もあつた。五歳位の愛兒に、一塊の氷を與へたい親心から遠く壽町の川岸の氷會社に出掛け、火を掻き分けて、氷室から一二貫目を掘り出して、病院へ持つて來たが、アノ暑さと火氣とで、氷は半ば解けて、病院へ着いた頃には氷枕に入れるにさへ足りない位であつた。其僅少な尊い氷の一片を、隣りの芝生に枕を並べてゐる自分等の方へ分けて呉れた。熱い涙と共に押し戴いて、自分は之を石に叩いて四片となし……一片といつても僅かに口を濕すに過ぎないが……夫れを四人の病兒の口に入れてやつた。病める兒童は天の甘露でも飲むの如く、「アア甘い！」と云つて、咽喉に入れた。どんなに美味かつたらうか。私の胸は張りさくやうだ。熱い涙が止め度なく出た。三十餘名の患者に、假令一片の氷でも與へてやりたいと思ひ出したら、居

もて立つても居られない。そこで決心の勇を鼓して、病院の小使を頼み、箱車を引出して、ただ一目散に壽町の川岸に向つて走り出したが、連日の疲勞と空腹とで、二三町駆けつて見たが、どうしても足が進まない。小使は車を挽いてズンズン行つて了つた。後で聞けば、是も亦途中から火のために引返へしたといふことであつた。自分は横濱刑務所側の神奈川縣佛教慈德會本部に立寄つて、熱い番茶を一杯振舞つて貰つて、漸く蘇生の思をした。私は此本部へは十年以來出入して、免囚保護事業に關係して居た爲め、萬事好都合で、恰度見知つてゐる出獄人が自分に同情して呉れて、何處をどうしたか、此日一貫目程の氷を病院迄届けて呉れたのであつた。

斯る恐怖と混亂との中であるから、氣の毒にも手當行届かず、入院患者の中、野天で息を引取つた妙齡の婦人もあり、幼い小供もあつたが、あはれ最後の氷さへ充分には與へることが出來なかつたのだ。親身の人の心はどんなであらうか。自分は出来るだけ慰安を與へてやつたのであつた。

一難去れば又一難來る。其夜は鮮人が病院を焼拂ふといふ噂で、一同安き思ひもなく、夜露冷かな芝生で徹宵警戒をした。時折りは悶え苦しむ病兒の唸り聲に、心も滅入るやうな思ひで、不安の一夜は過ぎた。翌三日は空模様何んとなく險惡で、午後からは

風も加はり、三時頃からは雨となつて、病人の軀に雨の雫は遠慮なく降りそそぐ始末なので、看護婦を督勵して、潰れ残つた他の病室に落付くことにした。

四日の夜から、長男の容態漸く重く、院醫の顔には暗い蔭が宿つてゐたが、幾回かの注射も遂に甲斐もなく、五日の拂曉、初秋の朝風冷かな午前五時といふに、長男はあの戒嚴令下の市中のさわぎを餘處にして、十七歳を名残りに、靜に永久の眠りに就く。

此大震災火災に由りて、東京横濱では一家全滅の者さへある。中にも慘鼻を極めた本所被服廠の三萬人、聞くに肌に粟の生ずるのである。我々家族の一人位亡つた位、これしきの事何を悲しみませう。何事も因縁と諦めて、せめて、残る三兒だけでも、生れた家で死なし度いと思つて、其日自分は自坊に歸つて、近所の檀信徒に窮狀を訴へた所、方夫様の一大事とばかり、立所に十有三名の壯漢が、病人引取りに助力して呉れることとなり、長男の死骸を一臺、病人を二臺、都合三臺の戸板を擔ぎ、橋は焼け落ち、電車線路は陥没し、電線は蜘蛛の巣のやうに亂脈を極めてゐる、宛然戦場のやうな横濱伊勢佐木町馬車道高島町通りを辛うじて突破し、三名の看護婦附添ひ、寺に落付いたのは、其の日午後九時であつた。入院當時は、「ウム大丈夫だ」と豪語してゐた長男も、今歸れば呼べども答へず、香煙枕邊に立ち上つて、白木の位牌となつて了つた。

生き残つた三兒は、幸ひ生命も取りとめて、今は幸福の日を送つてをる。

月行き星は移りては、や三歳、思へば何事も夢のやうである。

九 山下町から逃れて伊勢山に到るまで

齋藤榮三郎

私はあの時に、山下町のストロング商會に居りました。其の商館は煉瓦作りでしたから、勿論ひとたまりもなく潰されてしまいました。八十名近くの會社員は、揺れてる間に机の下へ潜り込んだり、外へ飛びだしたり、各、生きんがために敏捷に、咄嗟の働きをしました。然し不幸にも倉庫の最下に居りました者七名が、お氣の毒にも壓死されました。そして此人達は皆な年を取られた方ばかりでした。私は机の下へもぐり込んだ一人ですが、揺られて居た瞬間は、まるで「此世が地球のドン底へ落ち込むのか」と思はれました。やがて靜まるのを待つて、同僚とお互に無事を呼び合つて、表へ這ひ出しましたが、其呼び合ふた聲の淋しかつた事は、未だに忘られません。

山下町から逃れて伊勢山に到るまで(齋藤榮三郎)

全く自分達ばかりが此の世界に残つたのだと云ふ氣さへいたしました。會社の前は公園です。其公園も花園橋通りも、私共が命からがら出ました時には、水管が破裂してゐて、一面の水です。會社の連中はお互に潰されて居る友を救ふと、狂氣のやうな聲で叫んでましたが、私は此時に「自分もコンナに激しくつぶされたのであるから、我家の方も、イヤ兩親も、妻子も、やはりこんな慘たる様であらう」と、現在今までもパンの道であつた會社を振り向きもせず、水の公園をぬけて、市役所前へ逃げて行きました。自分の頭には卑怯なんて感じは少しもありませんでした。此場合頭の中へ浮んだのが、兩親の顔でしたから。此時に市役所は未だ焼けも倒れもせず、巍然たるものでした。魚河岸から吉かねあたりまで、もう身の毛もよだつやうな怪我人が、戸板に乗せられて舟へ運ばれて居ます。道路の割れ目には馬が落込んで死んでいます。空を見ればなんとも形容のできぬ凄慘な色で、自然の恐ろしさを現はしてゐます。

私の家は野毛町でありましたから、吉田橋を渡つて都橋へ參らうとしますと、吉田町はもう火が廻はつたやうです。人間と云ふ奴は妙なもので、少しでも家の無い所が安全だと、トッサに考へて、柳町の川岸を駆けて、將に落ちんとするくの字なりになつた柳橋を、危い思ひをして渡りました。柳町の川岸通りでは、火の手が近くへ押し寄せてゐ

るのに、男三人で崩壊した屋根の上で、穴を開けて、中なる潰された家人の名を呼んでいます。

流石に大江橋は、最近に開橋式をあげただけであつて、また横濱市の誇りの橋だけに堂々として、新海さんの彫刻したあの鷹は何の異狀もなく聳えてゐます。貧弱な木橋の柳橋を渡つて來た私は、廣い巨きい頑丈な大江橋を渡るに及んで、何とも云へぬ強味を感じました。

歴史的の建築物の櫻木驛もどうなつて居たか。ただ此の邊りを目の色を變へた人が、夢中で恰も多くの人が駈けるから自分も駈けて居るんだと云ふ風に、ゴタゴタして居ました。

緑橋のそばには、大きな炭やさんがあつて、旺んに燃えています。未だ橋へ火がつかぬので大急ぎに渡り、我家へ歸りますと、嬉しや兩親も妻子も無事です。母は、お前さへ無事に歸つてくれればもう何にも入りませんと云ふあんばい。只孫をかたく抱いて老いた顔にも、物凄い程の緊張振りが見えます。時間は震後五十分も過ぎたでせうが、此邊子の神附近は倒れた家もなく、近所の人にはまるで轉宅でもするやうに、何にもかも擔ぎ出して、神社前へ山と荷物を積んでいます。山下町や關内方面から比べますと、震動の

程度がズット軽かつたやうに思はれます。其内に野毛の通り方面から、漂々たる黒煙と紅蓮の焰が襲ふてきました。火の手が速いのに驚いて、慾張つて出した荷物を其まゝに、皆な逃げ出しました。つくづく思ひますが、ああいふ際には澤山の品物を骨を折つて出すよりは、肝必要の貴重品だけを肌身につけるか、或は又しつかりした袋の中へ入れて逃げるにかぎります。

擬て私共は伊勢山より他にのがれる場所がないので、危い思ひをして、崩れた坂を登りました。不動下の名物三十六童兒も空しく土に埋まれています。私は七十九歳になる父を背負ひ、妻は母の腰を押し、ズルズル滑る此崖崩れの道を、いろいろの意味の汗を流して攀ぢ登つたのです。幸に不動の石段が破損して居なかつたのは、是れが神の助けとでも云ふのでせう。私達は初め太神宮下の梅林の中へ陣取りました。邊りは避難者で充滿してゐます。

私共の隣りへ、いつも太神宮下で見世を張つてゐる菓子屋さんが來たので、私は何よりも先き、喰物が必要だと思ひ、金を出して買はふと致しますと、これは意外、エエお金なんかこんな時に入りません。いくらでも持つてゐらつしやい。」と恵んでくれました。斯ふ云ふ大事の際には、人の心の奥ぞ知らるるで、誠に愉快を感じたのです。いや、美談

は是ればかりでなく、我々が坂を越す時に、難所に二人の船頭さん風の人が居て、老人や女子供を一々脊にして運んで居ました。其れが夢中で、そして眞剣の態度で、やつてくれて居るには實に感謝しました。斯うした眞の日本人の中にも、また悪いのが居ます。澤山の草履を抱え込んできて、野毛の通りでドーせ焼けるんだから取つて來た」と、五六圓もするやうなフルトの草履を、得意になつて持つて居る職人もありました。夕ぐれ近くに、此安全地帯も、だんだん危くなつて來まして、遂に太神宮前の廣場へ追ひ詰められました。廣場のけしきは大變なものです。

おはちを抱えた人、簞笥の引出し一本持つた人、色々の人が集つて居ました。殊に目についたのは、若い女が袖のちぎれた姿で、首玉に何にか小包を巻きつけてます。其れは彼女の嫁入着物の半ぺらかも知れませんが、而し大體に於て、此蠢動してゐる人は、空手が多いございます。此所ならば横濱中一番安全な處だと思ふてましたが、どうして火の手は此の山をすつかり取圍んで、火焔はペラペラ匍ひ廻る。巨木の燃ゆる凄い音……。其れ社務所へ火がついた……。獎兵議會が焼けたと、喧々轟々の裡に、此廣場に充滿した人は、もう地獄の釜の蓋の上であばれてゐるやうです。其内に例の旋風が吹いてきたので、火の粉はドンドン落ちる。子供は泣く、女は喚く。此時です、人間が最後

の叫び聲で、日頃念じる「南無阿彌陀佛」に熱狂したのは。でも弱いやうでも強いものです。子供までが木の葉をむしり取つて、火の粉を防ぎました。苦しい時の神だのみが、功を奏したか。どうやら下火になり、風もなきてきまして、漸く吐息を嘔いた瞬間、突如「大變だ大變だ」裏山の火が大神宮へ移つる。若し火がつけば此山の上の者は、皆んな焼けて死んで仕舞ふ。一難去つて又一難、然かも今度は全くの九死の境だ。先づ中央にある神樂殿を倒さねばならぬ。男と云ふ男は、恰も訓練された兵隊さんのやうに出て、「ヨイヨイ」とかけ聲で、中々倒れぬ神樂殿を倒してしまいました。此の勢で拜殿も倒さねば危い。

「拜殿を倒せ、拜殿を倒せ」の聲は人から人へ、其れから其れへと傳つてます。今我々の頭の中には、あの拜殿を倒してしまはねば危険だと云ふより外に、なんの考えもありません。そしてやり始めました。「ウーン、ウーン」の聲は、何回も繰返されましたが、どうしても倒れません。火は將に本社を呑まんとしてます。「誰でも來て呉れ！」の聲は、此勇ましい人達の死物狂ひの助けを呼ぶ聲でした。斯うなると、俺も我れもと、八方から助手が飛び出し、ウンウン押ししました。廣場に顫るへて居る男も女も、片ずを呑んで神に祈り乍ら、拜殿の倒れる事を願ふたのです。「社殿を倒す。」全く斯んな場合、斯うした處

置が、全部の人の天に祈る誠の心であつたのです。晝飯も喰べぬ此等の押し手は、満身の力を限りにこめて、かけ聲囂らし押しますと、さしもの拜殿もメモリと揺れて來ました。押手は「ベタッ」とばかり、最後の力でたうたう一大音響と共に、其の拜殿は倒れてしまつたのであります。此瞬間、多くの人は感謝のあまり、手を打つて暫し大地震と云ふ事をも忘れたかの様に喜びました。我々はそれによつて助かつたのです。

横濱市の中央、また横濱全市の總氏神である處の大神宮の拜殿を倒して、何百何千と云ふ人が助かつたと云ふ事は、誠に妙な意味のある事と思ひ、震災史料には永久残る話であると存じ書きました。

一〇 税關内の遭難と西戸部に至る途上

石 引 宗 四 郎

大正十二年九月一日、我々の毛頭豫測し得なかつた、又あり得べからざる事のやうに思はれた——平安な我々の眼前に、恐るべき一大天變が起つた。

前日の雨に續いて、その日も午前中は、折々の雨が來たので、蝙蝠傘を持つて家を出た。

いつもとは何等の變調もなく、また後で考へても、これと云ふ不思議な前兆もなく、極めて平凡に、何一つ思ひ當る様なこともなかつた。頃日來役所に設けられた僚友會圖書部の整頓と會誌の印刷とに専念に力を入れて、此横濱税關に小さい乍らも、私といふ生命の一部を刻み付けるに足る、記念物を遺して行き度いと思つてゐる外、何も考へず役所に着いてからも、平素と變りなく、リネンの上着を衝立に架けて、給仕が持つて來たお茶を呑みながら、彌、今日から九月に入いつたと云ふので、例の親和會を熱海あたりで開かうではないかなどと、隣近所の同僚と話しあつてから仕事にとりかかつた。

ふと外を見ると、空合が急に明るくなつて、重なり合つてゐる雲の間から陽が射して、だんだん晴れ上つて來たが、風が少し出たやうにも思はれた。彼是するうちに、十二時近くなつた。私は二階の食堂(新港)へ辨當をたべに、階段を登つて行つた。丁度二階まで上つた時に、其處を三階の食堂のある所と間違へ、食堂にしては何だか勝手が違ふやうに思はれたので、ふと上を見ると、何のことだ、もう、一つ上らねばならない。だるい足をまた運ばねばならぬかと思つて、方向轉換をすると、足許が急にグラグラとして來た。下から上に投げられ、上から下に落され、前から後に、それはどんな揺れ方があつたかと思ふ隙もなく、何物とも知れぬ錯綜した大音響が、私の耳朶を撃つた。而して私の體の

重心が無くなつて、佇立してゐることが出来ない。

素破大地震起れり、大地震、大地震。

閃光の如く、腦神經に響いて慄へ出した。ままよ、階段を駆け下りやうとすると、手摺に身を凭れ、左の手に煮え立つた湯を一杯入れた大きな銅の藥罐を持つて、三階の食堂へ運び上ろうとする、一平の漫畫にあるやうな、髻むくの背丈、けの小さい、田舎者らしい小使の爺さんが、下りるには下りられず、さらばとて登ることも出來ず、蹣跚しながらも、手を放てば煮湯を二階から振り落さねばならぬ。どうしたものかと眞蒼青になつて、此の場から逃れやうと藻掻いてゐる。私はこの爺さんに妨げられて、上から煮湯をかけられたらどうなるかなどと、今は一秒の猶豫もない。爺さんの頭の上を飛び越えて、トットトットと手摺に縋り、駆け下りて見ると、衝立は倒れ、壁は墜ちて、出口に散亂してゐる。轉がるやうに、やつと戸外に出て、ホッと一息したもの、附近は大暴風雨の跡の如く、巨大な箱物が散亂してゐる。而して鋪石は亂抗齒の如く飛び出し、軌道は鉛の如くうねり、鐵板は躍り、樽入の貨物が恰も大波に揺られ揺られて漂ふてゐる様だ。見れば此時もう地殻が割れて、泥水が大河を決する時のやうな、凄まじい勢で噴き出して、一面の洪水を見る様になつた。而して大地の動搖は一刻も止まず、ヨロヨロとして

立つてゐることが出来ない。あの三階の廳舎が、さながら一本の青竹が暴風雨に吹かれてゐる様に、前後左右にグラグラと揺られてゐるのを仰ぎ見た時は、どんなに私の心膽を寒からしめたか。大勢の人々は蜘蛛の子を散らした様に、安全な所を選んで、鐵板の上、レールの上などへ逃げてうつ臥した。私もあの高塔が墜ちたら、私の身體も木葉微塵になるだらうと、全力を盡して、漸く廣場に出た。ここならば廳舎がどの方面へ倒潰しようとも、まづ安全であらうと思はれたので、ホッと一息した。眼を轉じてあたりを見ると、新港倉庫の幾棟かが將棋倒しに全潰し、鐵骨の上屋が波形に引伸ばされて、額雪れ落ちてゐる。幾條かのレールが曲折し、花崗石の鋪石が著しく窪んで、齒の抜け跡のやうに凸凹してゐる。遙に市街を視れば、黃塵は萬丈の凄味を帯びて、濛々たる砂塵を降らし、我が一身を包むものは總て晦暝、今や暗濤たる黒幕に掩はれんかと思はるる計りであつた。

此時廳舎前に聚合し、驚愕と悽慘の氣に喪神したやうな血の氣なき幾人かの人々のうちに、飯田監視部長が前髪を振り亂して、平山監視に「官舎はどうなつたか見て來てくれ」と命じた。平山は直様オートバイに跨り、スパークを起したが、一間と走り出ぬうちに横さまに倒れ、又スパークを出して走り出ようとする、忽ちに倒れるので、オートバ

イを發電所近くまで轉がしてから、萬國橋は墜落して通行することが出来ぬと、引き返して來たが、後から考へると、まことに無謀な企であつた。

瞬くまに、何處からともなく、烈風が渦を捲いて、地上の總てを捲き上げんかと思はれたので、斯うしてゐるにうちも、屹度海濱が襲來して、無限奈落のどん底に掻き浚つて行かれるであらう。官舎に留守居して居る妻と伴が如何なつたか。それが氣に懸るので、一刻もじつとして居られぬ。誰か自宅へ歸るものはないか。斯う私が叫んでも、馬鹿なことを云ふな、危険で歸れるものか、と居合すもの、うちで誰も取合ふものがない。然し私は決心した。猶動きやまぬ廳舎内に躍り込んで、白の上衣と麥藁帽子とを逸早く小腋に抱へて、外に逃げ出し、大きな揺れが來れば其處に立ちすくみつつ、新港橋に一目散に駆け出した。而して橋を渡ると、二尺角の敷石が殆ど飛び出して、護岸が崩れ、地盤が六尺程も陥落して居るのを見た。

行く手の分析室の窓から、物凄しい紅蓮の焔が三つの硝子戸を打ち破つて、地を這ふて吐き出してゐる。黒煙が濛々とあたりに渦を捲いて、旋風を起してゐる。此時平生よく遊びに行つた輸出事務所が、早くも倒潰して、中臺君外數名の友人が事務所の前の土を盛つてある空地に逃げて居つたのだ相だが、それには一寸も氣が付かず、火の手の彼

方になびいた瞬間に通過して、泥田のやうになつてゐる敷石の道路を轟然と跳び越え、新西門を出た。然し自分の行くべき道はどれを選んだらよいかが考へる隙もない。只怪我せぬやうにと、無意識に郵船會社支店前の廣い道路を、裁判所の方へと、ひた走りに走つた。

郵船會社支店構内にある税關検査課員の同僚諸君が、大きなコンクリートの障壁そのままに平に倒されてゐる上に、一塊となつて慄へ乍ら「そら又動き出した」と叫んでゐる處へ來た。「危険だ危険だ。暫くここへ來て様子を見てゐるがよい。ここなら安全だから。」と頻りに呼ぶので、立ち寄つて見たが、一分間とそこに居堪つて居る事が出來ない。一刻も早く官舎へ官舎へと、みんなを誘ひ出した。道端には避難者が右往左往に彷徨つてゐる。元濱町一帯の家並が、一つ残らず押し潰されてゐる中から、素裸のまの爺さんが、足は折れ、手は挫き、やうやうに引き出されて運ばれてゐるのや、路の真中に何十人とも知れぬ負傷者が全身血染となつて、土埃にくるまつてゐるのや、鉢巻した男の頭の三方から血を噴き出してゐるのや、數知れぬ中に、悲鳴が何處からともなく絹を裂くやうに、耳に響いて來る。何物かの爆發する音が消魂ましく鳴りひびく、電柱が倒れん許りに搖れはじめ、電線が無數の蜘蛛の絲を切り落したやうに散亂して、兩脚に

搦み付いて、急いでは歩けぬ。車臺を解き棄てた馬車の馬が、溫順しく眼をバチバチやつて、不思議の何物かに驚いてゐる。牛が今にも蹣跚き倒れん許りに、巨大な圖體を持つて餘し、素直な眼をして、鼻を舐めてゐる。地割れが龜の甲のやうに鑿寄せて動いてゐる。阿鼻叫喚、生きながらの地獄とは、そも之をしも云はずして何があらうか。喧噪と雜音の中に生きんとする人類の淺ましき修羅場が、今や大波のうねりの如く地上に現出された。

おお幾千幾萬の死者が、辛くも甦れるものをして如何に歎かしめ、如何に狂はしむることであらう。斯く思ふまゝもあらず、大きな動搖が恐しい地響をしてやつて來た。立つてゐることの出來ないほどに、左様云ふ間にもはや、裁判所の大きな建物が美事押し潰されてゐるのを見た。いや何處を見ても潰れぬ家はない。第一銀行が一つ残つてゐる。辨天橋が陥落したと云ふ話が何處からともなく聞える。櫻木驛方面へは行かぬのだ。ああ困つたことになつた。こんな風では途中怪我なしに自宅に歸れるだらうかなどと、不安が胸に逼つて來たが、どうしても歸らねばならぬと、私自身を勵まして、一直線に鐵の橋へと、一心不亂に駆け出した。咽喉がつまつて呼吸が苦しくなる。正金銀行は大丈夫であつた。その隣の川崎銀行も何等の異狀ないやうであつた。

正金銀行から馬車道へと夢中で走つて行くうちに、右手に火災が起つた。倒潰した軒竝を一砥めにして、炎々と燃え廣がつてゆく。煙の中に咽せ返りながら、一走りすると、左手の潰れた土藏の鐵格子の窓から、婆さんと神さんと娘らしい三人が、聲を濁らして、うちのお父さんが潰された。早く助けてよと狂ひ泣いてゐる。どうにも手の出し様もなく、ヨロヨロと揺られながら、立つて居つた巡査が聲を上げて、そんな處でない。早く逃げる。みんな死んで仕舞ふぞと呟鳴つてゐる。可愛相に助けてやりたいが、一刻も早く自宅へ歸らねばならぬものと、それを聞き流したまま、馬車道の電車交叉點まで來た。電車が空のまま立往生してゐる。幾臺かの自動車が廣場に投げ出され、人々の顔色が異様に鋭い眼を光らして、自分の運命を賭してゐるやうに見える。鐵の橋から著しく地盤の低下して居る上を、電車線路が一尺も浮き上つた姿で曲折して居る。一尺位の幅に地が龜裂し、そこから泥水が噴き出して、逃げ惑ふ男女のいく群が、蜂の巢を突いた様に跳び廻つてゐる。慘憺たる光影が刻々に路面に展開されて行く。

橋を渡つて右に折れ、吉田町に進んだが、ここは兩側から軒竝に重り合つて倒れて居るので、どこも逃げ路がない。仕方なく裏手柳町の河岸を行くと、三尺から四尺位の幅のある大きな龜裂が、溪谷の大洪水の跡のやうに深く窪んで、そこに一匹の青毛の馬が、

背を下にして全身を埋めて、蹄と鼻先を路面に現はし、身動きもせず、眼をバチバチさしてゐる。恐ろしい地割だ。

嘗て濃美の大震に、地割一尺に及びしと聞き、當時の慘狀を彷彿せしめ、慄然としたが、まのあたり牛馬の全身を埋むる、大地の裂目を目撃して、如何に私をして戰慄を感じせしめたであらう。斯うして今逃げて行く内にも、次の動搖と共に、我が踏む大地の大きな裂目に、わが身を埋め、生きながらにして、次の動搖と共に、板挟みとなつて、埋められたら何うしようか。敏感に智能が働いて、若し右足の踏む處が裂けたら、同時に右足を上げ、左の足の踏む處が裂けたら、同時に左足を上げ、かくして兩足のある處が裂けたら、兩足を宙に吊して、跳ね出すであらうなどと思ひながら、あああの馬も、誰一人として援け出すものなく、死んで仕舞ふのか。南無頓生菩提、馬頭觀世音と念じつつ、割目々々を飛び越えゆくうちに、颯と吹く風は、わが麥藁帽子を河の真中へと吹き飛ばした。もしもし、その船人よ、帽子を拾つて呉れと頼んでみたが、まよよそんな餘裕があるものか、私の命さへ否々私の生命許りでない、この地球さへ眞二つに割れて、遠心力も何もあつたものか。打ち上げ花火の雷鳴のやうに二つの殻が木葉返しにバラバラと落ちて來て、爆音の跡に、ただ一片の白雲の漂ふて消えゆくのであるまいか。

都橋を渡つて野毛町に出る。もう火の手が上つた。左に折れ、宮川町河岸を行くと、一町許にして片側の家の軒が、道路になだれ落ち、川べりに沿ふて、一尺位の通路より外なく、其處へ一抱もある電柱が倒れて居る上を、運送馬が跨いだまま、前にも後にも動けず、腹を押されてゐる。私の行く手は、この一筋の道より外に取るべき手段がない。河岸に繫留してあつた舩船に乗り移つて、大海へ流されて行く方がむしろ安全かと思つたが、多勢乗つてゐる避難者の老人や女子供達に、邪魔することを恐れて、危険だと思つたが、性質の知れぬ馬の尻尾に掴つて電柱を飛び越え、宮川町から野毛裏通りを逃げゆくと、前へのめりし相な動搖が又來た。道路の真中へ戸板を二枚ならべ、その上に座つたまま、ぶるぶる戦いてゐる女子供の中へ、「御免なさい」と跳び乗つて、震動の靜まるを待ち、また駆け出し、何處も彼處も斷ち切られた幾十條の電線に、足を捌まれ、塀の倒潰したの、や、木の板の飛べる中、瓦のガラガラと落ちる下を、危くも遁れ、野毛坂下の界刃物屋の側に抜けて、野毛坂を上つた。平沼氏邸宅の石垣が、僅か計り崩れて、大部分舊態に在つたのは、純日本式築石法に依つた爲であらう。呼吸堰き切つて、坂を登ると、片側の家がどれも潰されて、小さな風呂敷包を持つた女や老人達が、道路の真中に立つてゐるのを見た。伊勢山の上から崖が雪崩れ落ちて、急勾配になつてゐる所を潰されたので、其下

の家の庇や柱などの木片が滑り落ちてくる。釘の抜け出してゐる板の破片が、やはらかい土の中に埋められ、電柱が梁に凭りかかつてゐる。その上を斜面に這ひ登つて、戸部町へぬける。大勢の群に混つて、私も先へ先へと登り越え、釘のぬけ出てゐる木片や、硝子の破片などを拾ひ除けて、漸くのぼりつめると、森坂金網店の家族が、ガラガラ揺れてゐる道路に立つて、形勢を見てゐる。これは私の郷里の方である。「まあみな無事で何より」と挨拶してから、もう自宅も近くなつたので、一層勇氣を勵まして、駆け出した。鬼子母神を祭り、日蓮宗の太鼓を打つて暮してゐる智院さんの坂の上り口の家が倒れ、その前の買ひ付けの煙草屋の婆さんが、手に負傷をしたとて、あの三味線を稽古してゐる色の浅黒い十七許の娘が、慄へながら泣きたててゐる。凄味が又加はつたやうに思はれた。山王山の坂へかかつて來た時、片側の家並は半ば傾いて、前に面した崖が崩れて、道幅が狭く塞つてゐる。冷汗を流しながら軒下を通り抜けると、關長さんの板塀が崩れ落ちてゐる。裏手にある生垣に掴つて攀ぢ登り、根殻垣の根本傳ひにやうやう關長官舎の玄關前に出ることが出來た。時刻は何時であつたか。後に記憶を辿つて考へると、彼は午後一時頃と想像される。私の運命の決する時も來た。孤獨の西行となるも、歡喜の樂園に抱擁さるるも、この時に決せられるのだ。ああこの運命が、何れに開

拓されるだらうか。自然と云ふ大きな力に抗争することの出来ぬ運命は、何れに行かうとも諦むるより外に道はない。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、ああ恙なかれと祈る心の奥底の囁きよ。幽かなりとも光明あれかしと禱りつつ、遂に關長官邸の門を出た。

官舎は總崩れだ。夢中で駆け出した。私の家に入る通路門を入ると直に土埃の中から遁れ出た恐ろしい眼の底光りする男が、地面に踞つたまま吐息を洩らしてゐる。戸波君だ。咄嗟の際に於ける彼の敏捷なる行爲は、敬服に値ひする。併し話をする隙もない。他を氣遣うてゐる心が苛々するのみだ。なだらかの坂路を一目散に駆け下りると、私の家への入口の道の真中に、妻が三月生の作を負つたままメリンスの風呂敷を提げて、私の安否を懸念しつつ待つてゐた。震災後の今にして、之れを考へて見ても、ホット一息したといふ外に、何物も思ひ出せぬ。

(萬相流轉抄錄)

一 遭難當時の日誌中より

池 田 治

私は主人(日出町二丁目四四井上酒店)の命に依り、晝飯を喰はず、岡本君と共に伊勢佐木町の竹内料理店に注文の品を届けに行つた。使命を果たして將に歸らんとした時で

ある。憶ふだに恐ろしい、大強震の起つて、之が爲め天地鳴動し、家屋が倒潰したのは。私は愕いばかりでなく、少なからず狼狽した。此時家屋の倒潰ばかりで無く、同時に上下水道の水が一つに流れ出したのであつた。私の頭には南吉田町に住む叔母の身上より外には何物も無かつた。私は大急で其家へ駆け附けて見たが、既に家は潰れ、其下に死んで居るのか、又逃れ出たのか、サッパリ判らなかつた。私はただ無意識に上に乗つて、瓦を剥がしたり、板を外したりして居たところ、隣りの潰家の下に人が居るらしく、私の助けを呼ぶ様に聞えた。

其時私は忘れてゐた事が電光の如く突如として浮んだ。それはサッキ私は伊勢佐木町で潰された家の中から、四十餘の女を引き出して遣つた事であつた。之が爲今まで後れたのでは無つたらうかと。そんな考をしてゐる中に、風上から黒煙材木屋の火らしくかつたが、出昇つて來たので、詮方なく日本橋まで引返した。橋を渡つて眞すぐ行くと、道場橋の袂と、萬治病院の廣場とには、最早百人餘の避難者がゐた。白服が土ほこりで鼠色になつた一人の騎馬巡查が、中村町の山上に逃れよと聲を限り叫んでゐた。中村町の石油倉庫が、炎々と燃え出したのは、それから間もなくであつた。私が若し二三十分間も躊躇したなら、火の中に包まれる處だつた。山上を少し下つた所の底地に

一軒の荷馬車屋があつた。水を索めたけれ共井戸が潰れて清水が無く、やつと濁水を貰つて飲むことが出きた。親切な同家の主人は、小さい乍ら一つの握り飯を呉れた。其時の味は今も猶忘れる事が出来ない。厚意を謝して立上つた時に、始めて店の事が思ひ出された。

直ぐに行かうとしたが、火の爲に行く事が出来ない。迂廻して蒔田町の英和女學校の上へ行つても見たが、行くことが出来ない。遂に大岡町の高等工業學校の先を通つて、南太田町の親類を訪ねた。此處は幸に火事はなく、家もそのままであつたので、ホツとした。地震が大きいので、留守居の伯母さんは、近所にでも行つたらしく、家の中には誰も居なかつた。そこから日出町までは十餘町あつた。久保山を通り、半僧坊の前へ來て見下した時には、見渡す限り、六時間以前の日出町とは少しの差ではなかつた。焼跡を眺めてゐた時、一友人に會つた。そうして水道山へ上つて、家族一同の無事なる顔を見る事が出来た。

時將に日没の頃、發震の時より數へて六時間計の後であつた。あの高い野毛山貯水池の芝生の土手に立ち、仰いでは炎々たる黒煙の天に冲するを見、伏しては廣漠たる焼土を見るのみであつた。靜に我身を顧みて感慨無量で、漫ろに暗涙を禁じ得なかつた。

平常もと變らぬ太陽であるが、今日の夕陽は一入寂寥と哀愁との極みであつた。家を失ひ、職を失ひ、親を失ひ、子を失つた、哀れな避難民は、今後如何なる行動をなすのであらう。闇は遠慮なく彼等の窮狀をよそにして、徐々と襲つて來たけれども、火のため、四方は夜明けの様に明るく、煙のために一匹の蚊もゐなかつた。間もなく、雜木林を通じて、眞紅の光が上つた。市立十全病院が燃え始めたのだ。若し病院の燃えるに委せて、火が林に移つたら、それこそ大變である。巢を焼かれた鳥同然である。

人々は病院の塀を取はづして、火が林に移らぬ様に努めた。私もその一人に加つて、その邊一帯の塀を遠くの方へ持ち運んだ。

これを了へて歸つて來た時には、家族一同の姿は見えなかつた。隣人の話に依れば一同は小机へ行つたと云ふ事であつた。

此に於て私は一時全く孤獨になつた。

千秋の思で、一日の夜は明けた。焼けた自分の家へ行く人、食を求めに歩く人、假の住家を作るに忙しい人、離れた身内を探し歩く人などで、右往左往の賑かさを呈した。兎に角焼跡へ行かうと思つて、四六時中往復した急坂を下りて行く途中、無残にも十餘の死人の横たわつてゐるのを見た。これが私の死人を見た最初であつた。未だ煙の消

えない家の中には何の立札もなかつた。私は昨日の午後、彼の荷馬車屋で握飯をたべたきり、殆ど水ばかり飲んでゐたので、氣持が落ち付いてくるに従つて、空腹を感じてきた。そして南太田の家へ、足を引きづつて行つた。附近の廣場と云ふ廣場は、戸を救いた避難者が一ぱいゐた。幸に一同在宅だつたので、ゆつくり休息することが出来た。初秋の曉は晴れて、太陽が登つたのであるが、火煙の爲に薄暗く、私は突然目をさまして見ると、それが既に夕方で、私は眠り過したのかと間違へた。早速叔母の焼跡へ行つて見た。そこには人の來た氣配もなく、立札は無論なかつた。再び日出町へ行つて、皆のものが新沼村へ行つたといふ事が、立札に依つて判つた。櫻木驛の廣場には、生々しい死體が散亂してゐた。驛も無論焼けてゐた。辨天橋を渡つて、本町通りを歩いて、正金銀行の前まで來た時には、至る所に死體があつた。住吉町五丁目のあたりには、修善寺とか、伊東とか書いた、白い旗を立てて坊さんが、頻りと經文を稱へながら、死體の前に來ては跪いて讀經してゐた。彼等としてもこの場合、別に金錢を受けて頼まれたわけでもなからう。彼等の義務として、斯くの如く、非業の最後を遂げた人々に、死後の冥福を祈つて歩くのであらうと思つた時、何とはなしに感激の情にうたれて、涙ぐましいものがあつた。馬車道の神谷酒店は、丁度遭難の日同家の乞によつて、私が手傳に行つてゐ

た家です。そして伊勢佐木町へ行つて、あの地震に合つたのです。無論家は焼けてゐる事と思つて來た事故、焼土を見た時は、驚かなかつたが、立札がないので、又心配になり出した。此の立札がだんだんと、トタン家根のバラックが建てられる様になつてからは、餘り珍重されなくなつたが、一しきりは町を歩く人といふ人は、殆ど此立札の爲めに歩くのであつた。一枚の立札を豫期して、來て見ると何もない。昨日まで乗つてゐた自轉車が、骨だけになつて残つてゐた。渡邊銀行の大金庫は横倒しになつてゐる。前の電車道には、焼け残つた電車の骨の上に、人も共に黒くなつて死んでゐる。「ああこれは運轉手らしい。ハンドルの様なものがそばに轉がつてゐる」と人と人が話し合つて通り過ぎる。相かわらず死體は道を覆つてゐる。

伊勢佐木署の焼跡では、よごれた官服を着た巡查が、うどん粉の團子を作つて、通行人に接待してゐた。平常は人の顔を見れば、何か叱言を云ふのが、巡查の役目位に、反感を持つてゐた私も、今日ばかりはほんとうに有難いと思つた。私は最初の遭難の場所、伊勢佐木町を通つて行きたいと思つたが、未だ火が見えてゐて、通行することが出来なかつた。

此夜は自己の爲めに、決死的に團結した青年團に依つて、遺憾なく警戒せられた。頻

々と来る流言に、彼等の肉は躍り、血は熱せられたのであつた。此夜は山と川との合言葉を作り、紅布を腕に巻いて、同志と區別の目印とした。合言葉も、紅布も、だんだんと變化していつた。山と川とが暑いと寒いとになり、更に一と二とになった。赤色が桃色に變り、又黄色になり、遂に白色に變つた。是れより先き襲來の報に接すると、人々は商業學校の物置から銃劍を持ち出す者や、焼跡から鐵棒を拾つてくる者などがあつた。そうかと思ふと日本刀、仕込杖、匕首と、震災に加ふる火災の後は戦場の巷と化して仕舞つた。

明くれば九月三日、昨夜はあたりの夜警で、一睡もしなかつた。それでも眠い眼をこすり乍ら崩れた瓦を片付けたり、壁の落ちたのを修理したり、家の中を掃除したり手傳つてゐた。

叔母の生死に就ては、氏も等しく心配して、午後になつたら焼跡にいつて見よう。潰されて死んだものなら、焼跡をかき廻したら、死體があるだろうと言つてくれた。午後今にも降り出しさうな天候を氣にしながら、焼跡へ急いだ。お三の宮前へ來た時、少しく焦げた御眞影の奉安してあつたのを見た。私は昨日叔母の焼けた家の上に立つて、叔母は所詮助からなくて焼け死んだものとあきらめて、靜に靈魂の冥福を祈つたの

であつた。

二人が焼跡を掘り廻してゐると、今まで曇つてゐる空から、大粒の雨が降り出して、私はぬいであつた半天を着たけれども、見るまにぬれ透つて、シャツをビジビジになつた。

叔父は雨なれど恐れぬとばかり、死體發掘に餘念がなかつた。私が手を休めてゐると、一人の男がやはり鋤を手にして近寄つてきた。

知人であつた。知人と云ふのは、叔母の前の菓子屋さんだ。色々話をきいて見ると、叔母は知人の郷里、鍛冶ヶ谷に避難してゐるといふ事が判つた。私も叔父さんも安心して、ではすぐ行きませうと云つたら、道程もかなりあるし、流言による危険もあるから、明日にせよと云ふので、知人に道をきいて、明日行くことにした。

九月四日の朝は、薄暗い時から起きて、一町もある處から水汲みをやつた。六時頃、簡単な朝飯を済まして、鐵棒を持つて出發した。鍛冶ヶ谷は日野坂を下つてからは、すぐ判ると云つたのを頼りにして、道を急いだ。行く途中の蒔田町、大岡町、弘明寺町、到る處火煙で、死體も猶點々として見えた。此時には既に、開通線、電報取扱驛、諸所の被害、流言に關する告諭、今一つ戒嚴令の發布が、市役所の名を以て揭示してあつた。弘明寺の前を過ぎた先は、火災は殆ど無つた。道の龜裂が出來て、車馬の通れぬ所、畑が段を作つて

ある所はかなりあつた。黄金の陸稻、青い稻、それ等には何の被害も無かつた。名も知れぬ林を通り過ぎて、眼界が開けた。生胡瓜を手にした女中を連れて、おかほさんが来るのに會つて、初めて安堵の胸を撫で下す事が出来た。聞けば叔母さんは、六疊間に寝て居たまゝ下敷と爲り聲は出ぬ。おかほさんは近眼であつたので大に困つたが、聲を出したので、表の家主さんが出て呉れたので命を拾つたとの事であつた。

二 花咲町より伊勢山

横井茂三郎

私は震災當時には、花咲町五丁目六十七番地に居住して、家族は妻と子女五人との七人生活で、住吉町四丁目五十番地株式會社港榮舎と云ふ印刷所に店員として執務してゐました。

其日も例の通り會社へ出勤しました。此日會社では都合に依りまして、職工だけ全部休業させまして、店員だけが出勤して居ました。此休業が震災になつてみますと、一つの僥倖で、他の印刷所では震災の爲めに多くの職工が死傷しましたが、當會社だけは左様な慘事もなく、職工としても家に在つたので何かに頗る便宜であつたのです。

扱て我々店員三名と、小店員一名とで、中食をし様と卓に就いた時に、地震が突發しました。何に致せ會社は古い木造二階建物で、且つ二階は全部植字場、文撰場になつて、活字が充滿に置いてあるので、普通の地震の時にも危険な位です故に、常に地震の時は避難する様に心がけて居つたので、此時も直ちに住吉町通りの電車軌道上へと、よろめき乍ら、他の店員と共に駆出しましたが、到底佇立して居る事が出来ませんでしたので、踞んで見て居ますと、兩側の家屋や架空線が、恰度激浪に翻弄される小船の様に、上下左右に盛に搖られてゐました。恐怖の念に襲はれてゐます私は、見て居たことが何分であつたか、何秒であつたか、何度搖られたか記憶しませんが、可なり永い間の様に思はれました。其うちに角住吉町四丁目の八木と云ふ酒屋の煉瓦造の防火壁が、八木酒店と港榮舎との間の花屋の屋根へと、破碎して崩れかかると同時に、港榮舎は勿論、兩側の家屋は一齊に倒潰してしまいました。漸時塵埃のために四邊は暗黒になつて、一寸も見えませんでした。したが、懸て目も見える様になりましたので、各自宅の様子を見て、更に此處に集合仕様と申合せて、隨意解散致しました。此時兩側の倒れた家屋では、相當壓死者を出しました。不幸全滅の危に遇ふた家も、二三ありました事を、後で聞きました。

自分は同所から馬車道へ曲らうとすると、住吉町五丁目の角なる田中屋と云ふ蕎麥

屋の炊事場邊から、火炎が吹き出してゐましたので、これを消さうとして、隣接してゐる
 巡査派出所の巡査に、消火器の有無を尋ねますと、消火器は物の下になつて潰れて居る
 と云ふので、残念には思ひましたが、其儘にして馬車道を大江橋へと、電車軌道に沿ふて
 走りました。今記憶に残つてゐるのは、文壽堂、正直屋及び指路教會とが倒潰して居た
 のと、大江橋の電車軌道が極度に外方へ彎曲して、敷石が二三枚飛び出してゐましたこ
 とだけです。

大江橋を渡ると、櫻木町驛前の廣場には、既に澤山の人が集合して居まして、野毛町一
 丁目方面から出火して、立昇る黒煙が、此の方面へと吹いて來てゐました。後で稻垣藥店
 邊からの出火と聞きました。錦橋を経て花咲町川岸を來ますと、緑橋際の正田薪炭店
 の邊からも、出火してゐました。家へ歸へりますと幸にも自宅は只屋根の瓦が落ちた
 のみでしたが、兎に角一時野毛山へでも避難し様と考へまして、子供の衣類二三點と位
 牌とを持ちまして、子神社前に避難してゐました家族を連れて、野毛三丁目を經て、崩れ
 てゐます平沼銀行の建物を越えて、野毛通りへと出ました。此時野毛三丁目百二十八
 番地附近、栗原藥店裏通邊からも火を發してゐました。野毛の通りは餘り人が往來し
 て居ませんので、意外の感にうたれましたが、大聖院境内には可なりの方が避難してゐ

ました。尙進んで野毛山へ登らうとしますと、招魂社裏手の山が街路へと崩れ落ちて
 ゐますので、子供を押上げて、辛うじて伊勢山へと登り、太神宮境内へと避難しました。
 私共が其處へ行きました頃(一時頃)は、人も少數でしたが、追々と野毛、花咲、櫻木宮崎及び
 戸部の各方面から多數避難して來ました。兎に角するうちに、戸部方面からの火が伊
 勢山を襲ふ様な形勢なので、境内に避難してゐます男子達が集合しまして、死力を盡く
 して半潰の神樂殿を倒しました。これは絶間なく來る地震に、倒潰の虞れがあるのと、
 若し火に襲はれると、大事を起す危険があつたからです。此時には期せずして避難者
 は一齊に萬歳を叫びました。遂に猛火は太神宮社務所を襲ひまして、さしも森殿を極
 めました太神宮本社へも移りましたので、少しでも火勢を弱めんとして、半ば倒れてゐ
 る拜殿を燃えてゐる本社の方へと、多勢で押倒して了ひました。群集は太神宮境内に
 も居られませんでしたので、招魂社境内へと這入りますと、夕刻になつて不動堂鐘突堂等一帯
 を焼いた火は、紅葉坂を甜めた火と合して、下方から招魂社方面へと物凄い勢で迫進し
 て來まして、伊勢山の避難者は四面猛火に全く包圍せられて了ひました。

何物をも焼き盡さざれば止まぬ勢の魔の火は、遂に招魂社入口の茶見世に移り、附近
 の櫻樹にも移り、原田久吉氏別邸をも一呑にし様としました。消し度くも水はありま

せんで、此處に居る數百の人達は、呪の炎のなす儘にまかす外は、手段がありません故に、悲鳴をあげて廣くもない境内中を、生延びんとする人間の本能で、一ヶ所を互に押合ひ揉合ひつつ、子は親を親は子を呼び乍ら、念佛を唱へ、題目を叫び、火の粉を浴びつつ、狂氣の如くになつた人波が渦巻いてゐる有様は、此世ながらの焦熱地獄かと私は思ひました。

此時に此處に避難してゐました人の中から、數十名の無名の勇士が現はれまして、粉骨細身、努力の限りを盡しまして、土瓦等のみで、先づ茶見世の火を叩き消し、次いで、原田氏の門に移つた火を消し、櫻樹についたのを揉消して了ひ、ホッと一安心しました。

此の若し原田氏の邸宅が灰燼に歸したとしますれば、數百の人達は必ず累々たる死體と化したであらうと思ひますと、今まで肌に粟を生ずる感があります。

包圍した火炎は未だ鎮まらないので、不安ではありましたが、幸に家族一同生を得て震災第一夜を伊勢山招魂境内に過しました。次に今から考へますと、頗る滑稽に思ひますことを一二申上ませう。

地震で焼滅になつたのは、只自分の居る處、自分の目に見へる處、稍、大きくして横濱市のみをと思つて居ましたのです。ですから明日になれば、在京方面から救護に來て貰

へると考てゐましたが、其夜半に在京方面から來たと云ふ人に遇ひまして、東京も同様だと聞いて、成程と思ひました。

二日の夜に、本牧沖方面で、軍艦がサーチライで盛に發火信號をして、時々其光が伊勢山にも達しました。すると一人の男が、國旗を竿につけて、光の方面に向つて、汗を流して左右に振つてゐますので、何のためですかと尋ねますと、軍艦に此處にも生存者が居ると云ふことを知らせるのだと、眞面目に答へてゐました。

私は近所の方三軒の家族や、其方の家へ客に來られてゐる人達約十名と私共の家族とを合して十七名を、一ヶ所に收容しまして、招魂社境内へ堀立小屋を造つてゐましたが、男は私の外二名きりでしたので、其人達の食料のために、二日以後は奔走してゐまして、日や時の觀念を失ふてゐましたが、櫻木町市役所假廳舎の前を通りますと、本日は九月四日と云ふ貼札を見まして、始めて日の觀念ができました。

以上は私一人の狭い遭難談ですが、主とする處は伊勢山が、東京に於ける被服廠と同様の運命に陥入らんとするを防止しましたところの、無名の勇士諸君の貴き行動を書きましたので幸に一片の資料とならば幸甚の至りです。

三 鮮人を保護して竹槍の中を

齋藤新次

朝來の雨も名残りなく晴れて、紺碧の空高く、貧乏人の私達にも、思ひ切つて大きな呼吸の出來さうな九月一日、あんな大きな洗禮を受け様などとは、全く誰れが思つて居ましたらう。

「革命」つて言葉をよく見聞きしましたが、それを思ひ浮べつつ、慘禍の巷を走り廻つた自分の姿を、今でもはつきり書く事が出来るのです。當時山の内町の埋立地と、淺野船渠との中間に造函船渠を建造すべく、百餘名の鮮人人夫と共に、その掘鑿に餘念なかつた私は、締切結壞に依る奔流と、地面の龜裂とに極度の脅威を感じつつ、兎に角夫々避難を完うしました。

もう一人はつちです。

事務室の重要書類と、私の全財産と云つても行李一つですが、とを背負つた私は、線路傳ひに高島驛へと向ひました。

火の海、イヤイヤそんな沈腐な言葉で、何であれを形容出來ませう。私達には到底盡し得ぬ凄絶光景です。

何處をどう走つたか、全く私達は夢中でした。神奈川のとある寺院の境内に迷ひ込んだ私は、住職のお情けの握り飯に、生れて初ての野宿にも、既に空虚の心裏には、何の涙もありませんでした。

その次の日の出來事でした。

何せあの大量の朝鮮人騒ぎ、そんな馬鹿なとは思ひ乍らも、矢張り渺からず恐怖に襲はれて居りました。

放火、強盜、毒藥、追ふ人、追はれる人、正に劒戟の巷です。ふと自分達の使つて居た忠實な鮮人達に思ひ及んだ私は、或る不吉な豫想に、思はずとしてしまひました。

「何」つていふ目的ではなかつた様です。慌しく行き交ふ人々の間を、山の内町へと出かけた私は、豫め豫期した恐ろしい幾多の事件に打つ突かりました。

恐る可き人間の殘忍性、それは遂に尼港の露助も此處のこのジャップも共通でした。とその時です。「Sさん」つて云ふ痾高い聲、それは李根榮君ではありませんか。その癖私は不意に敵にでも襲れた様な、どきつとしてしまつたのです。

「一生貴君に奉公します。どうぞ助けて。」かれは手を合せて居りました。全く夢です。

二人は草叢から倉庫の影へと、そして埋立を事務所へと一氣に飛んで行きました。勿論既に荒された事務所はカラッポです。それでも昨日の晝迄私の住家であつた宿直室の押入れに、古いセルの着物のある事を忘れては居ませんでした。伴天の李根榮を着物の李根榮に、そして私達は敵の間を縫はねばならないのです。

私はもう鮮人でした。死生の岐路にいつた總ての恐怖に、激しい胸の鼓動を感じ乍ら、でも出来る丈落付いて、さて高島町へと向ひました。(高島町には内務省横濱土木出張所がある)幸に日本語に巧な李でも、どこなく締りのない顔は、亦止むを得ないのです。第一の歩哨線といふのも變ですが、先づ無事に通過しました。私達は常に日本語で話し乍ら歩きました。

第二の歩哨線も、難なく通過して約五分間、待てッ」と云ふ鋭い聲、私達は息付く暇も與へられずに、すぐんで失ひました。

傳家の物らしい細身の業物、トゲトゲしい青竹槍、さては銃劔六七人も居りましたらうか。李の顔にはもう血の氣はありませんでした。恐らく私だつてもさうでしたらう。

激しい訊問と前後して、私も李も目もくらむ程撲られました。李の間のろい顔、それ

から桁丈の合はぬ着物問答は少しも記憶はありません。只李が役所の小使である事を極力力説した筈です。その間時折殺してしまへ」と云ふ悪魔の叫びです。

竹槍拔身、それよりもどれだけ此聲を恐れたでせう。

小一時間の後役所の門に馴染の工夫人夫に迎へられて、御無事にしたかといはれた時、違つた意味の嬉しさから、急に暗い氣持になつて、臉の裏が泌々熱く、遂にポロポロ泣いてしまひました。李も矢張り泣いてる様です。

その後一度も上陸せずに暮して居たのですが、間もなく迎へに來た叔父と、一と先づ朝鮮に歸りました。

十八の若者でしたから、今年はもう二十歳。

年賀狀と時候見舞は、今でも呉れます。その度毎に、恐ろしかつたあの日を思ひ出してしまふのですが、微笑む氣にはどうしてもなれず、結局泣いてしまふのです。

李は今頃何うして暮して居ますやら。(大正十四年三月三十一日)

一四 御所山より稻荷臺へ 中村常一郎

私は大震災當日の警察官の働きに就て、深く感謝を致して居る一人であります。簡

單に私の遭遇いたしました事實を申述べます。

私の宅は西戸部御所山で、小學校の裏手にありました。私は關内本町の事務所が倒潰して、同僚數名が壓死したに拘らず、幸に右腕に負傷したのみで、脱出いたしましたので、急いで自宅へ駆け戻りました。

宅には家内と小供五人の外に、老人夫婦が居ります。家屋は倒潰いたしませんので、一同無事でありましたが、私の歸りの遅いため、近所の人は大概何れへか逃げまして、私共一家族が最後に残された形となりました。

風上の池の坂方面には、火の手が上りまして、黒煙濛々と吹き付けます。私共はもう其方面には逃げられませんでした。逆に風下の御所山の高臺の方へまいりました。此邊は樹木も多く家屋も餘り立込んで居りませんので、大概の火車ならば大丈夫と思ひまして、一同腰を下ろして休息して居りました。すると白服の警官がまいりまして、此邊も安全でないから、一刻も早く風上の方へ避難されたいとの注意を與へて、足早に他の方面へ去りました。中にはナニ大丈夫と云つて、一向其注意に耳を藉さない人もありました。私は老人小供を同伴して居りますので、早速一同を促して、宮の前の縣廳官舎の方へまいりました。(翌日御所山を通りまして、數十の死體を発見いたしました時に

は、前日の事を追懷して、深く警官の注意を感謝いたしました。)

縣廳官舎の横には、大勢の人が私共と同様に、避難して居りました。後より考へると誠に先きの見へない話であります。當時の混亂に取紛れて、大局の形勢が分りませんから、此處なら大丈夫だろうなどと、皆々話し合つて居りました。此處では約二時間近くも、存氣に落着いて居りましたが、今度は黒服の警部らしき方がまいりまして、火勢が強くなりましたから、早く中學校方面へ逃げないと通路が塞りますと警告して呉れました。一同大いに驚きましてすぐに宮の前に出て、願成寺方面に向ひました。

此道路は僅か二間幅位の狭さで平時でさへも雜踏する所であります。此時西戸部方面より中學方面へ向ふ唯一の通路となつて、大群集が一時に殺到いたしますので、其混雜は非常なものです。其上諸處に家屋の倒潰、電線の散亂等がありますから、人波が渦を卷いて居ります。幸に此方より往く人丈で、向より來る人がないので、注意して歩調を整へて居りますれば、自然に到進いたしますが、一步を誤ると押し倒される危険があります。私は此行進中、老人を見失ひましたが、所謂親知らず子知らずの難場で、如何とも手の下し様なく、其儘流れに従ふて、到進する外はありませんでした。處がこの道路の要所々々に、白服、黒服の警官がたつて居り、手を振り聲を枯らして、整理して居られ

ます。其爲めさしもの大群集も、歩調が整ひ、幾萬の人が差したる怪我もなく、無事に避難する事を得たのであります。私は途中警官の整理を注目いたしました。其沈着にして緊張したる態度は、誠に感嘆に値するものであります。

私共は稻荷臺小學校の校庭に逃込み、一夜を明したが、其上の方の墓地には、戸部警察署の臨時救護所がありまして、私も夜中其所へまいり、右腕の傷の手當をして頂きました。

此夜は月明皎々として、地上の劫火と相對し、凄愴を極めた光景でありましたが、上の臺から時々警官の聲がきこえまして、火災の模様、飲用水の所在、迷ひ子の知らせなどを受けまして、非常に力強い思を致しました。

震災當時の警官は、實に混亂したる群集の唯一の指導者でありました。若し當日警官の配慮がなかつたならば、横濱市の慘狀は、更に幾倍を加へたかも知りません。私は斷片ながら、私の遭遇しました事實を申述べて、改めて警官に感謝の意を表します。

一五 山吹町で妻子の慘死を目撃しつつ

渡邊 丈太郎

私は机に倚り書きものをして居ますと、急に下からツシンツシンと三度突き上げられ、ハツと思ふ遙もなく家屋は潰れて、土臺と軒端と貝殻合せに眞暗になりました。而して私初め社員七名は各自の大デスクの下に潜り込んで居ました。其中に私の眼の前が明るくなりましたから、出よ出よと叱呼しました。もとより小さな穴でしたから、這ひ出せば出られるから、出よ出よと叱呼しました。一人の女事務員は、日本式の帶で結び目が高きため、出られなかつたのを、私は外から手を入れ押さへ、且つ引張り出したのです。一同の無事なるを點檢して、自由解散を命じ、倅は長島町の店へ、私は山吹町の住宅へ参りました。所が家族の姿が見えませぬから、之はと思つて、植木棚の方の屋根と、天井とを夢中で破り、懸命の聲で「居るか」と申しますと、妻は「居ます」と、又九歳の孫は「お爺さん此方」と答へました。聲を辿りて、再び破りますと、孫の手が見えました。其時の嬉しさつたらありませんでした。直に手を引張りますと「痛い」と申しますから、之はいけないと隣の人を呼びましたが、二人の力では出せませぬ。又々大聲で救を求めますと、裏の方と又樂館の一人と、外に二人の見知らぬ人が來て呉れました。五人の男が力を合せ、四寸角を押し上げ様としたが、充分に漆喰を仕た計りで、一枚も瓦の落ちぬ屋根の上へ、隣の警署學校が倒れて居ますから、少しも上

りませぬ。其時富士見町の豆腐屋の火焔は、烈風に送られて、刻々に近いて來ますから、五人の人達は身の上の危険と、救助の見込なきを知りて去りました。力と頼みし人々は去り、救出の望は絶えた。噫悲愴、噫悲哀、相俱に死せんか、白骨を拾ふ可きか、いづれが人の道かに思ひ悩みましたが、愈、足に火が付かんとするとき、心を決して孫の手を堅く握りしめ、致方がないから諦らめて呉れと、申しますと妻は下から「破つて貰へませぬか」と申すのを、夫れも出來ないはネー」と言ひ残して立ち去り、向ふの門へ身を投じて、合掌念佛彼等の如何に苦しきか、如何に熱きか、我を薄情者と怨み居るか、又我残らば追善供養も家の再興も心安しと思ひ居るか、胸には釘、腸は八轉九廻して、昏倒せんとすると屢次でした。斯くて數時間午後五時頃かと思ふ時、我が最愛の妻と、至愛可憐の九歳及五歳の男孫と、數十年來積累ねたる四十戸の家作と、住宅家財は盡く烏有に歸した。其間山吹町川岸に軒を連ねた材木商店の木材の燃ゆる時の如き、火熱一段強烈を極め、それを通過する突風疾風は、容赦なく私共川中に避難する者の顔面に吹付け、毛髪を焦し、火服れ焼爛れを生じつつ、互に頭上より泥水を溜ぎ漸く熱氣を凌ぎしも、千秋橋にも、命と頼みし小舟にも、火は移り來て、熱度は一層高まり、生き乍ら焦熱地獄の極苦を嘗め盡しました。同所に避難者中數名の卒倒悶死者が有つたのでも、想像が出來ませう。

其夜は家族憐れさ戀しさに、去りかねて川中で追福の心持に徹夜しました。凡そ今回の罹災者中、私の様に最愛の妻、至憐の孫と生別し、又夫れ等の焼死と、住宅家財の焼盡するのを、十數間の距離で凝視する悲惨な苦痛に逢ふた人は、殆どなからうと思ひます。又八時九時頃には、幾十箇所、幾百回と起る旋風は、數十百枚の亜鉛板、瓦礫煉瓦等を十數丈の空中へ、物凄き響を立てつつ捲き上げては、四方へ飛散する恐しさ、實に世界の滅期かと思はれました。翌二日朝に至り、倅や嫁や年少の孫達に逢はんものと、長島町に行きしに見えず、稻荷山に聲を限りと呼びたてしもあらず。悄然山吹町へ歸り、妻や孫の骨を保護する心地にて、焼跡の殘火を踏みつつ、彷徨する時、倅のたきれるを見て、嫁や幼孫の安否を問へば、未だ見當らずとの答に驚き、且つ悲み極力搜索すること、其日も翌日も、寢食も疲勞も打ち忘れてでした。四日午後に至り、倅が長島の町焼跡より三人の白骨を拾ひ來りたりと告ぐるに、遇ひ、一縷の望みも絶え果て、運命の深刻なるに、呆然自失しました。

そこで會社の後事は、他の重役に依託し、六人の骨を一個の瓶に盛り、京都本願寺へ來り、各、法名を頂き、讀經を乞ひ、故國尾張國へ歸り、五七忌の追善を營み、善光寺に參拜して、白骨と俱に再び横濱に歸りました。

一六 税關から西戸部官舎へ 淺岡 文夫

税關の食堂に上らうとすると、突然室全體に渡つて一大音響がした。室内の物が倒れた音だ。惡戯かなと思ふ次の瞬間、三層煉瓦造の建物は、木葉の様に搖られた。「地震だ、而かもなかなか並の地震でないと直感したので、二階の階段まで下りた。三階の食堂で、火を消せ、火を消せ」と誰か叫んで居る。二階の階段を下り様としたが、足が跳返つて、板の上に落付ける事が出来ない。足許りでない體までが宙に跳飛されさうなので、階段の手摺に兩腕を絡付けた。手摺は大きく烈しく振動して、兩腕が挽ぎ取られさうだ。高い建物はかなりの傾斜をして動いて居る。あの眞白に塗つた壁が、今にも大きな口を開いて、ばつたりと落ちて來そうだ。ひと搖り毎に刻々自分の命は縮められる氣がする。「此度こそ崩れるだらう」と、動搖が再び大きくなる度に思つて、階段の下に飛下りる身構をした。震動の間、建物から起る底氣味の悪い音と、天地間全體から起る恐ろしい鳴動の外に、人聲は斷へて聞えない。人間の權威は地の底に落ち、自然は威壓し、嘲弄し、憤怒した。「皆な表の階段から安全な處に遁れたらう。自分は因果とこんな處に迷付いて、嗚呼今日が俺の終りなのか？それにしても餘り突然だつた。何等の前

兆もないと云ふ事が、誰の終りか、當然な事だらうか。俺の一生か、世の終りか、死ぬ可き運命なら止むを得ないが、見離されない限り、輕卒な事で死にたくない。神だ、總ては神の意志だ。

自分の胸の中は、熱湯の様に沸騰した。腕の下、手の掌から、脂汗が滲み出た。顔は地獄の苛責に苦しむ亡者の様で有つたに違ひない。神に念じ、佛に祈つた間に、あの動搖が次第に靜まつた。自分は惡戯から醒めた様に、ハット胸を撫で下した。動搖は一分か二分の間であつたらうが、非常に長く感ぜられた。あれ、丈の恐怖の中に、三十分け續て置かれたら、大概の人間は氣絶するだらう。

自分は生命の不安から遁れた喜悅と、恵まれたる生命に對する感謝で、一杯になり、階段を駆け下りた。既に集つて居た阜頭場の人足、車夫、事務員等は、一樣に不安の中にも、安全を喜び合つて居た。が誰もそわそわして居て、話に絲口がない。「餘震で又地が割れるかも知らんぞ」と叫ぶのが耳に入ると、皆急いで積んだ輸入材の上に登つた。

「津浪が來るぞ」と誰かまた叫んだ。海濱に居る自分達は、最も危険だ。不安のどんぞこに途迷つて居る時、税關の本館が潰れて、大部潰されて居るから、助け出せ」と云つて來た。

集つて居た人達は、思ひ思ひの方向に走つて行つた。鐵骨コンクリートの倉庫は將
 棊倒した。地面から噴出した水が溜つて居る。うかうかして居る間に、税關構内から
 發火した。

煙は諸々に上つた。郵船會社裁判所は見る影もなく潰れて居る。橋臺の兩側は、ど
 の橋も落込んで居る。風が吹いて未だ屋根板が飛ぶ、煙が飛ぶ。切斷した電線が、ガラ
 ガラと鳴る。地獄の業風だ。驚いた荷馬車が、一目散に走つた。海岸通りを血泥みに
 なつた西洋人が、大勢逃げて來た。風は海の方へと激しく吹き荒んで居る。柳の枝は
 鬼女の髪のように狂ひ廻る、かうしては居られない。逃道を見出さなければならぬと、
 右往、左往、と迷ふ人達の中を割つて、本町通に出ると、既に倒れた家が焔々と火を吐い
 てゐる。伊勢佐木町の方に出ようとすると、向ふから群衆が逃げて來る。既に火が廻
 つて居るのだ。一應税關構内に引返そうかと思つたが、風下であるのを見てから、決死
 の勇を振つて、櫻木驛前の廣場に出た。

美しい横濱は、到處破壊されて居る。美しく立並んで居た建物は、無慘にも路上に
 倒れて居る。櫻木驛頭に泣く多數の内外人、時折襲ふ餘震、立往生の電車、綠橋附近の猛
 火、安全地や家路に急ぐ老弱男女の人波、嗚呼其人達の或者は、其時既に最愛の者を失つ

て居たのだ。また其人達の幾人かは、其の日の中に同じく死出の山路を歩んだのだ。

漸くの事で掃部山の上に出た。戸部の住居の附近は焼拂はれて居るが、一段高い自
 分の住家は、まだ安全らしい。

伊勢町の潰れた家、崩れた石垣を踏み越え、跳び越えして、住家にやつとのこと着い
 た。

先づよかつたと思ふ間もあらばこそ、煙は忽ち火を伴つて、刻々近づいて來た。四疊
 半一面に散亂した書籍の、せめて一部でも、ポケットに入れて逃げ様かと思へば、只一部選
 び出すと云ふ事が、餘り悲しかつたので、到頭一部も持たないで、逃げ出した。自分の過
 去を物語る日誌を持出さなかつた事は、今となつて残念でならない。

自分は附近の人達と一諸に戸部小學校の校庭に通れ、其後只一人になつて、杉山神社
 境内から久保山裏の高臺に出た。

高臺の畑の中には、追々人が集つて來た。

御眞影を持つた先生、昨日遠い田舎から出て來たばかりだと云ふ下女、腕を折つた男、
 死んだと思はれる兒を抱へた母親、誰れも彼れも泥だらけだ。

高臺から全横濱を俯瞰すると、空一面に黒煙が闇夜の様に立上つて居る。紅焔が其

間を縫ふて舞狂ふ。烈風に卷上る砂塵爆發の轟音凄慘なる空、天地間は鳴動し叫喚し、一切は熱風熱火に包まれた。人間は緊張、恐怖、愛著の攻苦に臨んだ。修羅の巷もこれ以上のものではあるまいと思ふた。

日數が経て、鎮靜になるに連れて、役所の人達は、焼残つた税關長官舎に集つて、姓名録に罹災後の住所を記入した。各地に避難したものも歸つて來た。が歸らぬ三十幾名は、死者として一同の涙を絞つた。

一七 航路標識管理所を中心とする遭難記

(一) 九月一日二日の我

看守 小山 貞 治

自然の與へた大きなショックの前に、吾人の小は如何ともする事が出来なかつた。九月一日午前十一時五十八分激震と直感し、試験掛を廊下傳ひによりめきながら、迂曲屋外に逃れ、庭樹の一枝にすがるや否や、雖然たる大鳴響を聞き、瓦礫土砂を頭上に浴び、失神の状態に置かれた。須臾くして自分を見出し、眼を開けば、四圍濛々として尺寸を辨せず、稍沈靜するを待つて顧みれば、作業課はメチャメチャに倒壊されて居るのを見た。直面すれば本廳舎二階總務課及び調度倉庫の潰滅せるには、更に膽を寒からしめた。

無意識に尋餘の木片を携へ、砂塵をついて、まっしぐらに正門に至れば、妻は已に河邊に避難し、聲の限り予を呼んだ。事なきを知つて私は、之に注意を與へ、突嗟の間違駄天走りに、所長官舎に向つた。途すがら各官舎を見舞ふたが、女子供の母よ、弟よ、妹よと泣き叫ぶに、一片の慰めを與へて後、庭に飛び込めば、所長奥様には乳兒を抱へ、二三のお兒さんを引き具し無事なるを得たが、所長の身の上如何にとの御言葉に、直ぐ取つて返し、倒壊物を踏み躓え、本廳舎に到れば、救へ「助け」の叫喚は四方に起り、凄慘の氣自ら漲つてゐた。小使の、小林は、梯子を取つて跳び乗り、屋上に匍ひ上がると、足下に當りて、切りに救を呼ぶを聞いた。折柄他數氏が來り會したので、遮二無二瓦を剥ぎ、土塊を除き、屋根板を破り、呼應すると、中から看守稻林、書記中林、醫員堀の三氏が土砂に泥れて匍ひ出で、辛うじて危難を逃れた。そこで所長課長の安否を問ふたところ、更に不明との事であつたので、各自はソレッと裂罅より潰れ家に這ひ入り、聲を限りに呼べど叫べど、絶えて應へは無かつた。さるにても今は何處に御座るか。所在を知るには餘りに潰滅の荒蕪なるに、もう駄目か。悲惨や、下すに手段なく、盡きぬ恨を呑むのみであつた。

是より先き、試験掛は藥品より火を發するを私は見て、必ずや未だ所員の埋没するものあらんと、其焼死を慮り、消防に努力する者の援護を呼ぶを聞き、加勢に走つた。已に

水道鐵管は破壊され、唧筒も其の用をなさず、僅にバケツに水を汲み消火に盡した。此時早く、彼時遅く、市中各所よりは出火と思しく、黒煙濛々として、紅蓮の焰は天に冲する。と見る間に、最も近接せる本町小學校の火の手は、速くも炎々として、猛烈なる火勢は風を起し、烟燄は本所の全部を掩ひ來り、刻々に迫る呼吸の泌塞に、加ふるに、熱火は最早須臾も猶豫すべきにあらざるを直感し、泳ぐが如く匍ふが如く、辛ふじて轉々正門に出た。ところが河邊に繋留せる一艘の小舟より、「燒死」「危険」の警告、早く早くの聲を耳にしなから跳び乗るに、茲も同じく熱氣が襲ひ來りて、焦熱の苦が刻々に迫つた。餘儀なくんば河中に投ずるの覺悟で水棹を振つて岸を離れんとしたが、憎くも干潮時とて、船は座して動かばこそ。時に餘震の大きな奴が、一搖り揺ると見る間に、正面に屹立する貿易新聞社の鐵筋ブロック四階建が、轟然たる大音響と共に、骨灰微塵に倒壊した。アレヨアレヨと氣を焦ちて、右往左往する中に、惡まれたり、電柱のステイの太き一條が、彼岸に達して垂下せるを發見した。數人して是れにすがり引く程に、嬉しや船は河床を迂り、向ふ岸に着くを得た。匍ふ様にして、東横濱驛構内へ上陸はしたものの、餘震は尚頻々として來り、戦々競々たる身であるさへあるに、其上風上から煽り來る黒烟の禍卷は、天地も爲めに晦暝し、焦爐は絶へず飛散して衣をこがし、膚髪を燒き、此處に逃げれば、其處の

荷車より火を發し、彼處に避くれば、又此處の燃え得べき物は燃え上り、他に施すべき手段の盡き果てた有様であつた。斯くの如くして物凄き一夜を明かさ無ければならなかつた。其中にも倒潰家屋の下敷から救はれて來た服部總務課長が、病後なる上に全身に打撲擦過傷を負ひ、鐵路に枕して呻吟されて居たのが見えた。又澤田業務掛長は顔面に裂傷を蒙つた爲め、著しき腫脹を來し、出血淋漓として、白衣爲めに鮮紅を呈し、寧ろ恐怖すべき容體にて横臥された。私は其萬一を氣遣つて、水を需めんと力めたが、僅に手拭に濕りを含ますを得たのみであつた。藤林書記は膝關節打撲の爲め、歩行の自由を失つてゐたが、醫療の途一切絶へた際とて、如何とも爲しがたかつた。時に天を仰げば、猛火漲る中空に、逆卷く旋風は、轟々の鳴動爆音は耳を聾して物凄まじく、如何になり行くことか、唯夫れ、天の命を待つばかりであつた。此世からなる地獄の苦境を味ひ、呪ふべき夜の何時更けて行きしも知らず、曉告ぐる鶏の聲さへ聞かなくて、再び昏暝の次の日が來た。ああ生是か、死非か、一度は死線を踰へて、生の全きを得たけれど、更に又襲ひ來る飢餓の苦みに臨んだ。生きんが爲めの糧は需むるに術なく、唯徒に救はれん事を祈るばかりであつた。折柄港内碇泊の懼州丸に避難してゐた小蒸汽船光丸が、救護に來るとの報があつたので、茲に始めて皆愁眉を開くを得た。乃ち之に負傷者及老

幼婦女の收容を託し、一縷の安心を得たので、金子君を從憑して、本所焼跡に行つた。此時已に、石川課長は村崎技手を從へて、現場を踏査され、所長閣下の御遺骨を場所から推考量して、それと思しきものに覆を施し置いたとの事であつたので、直に走せ行き見たところ、所長室北側バルコニーの直下、西に枕して白骨の横はる變りはてた御姿を拜するにつけても、涙を吞んで合掌した。噫、昨日迄は健在して、斯界の進展には寢食を忘れ、部下を愛撫するに至らざるなき圓滿な良所長、今魂は黄壤に去つて、永へに歸らぬ。痛恨是れより甚しきものはない。何が故に天は此善良の君子に命を藉すを吝みしか。思へば神佛の加護てふ事は在世には無いものか。低徊數刻にして更に他の捜査に歩を進むれば、知友川島書記、宗像看守、外傭人二名の死體を發見した。最早出づべき涙も涸れて、大息するばかりであつた。聽て各に印を附して、心の中に其が冥福を祈つた。時に雲は低迷し、餘燼の黄烟縷々として彼等が死を悼む様であつた。盡きぬ恨を残して、私は退去した。それから空腹を抱えて、更に櫻木驛頭に来て、高架軌道を見ると之は陷沒轉覆、又電線は垂下して、蜘蛛の如く、電車は蜿蜒連續のまま焼かれて、只殘骸を止むるのみであつた。轉視一眸すれば、全市は化して焦土の荒野を現出し、餘燼尙熄まず、彼力此方に煙烟の横溢するのが見えた。而して慘酷なる黒焦げの焼死體が、家畜と混じ

て點々散在する邊り、鬼氣自ら迫り、異臭鼻をつき、其現場は全く此世とは想はれず、殊に正金銀行外廓の如きに至つては、百を數ふ半焦死體が累々と折り重り合ふ態に、私は思はずゾツとした。其他焼跡の至る所に、色青ざめ眼窩み憔悴した罹災民が、塵埃に塗れて、跣足の儘右往左往にさまよひ歩き、親は子を呼び、子は親に別れて、流浪離苦の限りを盡すを見ては、人世の果敢なき運命を、誰か泣かずに居られようか。呆然自失せんとする我身を勵まし、夜來危険を犯して歸宅せられた所員及家族の安否が、懸念に堪へなかつたので、出來得る限り方々を見舞ひ、或は其無事を喜び、或は其不幸を慰め、薄暮悄然と罹州丸に收容された。茲も數百の避難者で充滿し、其混雜裡に悲喜の哀話に高調して居つた。而し食餌の缺乏の爲め、皆生色は無かつたけれど、聽て南京米の粥一碗を給せられて、漸く餓を凌ぎ、辛うじて新天地を見出し得た心地がした。

(二) 自己を中心としての這次の變災

主事 久保寺 丘吉

今日は九月一日(土曜日)だ。夜來の風雨は蔭鬱な荒れ模様を雲間に包藏して居たが、誰一人地震や火事などを想像して居たものはなかつたらう。可成早く用を形付けて、今後はどう仕様などと、計畫などもあつたらしい。

自己を中心としての這次の變(災)久保寺丘吉

例もならば掛長以下は、同一食堂に卓を聯ね、臂を並べて、パンや蕎麥や辨當の陳列に一時以上も陽氣な談話が續くのであるが、今日は土曜日とて、其事もないのが例であるので、僕は例の通り、自分の机上に紅茶やジャムを並べて、今しも一口……といふ處で、デリデリデリン……と總務課長からの呼鈴が鳴つたのだ。課長室へ出懸けて行くと、兼て問題になつて居た湯島村が燈臺附近へ屍體焼場を移す……事に就て、何とか善後策をせんとするのであつた。他にも例がある。一先づ村長へ照會し、時宜によりては知事へも……など、協議を重ねつつある一刹那……眞に一刹那である。俄然として起つた激震……腰掛けて居た課長は、倒れさう……。立つて居た僕は、丁度知章が酒に酔ふて馬に乗つた様な有様で、五尺大のこの小軀は前後左右にゆすぶれてゐたのだ。

僕は――否――誰れでも――課長と對談の場合に、いつでも課長の右側、又は前面に在るのを例としたのであるが、此日に限つて、僕は前面を通り越して、課長の左北椽側、硝子扉の八文字に開かれた中央に立つて、談話を交へて居たのである。この行爲――いつもと異つた行爲――は、自分が心あつてしたのは勿論ない。偶然か若くは不意であらねばならぬ。併しこの位置はやがて本所震倒の前、間一髪僕をして一步を――ホーンに只一步、否

寧ろ半歩を……移さしむべき前提となつたのである。但しそれが僕に對して利益であつたか將た、不利益であつたかは、僕の今以て知るを得ざるところである。何となれば、僕は死亡はしなかつた。併し無事ではなかつた。尖頭の打撲傷、右胸部、右大腿部の打撲傷を始めとして、右下顎にも頸顚部にも瘤が出来、鎖骨部兩腕及兩膝蓋にも擦過傷出血を來したからだ。醫師はこれに全身傷の名を與へた。そして全治迄に三週間を要したのであつた。死者は勿論不幸である。不傷者は幸である。負傷者は……地震、雷、火事、親爺……と言はれて居る様に、世の中で一番怖いのは地震である。地震や火事に就て、茲に一二の挿話がある。

僕は田舎に育つた。僕の近在は殆んど草葺の農家で、其時分瓦屋根などは一村に一、二軒位しかなかつた。おまけに冬は八ヶ岳風や駒ヶ岳風などが激しいので、里人は常は其風道に鎌を立てて、銳威を殺いたものだ。それで風の銳威が殺げるかどうかは、敢て僕の知るところではないが、兎に角附近村落では、皆這う云ふ事をして、風と火事とに對し、一縷の安心を得て居るのであつた。町に遠い不便な片山里で火災に罹つた時、一番大切なのは何？都會なれば勿論米や野菜であらうけれど、農村である丈けに、一番貴重品は米でも野菜でも無い。……先づ當てて見給へ、實に意外のものだ。恐らく之

を的て得る者は極めて少数であらう。僕の祖母が常に皆に注意した言葉に「此邊は皆草家で、井水も澤山はないから火事には不斷注意して置かなければならぬ。火事と聞いたら先づ第一に、誰れでも手桶やバケツなどへ水を汲んで家の前へ並べろ。そして鍋や釜は井戸でも溝でも水のある中へ沈めるがよい。家や倉は焼けても、衣類や米の見舞は来るが、鍋釜がなければ飯を炊く事も出来ない」と云ふがあつた。僕が十四歳、中學一二年頃の夏か秋かと記憶する。三階の講堂回轉梯子で昇降するで、日本歴史の授業を受け居た際、窓硝子がびりびり地震だ………といふが否や、四五十名の生徒は先を争つて一齊に遁れた。僕も回轉梯子を一足飛びに飛び降りたは善かつたが、餘勢で床へどつと倒れた。起き上るや否や、庭へ飛び出し、梧桐の幹につかまつて、暫く息を休めたが、地震は左程大きくもなかつたものと見え、學校も倒れず、依然として居る。只瓦が數枚落ちたのみであつた。併しあはてて自分で怪我をした者は、數人あつた。講堂へ歸ると、背が高く、瘦せて骨と皮ばかりの穂波秀五郎先生が、教壇の椅子に據つた儘――併し例もの青い顔に似ず、頬邊紅を潮した貌で、英雄加藤清正でさへ、地震は怖かつたといふ事であるから、諸君が驚き怖るるのは無理もない事であるが、地震で怪我をせずに、自身で怪我をした者が昔から尠くない。倒壊する様な大地震であつたら、此三階から

下へ降り切らぬ先に、家はつぶれるから遁げるなら下へ遁げるよりは、家根へ遁げた方が却つてよい。何事にもあはててはいけなない。臍下丹田に氣を落付けてやるが善い。左様仕無いと、落る瓦などで傷き、死ぬ事となる。總じて地震の時は遁げてよいが、遁げないのが好いかも知れぬ。遁げて遁げなくても、死ぬ人は死に、傷く人は傷き、安全の人は安全である。見苦しく噪いで、あわてて死んでも、生きても見苦しいと戒められてゐたので、僕は常に此言を服膺して居た。其爲め爾來十數回の大小地震に遭遇した際も無意識が、本能が知らぬが、揺らぐ心をじつと落付けて、其儘其處にと努めたのであつた。

閑話休題、九月一日の地震は、是迄僕の出遇つた地震中最大のものであつたのは事實だ。僕は是迄一度も遁げなかつた代りに、一度も潰された事も、傷たい事も、勿論死んだ事も無かつた。

今度は例の態度を取つて、潰されたのは今度が始めてである。ユラユラドシンドシンガタガタと來た。誰か僕の頭と肋を打つた。膝へ何か乗つたが、眞暗である。何も見えない。非常に埃臭い手を出して、解れて見ると、前後左右を何だか堅い大きい物が取巻いて居て、少しも餘裕がない。困つたな。獨りではとても出られさう

もない。早く出度いが今日か明日になるかと思つたら、急に甚しく空腹を感じた。惜しい事をした。晝飯を食つて居ればよかつたが、……地震が食後に起つて呉ればよかつたが、今は連も堪え切れ無い。動かないこと、あせらない事に仕様と観念した。暫くすると、何處ともなく「オーイ」といふ呼聲がするので、僕も「オーイ」と答へた。斯の應答が數回續く内に、外で「火事だ」といふ小さな聲が聲えた。火事は何處だらうと思ふ間もなく、パチパチ燃ゆる様な音も聞える様だ。近いなと思つたので、グズグズして居る場合でない。通れ得る丈けは遁れる事に努力しようと決心して、叩き廻して見ると、何れも太く堅い材の内、只一箇所薄い板らしい處がある。上から撫でて見れば、課長の机の羅紗張板であつたらしい。ここだ是から上へ出得ればよいが、若しか駄目ならもう命はないものと断念するより他ない。幸なるかな、どうか口を開ける事が出来た。勇を鼓して匂ひ上がろうとすれば、誰かが裳を押えて居る様だ。かまうものか、曳すつて出よう。兎に角天井裏らしい處へ出て見ると、北側に一尺餘りの三角の穴が明いて居て、其所から暗い屋根裏へ弱い明りが遠慮なく放散して居る。

其所迄這つて行つて破つて見たら、僅か五六尺の所で既に潰された作業課が燃えて居る。總務課二階の一部は、北側へ倒潰したものだと思ふ。

僕の落ちたところも、土臺内やコンクリート叩の歩廊上でなく、中庭であつたらしい。見廻せば作業課や總務課や會計課は全潰して居るが、工務課の二階建は斜ぎ取つた様に、其儘兀然と聳えて居る。作業課長や會計課長の埃だらけの貌が突立つて居る。會計課長の「オー久保寺君」といふ言葉を聞き乍ら、歩を移せば、檜山君が工場と假置所との間の廣場に立つて、御怪我はありませんが、其處は危険です。彼方へ」といふ儘に、頭を押へ足を引ぶりつつ、比較的安全らしい場所に立つて見たが、よく見れば、大分地割れがして居る。仰ぎ見れば、煉瓦倉庫は大きな口を開いて、一口に嚙まうとして居る。傳習生教場は疾くの昔に、メチャメチャに壊れて、ベチャンコになつて居る。頭と肋と腿とに漸次疼痛を感じて來た。頭を押へて居た手が、ネバネバするのは、血がベツタリと着いて居るのであつた。是は不可ん、醫者——外科醫に兎に角見て貰はうと、門の所まで行つて見て驚いた。地震は否潰れたのは、役所ばかりとは勿論思つて居なかつたが、是程甚しいとは思はなかつたのだ。罹災者は僕計りかと思つたのに、給仕が足を挫かれて、痛い痛いと言つて居る。本町學校や寄宿舎や官舎は倒潰を免れて、數人の避難者が門外に立つて眺めて居るが、商品倉庫は全潰し、貿易新報社は膝を打つて、丁寧に御辭儀をして居る。道路の龜裂、陥没は川岸丈に甚しい。誰であつたか、家が心配だと言つて、

馳け出して行つた。門傍の半潰のポンプ小屋から、ポンプを曳出して、消火に出掛けける者が二三人ある。手傳はうかと一二歩引返したが、腿や肋の痛みが、ダンダン増して来る。兎に角醫者だと、漸く自力で辨天橋迄來は來たが、近邊の被害の甚しいのを見て、醫者も逆も駄目だなと思つた。多數が夢中で、右往左往に馳せ廻るので、進退の自由を缺いた僕は、あぶなくて仕方がない。「其所にマゴマゴして居ては邪魔だ」と啊る様に手を振つて、停車場前を指して叫んだ數人の老幼が、二三組塊つて駆け出した。僕も其跡からポツポツ蹤ひて行つた。振返つて見れば巍然として聳ゆる本町小學校は、二階の窓から盛に燃焼を吐出して居る。役所の方にも煙が見える。伊勢佐木町や野毛にも櫻木町にもだ。萬事休す

空車を引いて、神奈川の方へ馳せ過ぎんとする俥夫を遮つて、行ける所迄乗せて呉れと頼んだ。「怪憤をしたのだと續いて附加えた。車夫は梶棒を卸し乍ら、戸部ですから横濱驛迄ですよ」と言ひつつ駆け出した。修養講話で御馴染の藤田順道さんの御寺も、ペシャンコだ。無理に頼んで、築地橋迄行つたが、橋が渡れない。車夫の助で僅に渡橋。あとは蟲の這ふ様に、どうかこうか宅へ辿りいつた。前は置土、後ろは切取つた土堤を負ふて居る僕の家も、地割で傾き破れて居る。家族は老松を頼りに庭で避難して居る。

茲に濃厚沃度丁幾の消毒を施しラデオリンを充分塗布して、繃帶をされ、庭上の寢椅子に安臥して眠に陥つた。

二日露營の夢淡く覺めて、全身の疲勞倦怠を覺えた。負傷の場所は依然として疼痛を感ずるが、どうかして役所の消息が知り度い。模様が見度い。一杯の葡萄酒に勇氣を附けて見たが、再び沈睡に陥つた。

三日はどうしても役所へ行つて見度い。妻子や避難して來て居る親戚が、寄つてたかつて止めたのを振り切つて出懸ける事にした。二日間の熟睡ドラデオリンの効果、で場所も稍、疼痛を減じ、浮腫も稍減退しかけて來た。氣分もどうやら少しは善さうだ。行けるかどうか、途中迄も行つて見ようと決めたので、義兄が櫻木驛まで送つて呉れる事として、一緒に出懸けた。本覺寺坂から見ると、戸部も神奈川も、未だ焼けて居る。殊に平沼の石油會社は、黒烟濛々として、時々大爆發をする。水に浸けて置いた材木の筏は、上から焼ければ、ダンダン浮上つて、乾いて下迄焼け續けて居る。其間の水には死人が黒焦となつて、無數泛んで居る。路傍には鮮人等の死體が倒れた儘、何の被害もなく無慘の姿を曝して居る。曲れる軌條、陷れる道路、裂けたる橋を、避難者が、陸續と彷徨して居る。兩側の餘炎で、路の中央でも顔が爛れさうに熱い、見渡す限りの焼野原、只所

所にコンクリート造や、石造や、煉瓦造の大建築が見すばらしき震火後の残骸を止めて居るに過ぎない。大自然の大威力、否、匪後の餘の將が一寸動いて、赤帝がペロリと出した赤い舌、一風伯が鼻息をかけた計りで、此のザマだ。人智人力は表面ばかり、外形ばかりで、造化の眞髓を握り得ない。文明の股鑑は已にナイル河の沿岸、埃及の古壚で明かだと想へば、人間といふ者も、幾分健忘性の奴だと思つた。大自然、これに對して小なる人間は、逆も盾をつくわけに行かない。其飛沫が直に自分へ返つて、人間を咀ふ様な言葉となるのも、つまり被害の重大、悲慘の猛烈に亢奮した結果である。

宅より辨天橋までに既に二時間を費した。義兄に分れて、獨りボツボツ勞れた痛む脚を引ずつて、役所へとあせる。横濱貿易や銀行集會所の倒潰物で、道は埋められ、瓦礫の山を築いて居る。漸く門前に辿り着けば、巡視小使野村(運送屋)の三人が居た。一昨日に變る眼前の荒景、肺腑を絞る悲憂の感、御氣の毒に所長さんも無くなられましたといふ野村氏の言葉に、思はずワツと聲を放つて泣いた。「今所長さんの骨上げです。御出でになりませんか」と、小使の言葉に、「イヤ行くまい、また泣かねばならぬから」と、一旦は斷つたが、苦痛を犯して、出掛けて來て、偶然にも御骨揚の場合に遭遇したのは、同じ所員としても因縁の深い方である。泣いたとて笑ふ人もあるまいと、勇氣を振ひ起して、遂

に其場へ行く事にした。工務課長以下數々の人に圍繞せられて、所長閣下夫人は、今もしほしはと骨壺を抱いて羅州丸へ引揚げやうとするところである。未亡人の御姿と其抱かれて居る壺とを見ては、嗚咽語を發することが出來ぬ。僅に一言の弔辭を述べて低頭し、壺蓋を開いて之を拜するのみであつた。

この不時の天災に殉じた者は、所長の外に川島作業課書記宗像會計看守以下、小使職工商人併せて十名。負傷者としては、服部課長、久保寺、高橋、澤田、岡田、藤林の各書記等十二名で、重傷者も負傷者の數も、總務課が一番多く、其幹部連皆負傷を免れなかつた。全焼者は所長以下官舎居住者全部の外服部技師を始めとして、其數一一三、全潰者は武本課長以下卅三氏で、其他は殆ど皆輕重の差こそあれ半潰者は五八である。全く些も災厄に懸らなかつた唯一の好運兒は、視察乗組の二等運轉士のみである。事實相違の旨本人より其後申出あつたとの事である。氏は獨身で、常に船に起臥し居り、當日も上陸しなかつたからである。

地震だ！火事だ！といふ始末であるので、幸に倒潰を免かれた工務課や、官舎や工場の一部でも、現金、財産物品、書類等を搬出する暇はなかつた。幸に搬出したものがあつたとしても、殆ど皆遂に祝融氏の舌に舂められて仕舞つたのだが、其よりは第一貴重な

る人命救助に従事しなければならぬ。運好く災厄を免れた人々は皆屋根の下や梁の下に生存して居る人々を救ふ事に努力したのは勿論の事である、是等の善根を施した人達は、多くは總務課否文書掛(兼務を共)の若手連であつた。

何年來つまらぬ割のわるい椽の下の方持をのみ爲し續けて來た人達であつた。其人達が今度の災厄に於ての殊勲者揃ひであつたのは面白い。彼等も一旦は潰されて仕舞つたが、幸ひ些の負傷もなく、自ら逃れ出て、他課の三名と協力して、服部澤田・中林・稻林堀等の諸氏及給仕二名を救ひ得たのである。

地震といへば話に残る江戸安政の大地震であるが、今度の地震は安政のよりは小さかつたといふ話だ。併し火災の強弱を比較すれば、今度の方が十倍以上の廣さを焼かれて居る。人命の損傷、物質の被害に至つては、其何十倍に達するであらう。安政地震録や錦繪などに見るに、當時は勇ましき御使番、町奉行、寺社奉行、其他參勤の諸侯、家中や町方、火消人足に至るまで、皆持場々々に消し口を取つたのであるが、今回は殆ど消防に従事した形跡がない。何故だらう。文弱に泳れた結果か、餘り分業的になつた爲か、利己主義が行はれて、協同一致の觀念に乏しかつたか、有事の際に於ける訓練が足りなかつたか、餘り機械的利器に信頼し過ぎたか、學問や財産があり過ぎて、魂がぐらついて計

り居たのか、恰も奢侈放逸、輕佻浮薄を懲らすべく天神地祇の怒らせ賜うたのである歟。僕は明治二十一年、關谷博士の下に地震學教室で、日本地震史編纂の補助をした傍ら、各種の微動計や地震をものぞいた上に、必要上から寫眞術や建築地質、地文、物理等の諸學を兼修した事がある。關谷博士は磐梯山の破裂や濃尾の大地震など、いづれも病を犯して出張調査し、遂に重患となつて、熊本から神戸に歸り、板宿の禪昌寺で逝かれた。數年後其跡を繼がれたのが大森博士で、次で今村博士も、地震學者となつたのだ。關谷博士が當時斯學の泰斗であつた如く、大森博士や今村博士も、現今に於ける世界の泰斗である。そうして地震學の最も發達進歩して居るのは、我が日本であるのだ。

日本の地震を通覽すると六十年乃至百年毎に必ず大地震があつた。勿論ずつと上古に於ては、もつと頻繁にあつたらしい。神話には地底の大鯨が、少し聳を動かせば小地震で尾を揮えば大地震が起つたのだが、鹿島の神がこの地震を止めさせようと、大きな岩錘を深く地中に挿入して、鯨の頭を壓えて仕舞つたので、爾來餘り地震はない。此石を鹿島の要め石といふ、とあるが、小藤博士などは面白い貴重な傳説である、この説に心酔して居て、これから何か大發見を仕ようと思はれて居たらしかつた。

大森博士と今村博士との間に、東京附近に於て、本年頃か近き將來に於てか、大地震の

有無に就いて、異なつた意見が發表されてあるといふ事で、新聞でも八釜しかつたのは、今回の地震後の事である。或新聞によると、大森氏は「無い」と斷定して居り、今村氏は「有」と云つて居たと書いてあつた。又或新聞では「ある」と斷定して置いた方が有利である「無い」と斷定して置いて、あつた場合、其人の面目は丸潰れとなる。大森氏であればこそ、學問上自己の推理的信念を、何の疑ふところなく、恐るるところなく、發表し得たもので他の人々の企及する能はざるところであると言つて居た。其他にも甲是乙非種々な批評があつたのであるが、要するに餘り皆んながこたわり過ぎて居る。大森博士は現今家屋其他建築の粗雑な事就中、水道や電氣や瓦斯其他の布架工事の不完全を指摘して、地震の際に於ける悲惨事の突發を防止すべく、警告を發した事は、十數年來屢であつたのに、世間は其警告に頓着せず、不完全なものを其儘にし、尙後から後からと不完全な工事を進めて來たのだ。是が爲に、當事者も建築家も、誰も非難されないのに、獨り二氏の間にのみ褒貶があるといふ事は、面白からぬ事である。六十年乃至百年に、比較的大地震があるといふ事を教へて居たのは、大森博士でも今村博士でもなく、實に「古史」である。大森氏の大とする處と、今村氏の大とする處に、多少の相違あつたに過ぎない。殊に地震學、地震學に限らず、殆んど總ての學問は永久の研究に屬するもので、其内にも

地震學は、新しい學問であるのと、其研究が容易でないために、其進歩は他の學問の様に速きを望んでも無理である。總ての他學問は皆、日本が他の列國から學んだのであるが、地震學だけは、今日本は先生の地位に在るのだ。何十年か何百年かの後、斯學が發達進歩して、同時に斯學應用に確的な方法を發見したならば、やがては天氣豫報の様に、不完全ながらも地震豫報を發する事が出来るだらう。併しさうなつたら、天氣位でなく、地震であるだけに、若しの中しなかつた場合、大變な非難攻撃も起るであらうと恐るるのである、否歟。

僕は夢であつたか、何であつたか、誰からか左の様な事を、確に數月前に聞いた様に、今以て覺えて居る。社會主義者は日本の國家團體を根底より覆すべく、寄り寄り極秘に計畫して居る。日本には彼等の舉動を助くる八朔二百十日、二百二十日の厄がある。併しこの厄火には、雨を伴ふのが不利益だ。其れよりは何時か大地震のあつた時を利用して、焼打をするに限ると、竊に其機をねらつて居るといふ事で、それは○國や、○國在住の主義者達が、多數の運動費を撒き、○人や○國人を煽動勸誘して居るが、我國民中にも若干名が之れに加擔して居ると。

僕は這の事變の起る迄は、之を忘れて居つた。勿論信じなかつたからである。併し、

這の事實に遭遇して、始めて舊憶を恢復したのだ。そして人毎に尋ねて見たが、何人も僕はそんな事を君に話した。覚えはないと、皆打消さるところを見れば、やつぱり夢であつたかも知れぬ。僕は其夢を忘れずに、世間に發表すれば善かつたと、今更後悔先きに立たずといふ次第だ。併し天譴であろうが、何であらうが、大損失・大悲慘事ではあるが、只日本人がこれに覺めて呉れば、從來の浮華放逸を改め、眞劍に着實に努力の我に歸つて呉れば、吾人には實に敵國の攻撃を受けた場合よりは、遙に善い殷鑑である。吾人は生れた儘の裸一貫の如き、無邪の心に歸り、正直に世の爲め、國の爲め、人の爲めに盡すが善い。心も身も建物も財産も汚れた舊いものは、皆破壊し去られて仕舞つたのだから、是から最善最美の心を以て、最善最美の國や、世や町や家庭を建設せねばならぬ。皆んながそういふ決心で之を實行して呉れたならば、此大災厄は決して大災厄ではない。悲しむを要せず、寧ろ大いに賀すべきであるが、是にも懲りず改めない様ならば、何年何十年かの將來に於て、何れ必ずより悲慘な、より殘虐な、より甚しい破壊が来るものと、今から僕だけは覺悟して居る。僕は其時に勿論死に度くはないが、又生きて其慘を視るにも忍びぬ。どうか其れよりも前に死に度いと思ふ出来心は女々しいか。

一八 其後の久保山災葬場

古 安 行 圓

久保山火葬場、周圍約二萬五六千坪の共同墓地一帯の凹凸地帯、或は高く或は低く、各區劃をされて、幾萬の墓標が樹つて、日次に不斷の香煙を薫らして居る。この場所は實に祖先の靈を秘せる崇嚴な空氣が常に漂ふ所なのである。震災、尙ほ眠れる靈までも脅かさんと、これらの墓石玉垣石垣等に至るまで、見る蔭もなく打壊したのである。中には誰も目に付く、煉瓦造の火葬場と、同齋壇とは、無慘にも倒潰されてしまつたのである。ここに偶然のことがある。丁度震災前日八月三十一日は友引の日、古來から誰彼も一樣にこの友引の日に葬儀を出すと云ふことは忌み嫌ふのである。是れ傳統的風習である。然もこの震害の前日が、即ち其友引であつたために、當日に限つて一人の依頼者もなかつたので、このか弱き建物の中で、壓死の厄に遇つたものは一人もなかつたと云ふことは、友引が齋らした幸であらう。唯眠れる遺體八個は、釜に収まつた儘になつて居たので、倒潰と共に日を経て腐敗し、臭氣は四邊の者の鼻を衝かんばかりになつて、誰人も手を付けやうとする者が無かつたとのことである。

翌二日、渦卷から蘇生した遭難者は、續々としてこの火葬場さして押寄せた。其中で

特に哀れな話を摘記せねばならない。

五八六

木片に我子の死體を載せて來るもの、或は一片の焼トタンに己が夫の無残な死體を乗せて、老父と與に跣躑とした足どりで、運び來たもある。或は電線で死體を縛り、あるは何處から拾つて來たか焼つづらや、アンペラやに包んだ死體を、肩に脊に負ふた老若男女も殺到した。實に是れ修羅場を眼の前に實現した有様だ。かくして此火葬場に殺到する者は、一樣に即急の處置を歎願して止まないものであつたが、如何とも手を下す事が出來なかつたので、應急に一時の各番號札を渡して、假埋葬をさせたのである。中に伊勢佐木町方面から來た者は吉田橋附近の川中で死んだと云ふ婦人の死體を、其父親と姉娘とが、火葬場まで運んで來たは來たが、前日來の恐怖と疲勞と飢喝とで、途中に昏倒せんばかりに、脊負つた赤兒は母親の絶食で乳もなく、殆ど母子共半死の狀態にあるのを、眞情の流露か、誰人か殘飯一握りと水とを與へて、漸く一縷の命を繋がせたと云ふ美談もある。又ある父親が、其娘の死體を抱へて來た姿は、如何なる鬼神でも、かかる悲慘な姿を見ては、面を蔽ふたであらふと思はれる。かくして震災後幾日間、同所は受付に寸暇もない程で在つた。中には家族の死體を久保山へ運ぶ途中、鮮人襲來の蜚語に脅かされて、死體をその場に捨てて遁げ去るものもあつた。久保町の横濱帆布會社

では、壓死者二十幾名かの死體を、同時に持ち込んで來たと云ふ有様で、一般市民は久保山へ持つて行けば、何とかけりがつくだらうとの考へから、毎日幾十人の死體を持ち込んだ。さて火葬場としても、この始末では如何ともすることは出來ない。警官に懇願して、臨機の處置を迫り、そこそこに諒解を得ては、一時附近の墓地内に假埋葬させ、一方應急火葬場を、附近一帯の露天に假設したのであつた。然し是れとて一時僅か十名位も火葬するに過ぎなかつたので、晝夜兼行で持込順に行ふには行ふたが、其數餘りに多かつたので、茲一週間に亘つて集積された死體は、殘暑のために、腐爛して、四周に臭氣を發散するのであつた。同火葬場で取扱つた中に、取引人のある慘死者の火葬數は、實に九月末日迄には四百五十二名を算したとのことである。無名の壓死者は多くは原形を失ひ、誰か何やら、無縁の死者は山と積み、死亡者の個々を附近箇所集團せしめ、茶毘に附したのである。然して遺骨はすべて川合寺から前約三町の地に共同埋葬をして、一本の「大震災横死者記念碑」と云ふ淋しき塔婆が残されたのである。其遺骨の數は實に五千七百七十八人の多きに達したとのことである。

一九 水道山の避難記

木村順次郎

息も吐かずに襲ふ地軸の激動に、一と耐りもなく倒潰した屋材の下に救を求め傷痕に呻めく血縁をだに顧る邊なく、急潮の如くに襲ひ来る紅蓮の焰火に逐はれ、子と呼ぶ老を援け、濁水を泳ぎ、火焰を潜つて、水道山南部谷原耕地に難を避けた人は、凡千有餘名に達したのである。一望の下に眺め遣られる劫火の海と、間斷なき餘震とに心脅えながら、これら避難者の群は、強い人間愛に結ばれて、彼我相援け、其夜の中に七十有餘の假小屋を造り、雨露を凌ぐ用意だけは整つたものの、さて次に何とかしなければならぬのは、食糧問題であつた。偶、二日朝、船渠倉庫が開放され、米其他の穀類が給付されつつあるといふ飛報が何處からともなく傳つて來た。飢えた人達にとつて、之に増す福音がまたとあらうか。此危急の場合、須く團體的に結合し、互助の精神に立脚して、秩序ある行動を執る事の必要が、多數の有志に依つて主唱され、忽ち衆議一決して、茲に一種の自治團體が組織されたのであつた。恰も鮮人襲來の報が傳播され、人心は極度に脅やかされつつあつたので、取敢へず食糧自警の二班を設け、團長を推し、居合せたる一巡查を自警班の指揮者に舉げ、五十名の壯丁を撰抜して、十名を一隊とし之を食料班として、

直に行動を開始し、同日中に船渠倉庫から給付を受けた玄米、及び外米合せて二十一俵、竝に鹽二俵を運び來つたのである。

翌三日朝直に假倉庫を築き、前記の食糧を格納し、改めて一千有餘名の代表者として、十七歳以上四十五歳迄の男子百五十名を選び、食糧の分配方法に就て協議した結果、これを均等に配給するに於ては、一人當り僅に三合五勺に過ぎず、漸く一日を支ふるに止まる。避難者中には既に相當食糧を準備した者もあるので、此際飽迄互助相愛の精神に基き、全く食糧の缺乏せる者に對してのみ、一日大人男三合、同女二合同幼者一合、食鹽一戸一椀の割合で給付する事に一決して、その資格を調査決定するために、十名の役員を擧げたのであつた。そして、寫眞に示す如く、戸板を利用して、戸籍簿を作製したのであつた。斯くて各自は能く互助相愛の精神を發揮し、二週間目から開始された、霞谷青年會の配給と相俟つて、一箇月以上に亘り、完全なる共同生活を維持し得たのである。

又郵便事務としてのポストは、早くも設置せられ、更に傷病者の救護及傳染病の豫防に關して、一醫師自らが奉仕的に活動し、縣當局と交渉して、藥品の補給を受け、毎日午後一時から三時迄、診療に従事し、一面便所の設備は素より、應急的下水設備に至るまで、數日ならずして完全せしむるに至つた。あの混亂時に際して、斯の如く秩序あり、相愛的

な團體的行動に終始した事例は、恐らく他に餘り例があるまいと信するのである。

斯くてその後一年を経て、二百餘家族一千有餘名相謀り、追悼謝恩精神の作興を目的として、震災避難水道山南部記念會を組織し、一週年記念日に水道山南部谷原耕地に於て、謝恩記念會を開催し、追悼會を営み、精神作興に關する講演を聴き、避難箇所地主西村喜三郎氏及び霞谷青年會、竝に當時の功勞者十一氏に感謝狀を贈つて、謝恩の意を表し、別に避難地に櫻樹一對を植えて、永久的記念とし、又南太田赤門東福寺竝に日之出町子神社頭に、雌雄の銀杏樹を植えて、當日を記念したのである。(震災避難水道山南部記念會)

110

遭難と人心騷擾に關する實見記

中 島 德 四 郎

私は大地震の時は恰度用事があつて外出し、自宅の下の境の谷停留所にて電車に乗り、發車すると、此大地震、夫れも乗客が先を爭ふて飛び出るので、婦人や子供等に靜になさいと注意して、自分も下車して、其附近を眺めると、石垣は破壊せられ、土堤は崩れる、家屋は倒壊する、土地は四五尺の幅に龜裂し、樹木は倒れる、自分も地震の中を狼狽しながら、廻り道を辿つて、自宅の脇に歸つて恐ろしい事もあつたと、ふと前を見ると、隣家の土藏はこなこなに破壊せられて居る。二階家は屋根の瓦が落ちて、酷く破壊せられて

居る。隣接地の神奈川縣立第一横濱中學校は、校舍の大部分が破壊せられて居るので、驚きながら自分の家を見ると、土地は三尺以上も地沁りして、家は斜に傾いて居る。屋根の瓦も餘程落ちて居るので、二度喫驚、急に家に近寄つて見ると、玄關の戸も動かないので、中に入ることもならず、裏の方にと庭門に廻ると、家内も子供も庭先きの小高い所に避難して居るので、まあ無事であつたかと悦んで、心も漸く我に歸つて、周圍を見ると、自宅よりも一段小高い處の瓦家數戸は、目茶々々に潰れて、而も崖と共に崩れて、數丈も下に落ちて、其下の亞鉛葺數軒を壓潰して居る。聞くところ、其の瓦家の潰家には、壓潰された人が二三人聲を擧げて、救を求めて居るといふ悲鳴、凄慘な話だが、地は刻々に搖れて、身の動かしもならぬ。其上に龜裂は廣くなるのみで、危険限りなしと言ふ有様、人の性は善、誰も彼も此の災難に逢ふた時は、愆も得もなくなる。眞に此恐ろしい域を脱したいと言ふより外に、何ものもないと見えるか如何か。

遠く横濱全市街を眺めると、此處彼處に火災が起つて、其燃る恐ろしい天を焦す火焔が、終日終夜見えた。就中神奈川のスタンダード石油會社のタンクに火が移つた時は、其の火焔の恐ろしさは何とも譬へ様がない。直徑何十間と言ふ火柱が、何千尺と高く樹てられた様に見えた。又其の光明は何里四方にまで反射したのであらうか。また

終日終夜の火焔で、横濱の空は全く黒煙がみなぎつて、翌朝になつても太陽が見えぬ、暗夜の様であつた。

食事は前日來一粒の米も口にせぬが、別段腹も減つた感じもせなかつた。子供も家内も一晝夜不飲不食の態で、其上屋外生活で居るので、せめては握り飯なりと思ひ立ちましたものの、水道斷水で、他に水はあつても、泥水ゆゑ、米を磨ぐ譯にも行かず、此處彼處と井戸を探りて、漸く十町も離れた遠方で、水色の水を得て來て握飯の仕度をした。空腹の時に不味のものなしで、握飯に辣蕪で、二日目の晝の食事を濟した。すると間もなく、郷里の縁者から握飯を携へて見舞に來て呉れたので、郷里の被害の様子も知れ、横濱同様随分被害は酷く、夫故に食料品の供給を受くる頼みの道も斷れた譯で、玆數日間は食料品の貯藏はあれど、其後は買ひたくも米穀はなし、野菜も水もなし、悲しい境遇になれば爲るものと、心細く、夢ではないかと思ふのみであつた。見舞に來て呉れた人々の話に、横濱は端から端まで焼け盡されたと聞いて驚いた。成程昨夜來此附近に避難した罹災民は、無慮五萬人と語られて居る。中學校は校舍も運動場も、立錐の餘地なき群集である。又彼等は雨露を凌ぐ假小屋を造るに急なりとは言へ、附近の家屋の戸障子と言はず、財物と言はず、手當り次第掠奪をする。此邊に住む人は、實に迷惑をして、之

が監視に全く疲れた。往年サンフランシスコの震災の時には、泥棒が多かつた。殊に大きな窃盜や、かつばらいが、澤山横行した相だが、而も此度の日本人の泥棒振りは、劣等人種である事を遺憾なく暴露して居る。家主が其戸を外されては、産婦が寢て居るかと探りすると、何をおれは焼出された。家も無ければ財産もない。貴様等は家がある丈よい。文句を言ふと叩き殺すぞと言ひつつ持つて行く。其の面の憎さ加減、實に詞の外である。我々國民として、彼等の心理状態を、實に情けなく思はずに居られない。親と言はず、子と言はず、今尙盛に陋事を行つて居る。否、親は子供が他家の物を盗んで來ると褒て居ると言ふ、有様、之を見て、教育上兒童の前途を思へば、將來大に研究を要する事と思はれる。

實に大正時代の文明的國民と言へるかと思ひたくなる。戰國時代の原始状態に、俄に逆轉してしまつたものだと思はれる。日本人は果して眞實な文化を理解し得る國民であるや、否やを疑はざるを得ない。

地震や火災に驚いて居るさへ澤山なのに、其上掠奪に苦められると言ふ有様、何と云ふ不幸の事であるかと思ふた。又朝鮮人が井戸に劇藥を投じたり、爆裂彈を投じて放火したり、内地人を強姦したり、總ゆる暴行を爲しつつあり、其れ故郡部の方では、専ら警

戒を努めて居るとの事を耳にしたが、間もなく其方面から、今朝鮮人が百五十名程、ピストルを携へて、内地人を襲撃せんとして、此坂下に押し寄せた。内地人にして十五歳以上の男子は、武器を持つて、之を撃退せしめらるべし。女子は學校運動場内に避難せらるべしとの警報があつたので、避難民は忽ち顔の色を變へて、手に手に棒や短刀や鐵棒やを携へて、應戦の準備に忙しかつた。運悪く自分の家は、脇掛け窓の鐵棒を二十本程抜き去られた。自分達は其時より自警をする事となつた。

中學校運動場の坂上では、朝鮮人に應戦して、朝鮮人を銃殺せりとの報があつた。又時々喇叭で集まれの號令を爲すあり、又何れよりか朝鮮人が捕縄され、巡査に護送せられ、中學校へ來るのが澤山ある。

再び「甲府聯隊は、今神奈川に到着したるも、此山に到着する迄には、尙約三時間を要すべし。諸君は其間嚴重に警戒を努められたし。」との警報が來た。

毎夜附近を警戒し、日没後通行する者は、何人たるとを問はず、誰何する。答辯の怪しき者は、直に一刀の下に切り殺すと云ふ物騒の社會に化した。全く戰地にあるが如くに感じた。

在郷軍人は要所々々に劍銃で警戒して居る。自宅は四五間先の中學校裏門にて、在

郷軍人が四五人宛常に警戒して居る。日没後自宅の庭先の大松の小蔭より出でて、中學校裏門へ差し掛る者があるので、在郷軍人が誰何して、原籍を問ふと、山梨縣と言ふたが、郡名村名が言へぬので、直に一刀を腰部へ浴せて、深さ一寸幅五寸骨膜に達する痛手を負ふて、血汐は周圍へ飛散した。被害者は其儘倒れて居つた。幾千人となく通行する人が、之を見るので、被害者は着衣の單衣で顔を匿したが、朝鮮人が殺されて居るので、之を見る爲、集まる者も少くない。中には、貴様等の心得違ひから、我々は此難儀をするとして、蹴つたり打つたりする者もある。其後三四日を経て、雨が降つたので、避難民も一層殺氣立ち、通行者の一人が、日本刀で數箇所切り付けた。又伴れの一人は、鐵棒で打つて打つて打懲し、其上顔の姿が判らぬ様に、こなごなにしながら、負傷者は死にきれず、其夜は八時頃、雨で人足絶えたので、其場より十四五間も離れたる拙家の庭先の土手へ匍匐つて來たので、避難者が見て、終に之を打殺した。死體は約一箇月も其儘放棄せられてあつたのは、實に困つた。人は病氣に罹つたり、怪俄をしたりすると、生命は誠に脆い様だが、急所が外れるとなかなか強い様に思はれる。

戒嚴令は發布せられて、軍隊が入市して、一時安心の態になりましたが、自警團は今尙行はれつつありとは言へ、震動や窃盜は止まず、安全界には未だ到達せないのである。

傾斜した自宅は、御陰様で漸く仕事師に手入をさせ、大工左官も入れて、屋根も瓦で葺き變へ、壁も引き込み、雨戸の戸締りは出来ましたが、障子・襖の手入れは、年内には諸材料不足の爲、到底見込なく、壁も中塗り迄にして、上塗りは明年材料の輸入を待つてなすべき見込です。罹災後の横濱は、労働者の賃金暴騰し、實に閉口致します。それ故に大概の人は、萬已むを得ざるものの外は、家屋の造作や手入れは、見合せる者が多い様です。

二 燒野の雉子 (琵琶歌)

此の一編を須藤森太郎氏夫妻に捧ぐ 宮原信夫

燒野の雉子夜の鶴
我が子の上に骸をば、
救ひ止めたる父母が、
鬼神も涙に咽ぶらん。
頃しもあれや大正の、
十歳に餘る二歳の、

子を思はぬはなけれども、
犠牲にして一命を、
愛の情の一念に、

長月朔日午近く、
大地震に火も募り、
燒き盡したる荒神の、
玆に港は姿見の、
綾も密なる親と子が、
辛くも外面に通れしが、
逃るる途もなくなくに、
其の名も東本願の、
あはれ此處にも毒舌の、
寄せては來るぞ物凄き。
橋のかたへ馳せ寄れば、
吹き煽られて袂より、
荒卷く紅蓮の唸より、
時しも奔馬狂ひ來て、
今は逃れん術もなく、

關八洲に荒びたる、
華の都も生靈も、
呪ひの跡こそ無慘なれ。
影もうつらう友禪に、
地震に續く猛り火に、
行手を塞ぐ炎にて、
最寄にしるき古刹にて、
寺庭指して馳せにける。
黒き烟に渦卷きて、
こは怖ろしと人々は、
折から吹き寄す暴風に、
どつと許りに焼け落ちぬ。
物凄かるよ人の叫、
行手に荒るる怖ろしさ、
死を覺悟せる親と子が、

恐れ戦く人々と、
 誦じ奉るぞ痛ましけれ。
 慄ゆる吾が兒抱き上げ、
 汝は二人の親に代へ、
 佛の慈悲の在しまさば、
 救はせ給へ阿彌陀佛、
 吾が子を地割の底深く、
 そが上にぞ折り伏して、
 遂に焔に包まれて、
 荒ぶ其の日も早や暮れて、
 すだく蟲さへあらなくに、
 街の姿も人影も、
 只辻々に蠢くは、
 折から通りかかりたる、
 山の邊に助けてと、

「南無阿彌陀佛」諸共に、
 彼の子の母と父親は、
 「あな慈はしの一人子よ、
 生き永らへよ永久に……、
 吾等が赤き誠心に、
 聲もおろろに諸手もて、
 埋めて父母諸共に、
 人垣造り念佛唱へ、
 敢なく最期遂げにけり。
 焼野と化せし武藏野に、
 亂れてとぶよ流れ星、
 寂寥々の夜は更けぬ。
 夜の護りの若人のみ、
 一若人は屍の、
 幽かに聞ゆる人聲に、

こは審しと佇みて、
 現に聞ゆる少女聲、
 重なる屍の數々を、
 二個の親の死骸に、
 猶も救を求つつ、
 事の意外に若人は、
 少女を助け上げにけり。
 美はしき哉親の愛、
 導き親の犠牲に、
 更け行く夜半に田鶴鳴きて、
 武藏の小野の山雉子、誰を悼みて啼くやらん。
 誰ぞ悼みてよ啼くやらん。

我と我が耳疑ひしが、
 我を忘れて走り寄り、
 搔き除け見ればこは如何に、
 覆はれつつも少女子の、
 横たはれるぞ不思議なる。
 驚きつつも懇に、
 噫有難き親の慈悲、
 壯絶悲絶類なき、
 彼子は遂に救はれぬ。
 千秋橋上月淡し。

備考 須藤氏夫妻遭難の状は次の條を参照せられよ。

二二 震災による吉田小學校及其附近の慘狀

吉田高等小學校

(一) 東本願寺前附近

横濱に於ける最も凄慘を極めた場所の一つは、伊勢佐木横手なる梅ヶ枝町本願寺前である。數百の死屍累々として、酸鼻を盡し、當時の慘狀を物語つたことは、世人の記憶に存する所であらう。地震に續いて火災。火を取扱ふ商賣の多い大通を控えて居るだけに、燃えあがることが早かつた。私の出た頃はもう、若竹町伊勢佐木町方面の火は、紅蓮の舌を捲いて、猛烈に襲つて居た。

まだ本願寺の大伽藍は、儼然としそびへて居る。足曳久方方面にも煙は見えたが、此方面まで襲つて來ようとも思はれなかつた。それに鐵筋建の長者町電話局がちゃんとしてゐるので、寺の境内こそ安全地帯であらうとは誰も考へた。

前の吉田小學校の大廣場には煙一つ立つて居ない。そこで長者町五丁目梅ヶ枝町蓬萊町三四丁目浪花町羽衣町若竹町姿見町各町の人々は第一避難所として、此所を選んだのである。午後一時過ぐる頃であつたらう。火は次第に迫つて來た。金線サイダ

ー附近から蓬萊町へかけて、一面火の海と化してしまつた。今は全く袋の中の鼠、人々は遁るべき路を失つてしまつた。火は本堂から庫裡を甜めつくして、吉田小學校の校舎をも焼いた。人々はあちらへ逃げ、こちらへかくれたが、及ばなかつた。石垣の下、地の割れ目、隙といふ隙を目がけて、重なりあつて斃れた。悲惨と云はうか、哀絶といはうか、想像するさへぞつとする。此附近に全滅せる家の數多いのも、此所の魔所の生んだためだ。

ここに幾多の悲劇、哀話が生れた。今その一二を掲げよう。

父母の愛によつて救はれた一少女。吉田學校前の地割の中に、悲鳴が聞えたのが一日の晩であつた。もう四邊は焼野原と化して、誰一人とどまるものはなかつた。前にのべたやうな魔所、累々として焼死せる死骸の中からの少女の泣き叫ぶ聲の、どんなに恐ろしくひびいたことであらう。通りかかつた中村町青年某氏、數多の死屍を除いて聲を便りに引き出せば、姿見町二丁目染物業須藤森太郎氏の娘喜恵子(十二歳當時吉田小學校六年生)であつた。不思議や數百の歿死者の中から、唯一人生存して居たのだ。聞けば両親と共に、この所に逃れ、火に追はれて遁ぐるに路なく、地割れへかくれた。両親はもう之迄と覺悟を決めたのであらう。「せめてお前だけ生き残つて居てくれ。」と

叫びながら、喜恵子さんを一番下へ入れて、両親はの上に蔽ひかぶさつたのである。神や佛への祈願もその甲斐なく、無情にもあたりの火は、喜恵子さんの両親をも焼いてしまつたのだ。幸に喜恵子さんだけは、両親の愛の力によつて危く一命を助かつた。

ああ、むごい。本願寺前の惨状を眞に知るものは、喜恵子さん一人だ。しかも一家の中唯一人生き残つたのだ。今は両親の白骨を抱いて東京の親戚の許に厄介になつて、亡き親の法要につとめ、世のはかなさをかこつて居る。

分娩によつて知つた親の死骸。是れもここに生れた惨話の一つである。長者町五丁目郵便局前に住んで居た某氏、地震と同時に本願寺境内に避難したが、其後消息不明娘と弟とは相携へてこの附近を尋ねた。どこの死屍を見ても、これと云ふ見分けもつかない。母はその時恰も妊娠中であつたので、それを唯一の證として尋ねた末、腹にあつた嬰兒は、半身を生れたまま共に焼死してゐた。同時に家族の死骸が、その附近から一人二人とわかつたといふことだ。惨中の惨、聞いただけでも身慄ひがする。

(一)

吉田小學校被害の状況。第一震で殆んど倒壊、三十有餘の教室、二千七百の児童を収

容してゐて、市内第一と誇つて居た大校舎も、左の通りの修羅場と化してしまつた。(第一三卷二二四頁参照)

(イ)十六名の職員を救つた川井校長「スハ大變」と飛び出したのは、校長川井氏である。氏は直に倒壊校舎の屋根上に上つて、他の室に居残つた職員の非常召集を行つた。大音聲をあげて、みな集れい——一人でも歸つてはいけない。早く救護にかかれと落ついて部下を指揮せられた。「助けてくれ、助けてくれ。」あちからもちちからも叫ぶ聲が聞える。血迷つた女の先生などは、校長の腰へかたくつかまつてはなれない。

運動場には數條の龜裂を生じ、一面に泥水があふれてゐる。其中に顔面及腰部を傷けられて、血塗れになつて、助けられて出るもあれば、腰を折つて悲鳴をあげて、うなつて負はれて出るもあつた。暫くすると、火事だ火事だ火鉢から燃え上る物すごい叫びは、下の方から聞えてくる。屋根をはぎ、床板を破つて火元をたしかめて、泥水をくんで注ぎ、くんでは注ぎして、漸く消し止めた。ために内からの火を防ぐことが出来た。自分は今時壓せられて火鉢から二間ばかりの所に居て、盛に叫んだ一人である。中に壓せられて居たものも、火さへ出なければ今に助けてもらへるだらうと、救ひの來るのを命の綱と待つて居た。校長は東奔西走、聲をかぎりに救護を勵まされた。聲をたより

に見つけては掘りにかかる。二階の床板が厚い上に、頑丈な屋根瓦が重なつて居るので、中々容易のものではない。

蜘蛛の巣だらけになつて、這ひ出すものもあれば、諸所に擦過傷を負ふて出てくるものもある。中でも悲惨であつたのは、鋸で梁を挽いて出した時のことだ(後に詳述)。

漸くのこととて全部出し終つた。天か命か、外よりの火のために、校舎は焼失してしまつた。職員は悉く助け出したが、御眞影までには及ばなかつた。

此間に於ける苦心竝に努力實に察するに餘りがある。折角助け出した者の中、五名は途中に於て死亡してしまつた。更に校舎内には他の來訪者三名の白骨が残つてゐた。

美談や哀話も多いが、川井校長の奮闘は實に偉大なものである。今はあはれや、至誠大譽訓蒙一貫居士となつて幽明境を異にしてゐる。

(ロ)鋸で梁をひいて同僚を救ひ出す 蘆川氏がつぶされてゐる。「ここに居るよ、この下だよ、頼むよ。」ときこえる。屋根裏から這入つて見ると、梁で腰の所を壓せられ、頭を二寸角位のカンヌキにおされて、右へも左へも動けない。「出しておくれよ。頭の木さへ切つてくれれば、命が助かるのだ。」時々ウーンウーンと呻吟する聲、たまらなく焦立

たせる。

折りしも一教師が鋸を探して來た。誰か切つて來いとの命は下つた。まだ餘震はやまない。大きいのが來れば、共に出ることは出來ない。如何に友情とはいへ、中々はいらうとする者はない。よし僕がはいる。そのかはり氣をつけてくれ。鋸を手にして、屋根裏を潜り、梁を越え、天井裏を辿つてはいつて行く。思ひ出す、旅順の砲臺の爆發、決死隊の慘話。もう一度地震が來れば、潰されるのだ。仰山ながら、決死の意氣だ。蘆川君の力なき聲の通りに、手を伸ばして挽き始めた。ギリギリ一つ挽き二つ挽くうち、不安は赫々と迫る。漸くの思ひで、一本を挽いた。「蘆川君、しつかり、頭を右へ。」と勵ましたが、まだいけない。もう一本切らなければだめだ。他の一教師を頼んだか、うまく行かない。二度目にはいゝる決死の孔。こんどは上からは挽けない。下から逆に切らなければならぬ。ギリギリと挽いたが、齒がすべつて、更に挽けない。止むなく涙をふるつて、すごす外へ出て來る。此の時の話だ。川井校長の曰く、「もう一つ切れば、蘆川君が助かるのだと、杉崎君が泣きながら叫んで居た」と。

逆鋸！これをつかひ得る人は山田君より外にない。漸くのこととて、山田君の力によつて、蘆川君を出すことが出來た。その時既にあたりは一面に火の海となつて居た。

(六)死亡職員遭難状況 故吉川氏は、職員室に壓せられたが、本願寺前の通りへぬけ出で、屋根裏にあつて、東奔西走、御眞影奉遷、職員の救護につとめたが、八方よりの火のため、逃るるに路なく、一旦學校を出でたが、再び運動場には入らうとした際、大音響と共に、二階の校舎燃え落ち、其下となつて終つた。

故小川氏は、運動場に面した軒下にて壓せられたが、忽ち救護され、一同と共に救助に奔走して居たが、一步逃げおくれ、本願寺境内より郵便局地下室へ逃れようとして、焼死してしまつた。

故横溝氏は、職員室に壓せられて、背柱を挫折し、負はれて鶴ノ橋際の舟に逃れ、同僚につきそはれたが、燃えうつる火のため、逃るるに途なく、船と運命を共にしてしまつた。翌朝、船の上に、二尺ばかりの白骨として残つたのは、悲惨であつた。同君の死後は、實に更に悲惨のものであつた。妻女は數週の後死亡、子供も亦二名死亡し、姉娘と長男とが、三人の兄弟を擁して途方にくれ、人の同情を乞ふのあはれさとなつた。

故森本姉は、横溝君につきそうて、鶴ノ橋際の船に避難したが、燃え移る火のため、自らの責任を感じてか、水中に飛入りて、溺死をとげた。

故佐々木姉は、地震と同時に廊下より運動場へ投げ出され、倒潰せる軒にて、顔面及び

腰部を負傷し、剩さへ運動場の龜裂の中へ入れられ、見るもあはれな姿となつてしまつた。同僚の職員某氏に、負はれて、中村町の原野に三日間生存してゐたが、手當も出來ないで、遺憾ながら遂に死亡した。

以上五名の死亡職員を出した。語るさへ涙の種、教育者として天災を免れることは出來なかつた。「せめて校舎でも完全であつたならば。」とは思つたが、致し方もない事だ。しかし授業中でなかつたのは不幸中の幸であつた。

(三)

學區内に於ける主なる慘話 前述、本願寺境内、竝に學校の状況の外、記すべき慘話は、甚だ多い。その中一二をあげよう。

(一)鋸を以つて生腕を挽いた哀話 當時の新聞紙が慘話中の慘話として報導されたものだが、其真相を記さう。福富町三丁目河岸通り、空樽間屋小針氏は、地震と同時に居宅倒潰し、加ふるに側なる石藏が倒れて、其下敷となつた。夫妻及子供も共に壓せられて、出ることが出來ない。小針氏は右の腕一本、石の下に在つて出られない。他の者は漸く出づることが出來たのだ。

火は次第に迫る。店員は材木其他を持ち來つて、救助につとめたが、其効がなかつた。小針氏は「この腕を鋸で斬れ」と命じた。一雇人は、「いつかな主人の腕が斬れませうか」とためらつたが、「主人の命にはかへられない」と、生腕を斬り始めた。血潮は滴り、痛みを覺ゆる聲と驚きとで、氣も轉ずる程であつた。しかしいかにもして斬り終らうとしたが、薪を切る鋸で、いつかな肉が挽けるものではない。外はもう猛火が盛んに逼つて居る。小針氏は「もうよし、我子を頼む」といつて、去らしめて終に焼け死んで仕舞つた。其後長男は此狀を目撃し、老婆の外に弟妹のみとなつたのを悲んだのか、四日―自殺して了つた。慘中の慘、この様なみじめなものもあるまい。

(ホ)お父さんさよなら、賑町一丁目二番地ミカドバー方植松昇(十四歳)當時第二中學校二年生は、地震と共に壓せられ、床下に梁にはさまれ、どうしても出ることが出来なかつた。父はこれを出しに行つた。手と手とは握りあつたが、片脚をおさへられて居るので、出すことが出来ない。洋食店だけに、火の起ることが早かつた。やむなく、父は因果を云ひふくめた。「お前を出したい。しかし外の家族を逃がさなければならぬ。すまいが犠牲となつてくれ」といつた。さすがに昇君も涙ぐんだが、納得して、「お父さん、さよなら」といつて、燃えおちる火の中へ包まれてしまつた。親子の別れ、どんなにつ

らかつたことであらう。跡に残る小供、殘して逃げる親の情、天命とはいへ、むごい感じがする。

(ヘ)我子を茶毘にした先生、これも實話だが、羽衣町二丁目淺井氏妻コト、吉田小學校職員、鶴ノ橋下に避難、唯一人の愛兒(二歳)が病氣中であつたが、幸に抱き出して、無事なるを得た。一日二日とたつて、夫はあまりの疲れと泥水をあびたためか、病床に臥する身となつてしまつた。殘るコト女は、いとし子を養つて居たが、當時のこととて藥はなし、醫者は居ない。だんだん子供は衰弱が増して、遂に死亡してしまつた。しかし始末することが出来ない。人を頼るにもたよる術はない。止むなく自ら石炭やの残り火の所へ行つて、我子を焼いて白骨とした。自ら我子を焼く。弱いが女の本性なら、淺井氏は鬼か。鬼にならなければこの藝當は出来ない。然し鬼の目にも涙とか。人一倍子供を愛し、殊に二人まで子供を失つて、漸く育つたと思つたら、此震災、自分の手で我子を焼く、悲惨の話も多いが、このやうなこともあるまいとは、未に袖をしぼつての話だ。

二三

山下町電話料金課及分室の慘狀

課長 中

林

清

九月一日午前十一時五十八分頃、俄然微震にして、稍、長き感ある震動を感じた。例に

(二三)山下町電話料金課及分室の慘狀(中林清)

依り差したるものにあらざるべしと思慮したるがため、往年美濃の大地震に無事なりしを追想し來た。大丈夫と運呼して居る中に、漸次激震に進み、這は大變だと絶呼したときには、最早劇しき震動のため、進まんとするも進む能はず、物に凭らんとするも、引戻されて捉ふること能はずして、所謂進退の自由を缺き、逡巡の内に、周囲の各戸、棚類は、強き破壊様の音響を發し、次第次第に倒潰して、約十分間餘にして、強震は止んだと思ふ間もなく、落花狼籍の跡、暴狀實に言語に絶えた。それから外部を見ると、崩潰した壁煙のために、天日全く暗く、漸く一呼吸をなしつつある中に、階上の吏員の引續き下降するの響きを聞き、驚き乍ら思案を決し、吾が課室に戻つて見れば、室内は物凄く潰亂して、課員は已に何れへか避難してあらず、唯一人の所員の遺れるを見るのみであつた。急ぎ呼んで、自席の後方に掛置いた上着を貰ひ受け、直に避難を勧めた。即時草履穿の儘、戸外に飛出して、山下町分室へと急いだ。確か十二時少し過ぎた頃と思ふ。

濃霧は稍、少時にして齊れたと見え、飛出したときには、餘程薄らいでゐた。前面の新局舎は、尙依然として中央に聳へて居たので、心強く感じたが、其右に道を取り、舊局舎の左端、階上一角の崩潰を氣にし、一技手玆に死す、右に轉じて進まんとすれば、兩側櫛比の煉瓦大建築物は、殆ど全部崩潰して、道路を充壓し、加ふるに敷設のレールは、或は灣曲し、

或は切斷し、架空線も亦破壊せる鐵條網の如く密集し、歩行は極めて困難且危険であつた。巨大なる餘震の屢、襲撃するを顧みず、崩潰物の一角に攀あがり、漸くにして安全地帯とも謂ふべき公園の東端に出た。然るに豈計からんや、ここは一面洪水で、深さ膝を沒し、地下噴水の狀物凄く、一時は地割の噴水歟、水道管決裂なる歟、不明なるがため、不安に襲はれ、若し一步を過たば、其噴水孔又は裂地に陥り、延いて容易ならざること、に及ぶことなきかを思はしめた。

此時山下町通路は出水のために危険であつたので、公園に沿うて花園橋を迂迴せんとした。然るに水深く、人繁く、漸くにして橋畔に到つた頃には、最早十二時四十分頃を經過したと思つた。是より先き園側に沿ふて徒歩中、會、分室から公園に避難を急ぐ、女事務員二名に邂逅し、互に其無事を祝した。其言ふ所によれば、同員の大部分は立退きたるも、何分突然三階全部の墜落にて、眞の狀況は混沌不明であるとの事であつたので、大に一驚を喫した。而し私は唯だ氣の焦慮せるのみで、如何ともする能はなかつた。私は園側が水深くて危険なのを知つてゐるから、兩人を伴ふて橋畔に出で、其れから園内に避難せしめた。

花園橋畔には、警官達が佇立して、斷續的に襲來する餘震の都度、通行人に危険の旨を

警告してゐた。やがて吉濱橋附近より發した猛火は、次第に延焼して、早吾分室方面、山下町、二七四を舐めんとしつとありと告げた者があつたので、直に引返して、皆に避難の急なることを絶叫警告した。そして天運に任せ、一旦公園に避難し、而して四方の消息を待つことにした。時は確かに十二時五十分であつたかと思ふ。

公事に關しては、茲に一段を終へたので、忽にして私事に關する不安に襲はれた。午後零時十分頃、一齊に勃發したる猛火は、同二時頃より益々暴威を逞うし、同七時頃、最早舐むるものなきに到り、漸くにして次第次第に退勢に赴き、同十時頃に至り、全市を焼き悉くし、唯餘燼のみ炎々たるものあるのみとなつた。

此日園内籠城中最も慘憺たりしは、午後二時より五時の間であつたと思ふ。彼の強き西風も、是時猛火のため、屢々其方面を轉換し、其都度包圍せる猛火の炎に襲はれた。流々たる氣息のうちに、或は北に避け、東に轉じ、或は地に伏し、泥水を浴び、或は念佛を唱へ、何人も只管天佑に頼らんとするの狀、恐らく生きた心地では無からうと思ふ。

同一日午後十一時頃、一技手が焼跡の安全地帯を縫つて、其住家(藤棚)から公園に來たのに會したので、翌二日漸く歸つて家族を訪れた。

山下町分室の焼跡を、私が訪ねた時は、火氣尙強く、到底一步も踏入ることは出来なかつたので、翌三日午前九時、公園に至り、局長に一禮の後、再び山下町分室を訪れたが、依然として火氣高く、尙一步も入ることは出来なかつた。二日も三日も見舞つたが、火氣尙炎々として、近寄ることも出来なかつた。一方遺族の方には、二日から續々來訪し、再會の喜びに咽ぶ親子や、もはや涙も盡きて、泣くに泣かれず、歸らぬ旅に逝かれた子を偲び、己が身の不運をかこつ親兒には、目もあてられぬ悲劇であつた。同四日から死體の發掘に當つた。是れ故人に對する禮儀であり、生前に變らぬ溫情を交はして、微かに故人を偲び、遺族の方々の協力を求めて、發掘に取りかかつたのである。

最初四日には主任の白骨を拾ひ、意氣も緊張したので、積る煉瓦の取除も、左程の苦痛を覺えず、容易に目的を達することを得たのである。次に共電式度數整理室の焼跡に臨み、互に相督勵して、四名の男女事務員を發掘して、遺骨を擧げ、亡者に向つて、其の不幸を嘆じて、皆共に慟哭した。五日引續き、遺族の方々と共に、市外の集計部を發掘した。同室の煉瓦は山の如く、容易に取去られなかつたが、故人に對して、鐵石も貫くの同情心は、やがて六名の女事務員を發掘し得たのである。六日引續き、同市外集計部を發掘した。一層督勵して、疲勞をも打忘れ、同女員五名の靈骨を得、涙とともに遺族に引渡した。明くる七日は、市内磁石式度數整理室跡を發掘した。同室路傍に接する半部分は、墜落

せる煉瓦類が、比較的少かつたので、差したる苦痛を覺えず、遂に男女七名の可憐なる死體を抱き出した。唯奥の一隅には、女事務員三名、男員一名、使丁一名の死體の上には、巨大なる煉瓦、山の如く堆積し、到底吾等の力を以て動かすことは出来ない。別に人夫の手に、これを委ねなければならぬことになった。明けて八日は、監視員の遺骨を、遺族と共に發掘に着手したが、同氏の居所には、墜落障礙物が山の如く積もり、漸くにして之を除去したが、遂に當時の席下に發見せず、察するところ現席を離れたではなからうか。更に人夫の力を藉りて、再調することにした。

吾等課員協力の發掘は、茲に一段落を告げ、故人に對し、可及的遺憾なき行動を了し、始て意の安らかなるを得たのは、吾等の最も満足した所である。去るに臨んで、吾等は靈場に對し、感慨無量で、敬意を表した。

其後料金課は衛生委員となり、同月十六十七日に涉り、人夫三十人宛を使用して、残りの六氏の靈骨を擧げて、夫々遺族に引渡した。

かくして悲劇の苦杯を嘗めた、うら若き少女の死體は、二十有六名に上つた。或は無慘にも四肢を切斷され、或は頭部を潰され、鮮血にまみれながら、猛炎火舌に炙め盡されて、見る影もなく黒焦となり、哀れ骨片をあちらこちらに取亂したのであつた。夫れ

を目撃した遺族は、泣きわめき、遺骨を抱へては、狂ふのであつた。一方男子事務員の死體も、同様發掘さるるや、泣き悲しむ遺族は、目も當てられぬ有様であつた。

(横濱中央電話局料金課日誌)

二四 社會館震害と横濱驛附近混亂の光景

松 本 正 三 郎

それ一大事 大震火災のあつた九月一日の朝、我々勞働者が稼ぎに出る時には、少しの雲は空にあつた。それが九時頃から、雨となつたので、我々は作業を罷めて、日來我樂天國として居る高嶋町の社會館の一室に濡れて戻つた。先づ濡れた作業服を脱いで、これから好きな書物でも讀まうと思つて落付くと、時計が十二時を打つた。もう晝か、間もなくも行つて飯でも食つて來ようと、起つや、間もなく俄然大なる震動の響き、眼を上げて見ると、横濱一の大建築とまで稱へられて居る我社會館は、大きな頭を左右に振つて、今にも轉倒粉碎せん許りである。それ一大事と、逃げ出さうとする途端、何物にか頭をしたたか毆られて倒れた。さて不思議と見上ぐると、電球が左右に搖るるのであ

つた。そうと氣が付いて、再び起きんとすれば、建物が餘りに動搖するのであるから、踰いて起つことも出来なかつた。漸く窓際に這ひ寄つて、物につかまつて起ち、四方を見渡すと、お隣の中央食品市場は一たまりもなく、已に潰れて居た。裏の埋地は、大きな波を打つて搖れて居た。

少し静まつたので、私は事務に飛び込んだ。そこには丁度林副館長が居た。

「館長さん、豪らい震動ですな」と云ふと、「オー」と副館長さんは溜息のような返事をして茫然として、市街の様子を眺めて居た。

潰れた家が澤山あるだらうと、誰れかと一人が云つて駆け出した。間もなく私の傍らの一人が一叢の黒煙を指して、「火事だ」と叫んだ。成程火事だ。一同の視線はそれを集まつた。平沼だ。誰かが叫ぶと、何に彼處にも此處にもと、各自が指した。黒煙は見る見る間に、東洋の港と誇れる横濱全市を妖魔の如く包みつつあるのである。

それ救はざる可からずと、行かうと、ボロ絆纏一枚のままで、私が飛び出したのは、午後三時頃であつた。

社會館の残りたるは奇蹟か。日は暮れた。心に懸るは我が會館。築地橋は已に渡れず、再び高嶋驛構内に駆け戻り、線路を傳ふて海岸を走る。このあたりには、多くの避

難民草の上に坐し、或は線路に腰打ち掛けて、列んで居るもの、群がるもの、其中をミイちやんや、ヨツちやんと、迷へる子供を尋ね叫ぶ聲夜の暗を破りて悲鳴はけたたましい。橋本町から神奈川に入ると、瀧の橋通りは、盛に燃えつつある。其裡を潜り抜けて、漸くにして社會館に駆けつけた。

「オー」○が水だ水だ」と、副館長は我二三の友と共に、機關室の水槽より、バケツで水を運び、飛び来る火の子と、必死となりて戦ひつつ……。私は是等の人と共に、汲んで來てはかけ、汲んで來てはかけ、懸命となりて働いた。其甲斐ありてか、飛び火は消し止めた。副館長はために疲れて、倒れんとしてゐる。少し静にして置いて呉れと、椅子にもたれた時に、已に黎明、後に大阪病院或は満鐵病院とし、或は臨時救護所やら、孤兒の收容所として、重なる建物として役立つた。社會館も、焼失の厄から獨り逃れたのである。ああ思へば奇蹟か、否決して奇蹟でない。が弱き人力乍らも、必死の努力の賜物の外はない。横濱驛前 高嶋驛前の築地橋は已に落ちて居た。線路を傳つて、漸く横濱驛構内に駆け込み、櫻木町を走つて、大江橋に到ると、妖嬈の舌は、已に尾上町も本町も舐めて、私を通さぬのである。

據所なく再び横濱驛前に引返すと、そこにはホームの鐵骨と、驛前の廣場を頼りに集

まる避難民は、荷車に、人力車に、家財を載せて、挽きて来るあり、大きな風呂敷包みを背負ひ来るあり、泣く兒の手を引くあり、老人の手を引くもあり、誠に阿鼻叫喚の狀名狀すべくもあらぬ。短かき秋の日は、已に暮れて行く。而して薄闇を破つて、飛び散る火の子に取巻かれ、喧噪と混雜とを極めて居るのである。

見る見るうちに、櫻木町電車通りは火焰と化した。川を隔てて花咲町も、今は危い。この驛前の避難民は、それ逃げろ、命の一路は只高嶋驛裏線路を傳ふて海神奈川邊あるのみだぞと、私は叫んだ。猛焰は已に迫つて、女子供は只泣き叫ぶのみ、逃ぐることさへ、只うろろと狼狽するばかりであつた。

見る見るうちに、橋町は盛んに燃え出したので、驛前踏切に火の子が紛々と降り敷き、泣く子、叫ぶ婦人、悲しむ老人等を勵まし、漸くにして踏切りを渡り、高嶋驛裏線路に、私も共に通れた。

轟然耳をつん裂く音響、平沼のあたりの石油タンクが爆發したのである。我社會館は如何に、窓に火の見ゆるのは、あれは室内の燃ゆるのではないか。それとも四隣の焰の反映が窓の硝子に輝くのか。一度戻りて安否を慥めんと決心して、高嶋驛を抜けて、築地橋に到れば、爆發せるタンクの石油のために、川は火焰を流し、黒煙渦巻く音、凄まじ

く天に轟くのである。地獄の火は眞に是れかと、私は呆然として、暫時佇すんで、ゐたのである。

二五 其後の社會館

松本正三郎

宿を失へる我々人夫 九月七日の夕刻であつた。一人の我友のものが、私に告げるには、今晚から社會館では、我々勞働者を泊めて呉れぬとのことであつた。それは又どうしたことか、我々は常に社會館を樂天國として居る其社會館で泊めて呉れぬとなれば、我々は全くの宿なしだ。殊に今焦土と化したこの横濱市、何處へ行つたとて、宿る場所はない。木の蔭で草の枕、其草木さへなきこの焼野、木蔭の青葉館、草の花の褥の夢さへ結ぶことも出来ないのである。

そこで私は急いで社會館に到り、色々と御頼みして相談して見た所が、社會館で我々勞働者の宿泊を斷つたのも無理はない。先づ階上に昇つて見ると、南の方の幾多の室々には、傷病者が收容されて、半死のその體を悶えて呻つて居るので満ち満ちて居た。北の方の部屋には、迷ひ兒が收容されて居つて、「お父さん」「お母さん」と泣きわめくので、澤山の婢母さん達が、徹宵眠らず、これを慰め、すかして居る。階下の室は、残らず救護班の

お隣者様や看護婦さんで充ちて居た。混凝土の冷たい廊下にまで避難者は疲れた、青白い其顔を並べて居た。これ等を巡り巡り見た私は、流石に胸が一ぱいになつて、強いて、泊めて呉れと云ふことが出来なくなつた。

そこで力なく戻つて来て、我友を集め、館内の有様を詳細に話して聞かせ、同意を求めて、其夜は神奈川の渡邊山で野宿した。

其翌朝、日來我々を愛して下さる建築課長さんに其事をお話して、何處でもよいから、人夫の泊る場所を借して貰ひたいと嘆願した。課長さんは、いつも勞働者に理解のある方であるから、直に瓦斯局の焼跡一部を貸して下さつた。

私は大に嬉しかつた。同志の友と共に、焼け木杭や、焼トタンを拾ひ集めて、小屋を造つたが、いくら人夫の我々でも、煉瓦の破片や礫の上へは寝られない。そこで炊き出し場から、やつと空俵を貰つて来て、漸く寝る場所が出来た。所が十二日の晩だと思ふ、夕刻よりの雷鳴は、更けるにつれて益々劇しく、篠つく雨に風を加へて荒れ出した。其ため遂に、頼りと思ふ我小屋は吹き倒されて了つた。恰度其夜、その小屋に泊つて居た人夫は、百人許り、一人残らずびしょ濡れに濡れて、どうする事も出来ず、雨の中に相抱き合つて、がたがた顫へながら、「お爺々々」と我を呼ぶのには、流石の私もどうすることも出来な

かつた。それでもその翌日、一人の休む者もなく、働きに出て呉れたのには、今も私は其當時の友に感謝せずには居られない。

二六 南太田高地より見たる震災 宮 川 仁 三

當日の午前六時を過ぎた頃、いやに蒸暑く、南の風が生温く吹いて來た。間もなく沛然と驟雨は大地を濕した後、忽ち晴れて風も止んだが、後になつてから變つた天候を考へると、成程雲行とあれ、氣温とあれ、變つた模様頗る險惡と云ふが、頗る物凄しい豫感を與へた。かやうな不安な天候も刻々と移つて、十一時五十五分、突如大地は震ひ、地震！地震だ。やつ左右動か上下動か、そんな批判も出来ない激震だ。ひどい地震だ！我も人も暫しは茫然自失、震動は益々猛烈を極める。戸棚椅子と云はず、本箱卓子と云はず、倒さざれば止まず、破壊せざれば置かない有様である。

南太田町西中耕地北部の高臺にある太田校舎の東南一棟は、無慘にも倒壊した。茫然と立つて、頻りに來る餘震の一動毎に不安の念に簾られつつ、附近を見渡せば、太田の丘は大崩壊をして居る。崖上の家は殆ど全壊しないものはない。見渡せば、榮橋道慶橋一本橋は既に墜落した。又市内の方面を一瞥すると、南吉田町黄金町三春町、遠くは

中村町堀内町方面は、恰もおもちやの積木を崩すやうに倒れてゆく。電柱は悉く倒れあるひは傾く。煙突も餘煙を残して倒れては砂塵りを立て、各所に渦巻く状は形容すべき言葉もない。時の餘祐もなく、炎の舌は遙か西の方に現れた。破壊から焼滅へ、限なく急ぐ天魔は、何たる惨忍無極の者であらう。物凄き火炎は見る見る内に、お三の宮北側と關外萬代町方面とに、黒煙濛々と龍卷き、全土を瞬く間に、火の海と化して行くのである。遭難の民衆は逃げ場にさ迷ひ、西に走り、東に雪崩れ、杖にもたれてよろよろと、その方向に迷ふ老婆、婦女子は吾子を抱へ、泣き叫ぶ兒女等、右往左往の悲惨は、全市に漲つた。廣場と云ふ廣場、道路と云ふ道路、押し合ひ壓し合ひ混雜混亂の狀實に筆紙のよく盡し得る所ではない。火はまだ遠い。この高臺によもや延焼することはあるまいと、樂觀の間もなく、太田小學校の下某邸から猛烈な音響をたてて炎上した。間もなく續いて、西北方久保山道四五町先と思はれる地點に、高く騰つた炎は、天を衝かんとする火柱の勢である。今や太田校舎は、火炎を腹と背とからに襲はれて居る。西方庚耕地谷戸方面から再び襲はるると絶對絶命、三方からの火攻めなる始末、之より血路を求めなければならぬ。アー危険迫る。茲に至つて、防火の方策としては、谷戸方面の動靜には一分も油斷をしなかつたのと、新坂墓地の上や、隣家青木氏邸庭上から監視して

居るに、幸なる哉、西北方久保山道方面は鎮火したので、再生の思をあらしめたのだ。遙かお三の宮附近の火炎は、益々猛烈を極め、遂に大岡川を越えて、南太田町に延焼して居る。もう駄目だ、此方面も亦一括にされるのであらう。午後三時頃、風は西に變つた。やはり烈風である。火は漸次焼残つた方面へ進んで行く。慘禍の極を盡さうとする砂煙は、益々焼残つた方面へ進んで行く。慘運の魔の手の前には、大厦も高樓も一たまりもない。と見ると、火は風に逆行して、谷戸方面へ恰も潮の如くに猛進した。防止の術も盡きて、今迄の努力は恰も蟬螂の斧に等しかつた。若しも眞葛焼の宮川香山氏邸に延焼したならば、隣接する數町の家屋も、灰燼することは必定である。その火勢は尙崖上の青木湯川の兩宅に燃え移り、續いて太田校が火焔に包圍することとなれば、幸ひ焼け残つた南太田町霞耕地、西戸部町境の谷一本松池の坂方面、而かも幾萬の市民避難地たるこれらの一帯は、難なく一括めさるるの、明白であると、宮川香山氏邸の延焼は、此方面一帯危急存亡の大問題であつたので、谷戸では南北の方面に流るる小川があつたので、同地一帯の町民は、一身一家を忘れて、防火に努めたが、火は次第に風に逆行して居る。火稍々衰へた勢に附加へ、奮闘する人力は、遂に効を奏した。一方宮川香山氏邸へと進んで行く、火勢は、中々嘲り難いので、同邸の家族は勿論、附近の人々手に手に井水を汲み

取り、必死の努力をしたのと、邸内は一段高臺に在つたのと、周圍は樹木が繁茂して居つたのとで、防火の効があつた。

午前五時頃になつて、風は稍、終まつたか、火勢は尙怯まずに、あらゆるものの一物も残さぬ暴威を振ひ、焼け崩れる響音、爆發油罐の破裂の轟聲には、誰れしも心を奪はれない者は無い。東洋に於ける貿易の覇地、世界の市場と謠はるる此横濱が此姿、思へば苦屋の煙を立てた安政から以來、六十有餘年間築き上げて、文化の施設を盡した金港横濱も、一朝にして無残な焼野原に化するまでの實況は此の如くであるを、此高地に佇んで目撃し、無念の涙にくれたのであつた。

二七 程よき試練

縣立横濱第二中學校長 瀧澤 曲 南

此の一篇は各方面からの見舞狀に對し答禮として發遣したる文案である。

震災中慘害の最も甚しき横濱市にすみ、阿鼻叫喚の巷とか、慘鼻の極みとか、此世ながらの地獄とか、悽絶愴絶とか、あらゆる悲慘の形容詞の付くべき地に在りて、たとひ住宅は半潰の厄に遭ひ、三十日間庭内假小屋に起臥したるものの、一家八人微傷だも負はず、又類焼をも免かれたので、遭難記などを書く資格は全く無いが、兎に角自分の力量相應

の試練ともなり、又振古未曾有とか、有史以來の大震災とか云はるるだけに、自分としては生涯得難き體驗と教訓とを得た様な氣がする。

人間の幸福は、固より其大部分は理性や修養の結果による事は勿論であるが、又運不運といふ事も慥にある。人事を盡して天命を待つとは、此事を云ふのであらう。自分の學校は、九月六日の始業であるが、準備かたがた、九月一日は登校執務した。實は正午までに、或書類を作製して、市役所に行く豫定であつた。此豫定通りに行つて居たら、夫れこそヒドイ目に遭つたのであらう。生死の間を出入した位の事ですめば結構だが、殊によると煉瓦の下になつたか、夫れとも猛火に包まれて、彌陀佛ならばまたしも、無縁の餓鬼となつたかも知れぬ。處が幸にも意外な他の用事が突發して、午前十一時四十分まで、學校に居らねばならぬ事となり、已むなく午後に出掛る事にして、午食をするために、歸宅の途につき、丁度岡野町平沼方面は愚か、伊勢山より横濱港の一部さへ見ゆる丘陵の處に來た。時にグラブラゴウゴウと來たのである。併かも傍らに電話柱があつて、之れに「ツカマレ」と云はん許りである。何たる幸運の事であつたか。是れが爲めに稍、離れて遺憾ではあつたが、一望指顧の内に、大都市大震災火災の現状を觀望するの便宜を得たのである。又是れが爲め直に學校へ駆け戻つて、御眞影を奉遷し、最も發火

の心配ある化學藥品室に飛び込んで、危険な藥品を悉皆處分して、先づ大責任だけは首尾よく爲し果して、大安心はしたものの、未だ家族の運命が分らぬので、胸の動氣は全く沈靜には至らない。そこで暫く後事を當直の人に依頼して、一先づ歸宅した。住宅の半潰を見た時は、尠からず驚いたが、妻子眷族全部が無事に庭内に避難して居たのを見て、大體落付が出来て、度胸が据つて來た。夫から此住宅を全潰せしめては一大事と、長男を督勵して、遽かの勞働者、二三町離れた出入りの植木屋から、大丸太を十本程擔いで來て、支柱としたり、已に猛火が四方に燃え移つて居るので、折々丘の上に駆け登つて、火の手を見たり、夜營の準備をしたり、又學校に行つて見たりした。此日は流石にコンナ程度の被害ながら、心身の勢力を極盡したと云へよう。併かも夫れが晝飯ぬきなのだから、人間もいざとなれば、中々働けるものである。先づ一通りの仕事がすみ併かも火災の心配は十中八九まで無事が分つて、夕餐のお粥をすすつた。其時の甘さは實に天下一品であつた。

此夜は固より安眠は出來ないので、色々と來し方行末などを語りあつたのであるが、幸にも、前日米屋から取寄せた一斗の白米があつた。是れさへあれば特別な避難客の無い以上は、優に一週日を支へる事が出来る。一週日を支へ得れば、其内には各方面か

ら食糧は得られる。ヨシさらば全焼全潰の爲め、此方面に避難し來れる皆の爲め、聊救済に奔走して見様と、二日目の朝早々、此方面の有力者數名と會合し、縣市の所在地を訪問して、知事市長等にも面會して、刻々情報をもたらし、連絡を取つたので、横濱では慥に輕井澤方面が第一に、救助の目鼻が付いて來た様である。其代り忙しい事は實に目の廻る程で、學校にも多數の避難者が入り込んで居るので、之れも捨て置けず、直ちに職員中の罹災輕微の者を召集して、其衝に當らしめ、又住宅附近の空地に避難したものに對しては、米や野菜の配給は勿論、井戸の所在地などを教へて、夫々安定を得させる様にし、段々仕事は順調に進んで來て、頗る愉快を感じて來た。勿論、鮮人問題などがあつて、相當に人心恟々たるものがあつたが、是れも一二回で大體流言蜚語であることも分り、唯萬一の場合に備ふる爲め、中學卒業生並びに在學中の上級生を召集して、一團を組織し、非常の場合に備ふる事とした。

コンナ非常の時には、惡人は極端な惡事をやるが、普通の人には兎に角人情美を發揮するものである。殊に自分などは、所謂弱い商賣であるが、教育者の有難味を泌み泌みと感じた。夫は期せずして、卒業生や在學生の方面から、同情の援助が來つて、米や野菜の様な食糧品では、毫頭心配もなくなり、九月二十五日と六日とで、能い具合に人足も、死屋

も、大工も来て呉れて、氣にかかつた半潰の住宅も、首尾よく引起しが出来たので、九月末日から兎に角二室だけ使ふ事にして、懐かしい假小屋を見捨てて、引移つたのである。假小屋に在住中、地方の友人より見舞として庖丁を贈つて來た。其案内の書を見る

と、
秋悲し破屋に君や月を見む

といふ句があつた。此友人の風雅に釣り込まれて、其返事の末に、

假小屋に嬉しき文や月今霄

假小屋に心ばかりや月の宴

庖丁の切れ味見たり秋の鯖

などと書送つた事を思ひ出した。之を見ると、斯る大災害の裡にも、尙ほ多少の風流心が残て居たとも思はるるが、併し和歌の方は、一首も出来なかつた事を思ふと、全く重力の中心を失つて、慌てて居たと云ふ方が眞實であらう。

其後大工や左官がほしくて急がせて見たが、是れもいい具合に、福井縣在職中の卒業生の世話で、田舎大工が三人来て呉れて、十日ほどで一切の復舊工事をして呉れ、心配であつた壁の方も甘く運んで、十月三十日には、中塗りが出来たので、一時親戚に預けた四

人の娘や、孫も呼び戻して、一家八人顔を揃へて三十一日の 天長節祝日を祝ふ事が出来た。夫から十一月の二十四日には、壁の上塗まですんで、すつかり元通りの住宅となつて、近所隣りの御歴々の邸宅は、まだ其ままだに混雜して居らるる間に、逸早く一足早く失敬して、私事を完結し、夫からは益々専念に公事に従事する事の出来たのは、我ながら幸運であつたと、神に感謝せざるを得ない。

夫から此お正月であるが、せめて四五日でも震災氣分を忘れる様に、地方の友人から親切な案内もあつたが、此年の正月はまた七八年以前の氣候にでも復舊したのか、近年にない暖かい穏かな日和であつて、年賀の御客も少いので、朝から風呂に入つて、思ふ存分に骨も休めて、御蔭で心身健全、勇氣百倍して來たので、蕃山先生の御歌ではないが、如何なる困難とも闘つて、限りある身の力を試めしたいといふ様な氣分が横溢して居ますから、何卒御安心を願ひます。

大君のみことかしこみわれもまた

ふるひたゝまし年のはじめに

二八 大震災と神奈川高等女學校 校長 佐藤善次郎

校舎と周圍 大正十二年九月一日、私は外出して辨すべき二三の用事があつたが、止めて寄宿舎の自分の室で、英語の勉強をして居つた。海外出發の十月二十五日が近づいたからである。晝近く地震がムックとやつて來た。こいつ少し質が悪いわいと直覺して、前庭に出た。一段低い本館を眺めて居ると、波の様に動く。これは唯事でない、倒されては大變、何か急を要する事が起るに相違ないと、満身の注意を集中した。少したつと少し靜かになつたから、校舎は助かつたと思つた。次は火災である。前庭に出て崖下の家から火は起りはしまいかと見下した。下の人は皆上を見て居る。私を見て、其處はあぶないと呼ぶ。少しくさがつて居ると、第二震が來た。茲は海拔約十間横濱全港と市街の三分の二が見える。恐るべき此地震を最も沈着に凝視した者は私の外に少いであらう。何とも形容の出來ぬ響が起つて、大砲の様な音が澤山する。煉瓦や土手崩れ、煙突折れて赤褐色の砂塵は十間許りづつ騰る。人の聲など少しも聞えぬが、大都の破壊する様を目の前に見る。如何に混雜が市中に起つて居るであらうと戦き恐れ、れたが夫が、彼の大火を起し三萬に近い生靈を殺す慘憺たる結果を生ずるとは豫想し

なかつた。「地震の有様を他の似た物に比べて見たら」といふ人に答へて「馬が鞍を卸した時に皮膚を揺がして砂をはたくに似て居た」と答へる。地震の終らぬ中に妻が子供を連れて私の處へ來た。「今東館が潰れた様です」といふ。始めて振返つて校舎を見ると、五棟とも潰れない。唯東館の屋根が波の様になつてゐる。「之はやられた」と思つた。此日學校に三人の大工が居て、吾々の處に驅けつけた。私はすぐ側にある遊動圓木の圓木を外して、大工と共に荷つて彼の東館の支柱とした。これを支へ居る間にも、餘震が來て、ギチギチする。三尺も傾いた校舎が此の機敏の處置で助かつた。僅か五分を出ないで貳萬圓ばかりの校舎一棟を助けた。家族の事は顧みる暇がなかつたが、妻は小供四人と女中二人を揃へた。此慘狀を目の前に見て、長男と次男が友のオートバイの側車に乗つて、半時間前に鎌倉に向つて出發した。先を案じ、長女の東京裁縫學校に往つたのを慮つて、泣いて神佛の加護を祈つた。長男次男は散々な目に遇つて午後三時這々の體で歸着し、長女は多分やられたと思つたが、翌日午後無事で歸つて來た。地震の當時は可なり強い西風であつた。二三分と經ないで風上の程ヶ谷方面に火の手が二つ揚つた、其他澤山燃え始めたのであつたが、夫等には注意しないで風上の火に注意し三人の大工と不完全なる消防機を側に置いて、死力を盡して防禦しやうと覺悟した。

やがて附近に壓死者のあつた事も傳へられた。これは有志家の建てて呉れた校舎で、今では參拾萬金を要する。死を決して防禦しやうと、落日孤城を守る覺悟を定めた。一時間許りで其の火が沼と川とに遮ぎられて消えたので助つたのだと思つた。校舎を見巡れば、外觀は大體安全で、多少の傾斜をなし、一二割の瓦を落とし、壁は七八分通り落されて居る。それでも此位で済んだのは地盤のよかつたのと、基礎工事の十分なるとによると思ふ。(神奈川高等女學校校友誌)

二九

加賀町警察署より公園へ

巡査部長 松 谷 繁 助

當時加賀町署の電話室にて、電話係と只二人、午食のパンを採て食し終りて、コーヒ一杯を喫し、尙一抔の半を飲み、右手に茶碗を持ち居たる際、天地を震撼する爆音の音響と共に、上下左右の大震動にて、何處に逃れんかと震動のまにまに、右に左に踰躍せり。轉瞬にして、囂々の音と共に、家屋の倒壊に依る砂塵、濛々と降り、寸尺を辨せず。余は庭に通ずる三尺の扉の柱を緊握して、眼を閉ぢ、命を天に托せり。寸刻の後、眼底に明を感じ、扉の外面を見るに、緊握せし柱は異狀なきも、室外は累々たる煉瓦にて埋れり。明を感じせしは、建物倒壊して塵埃の收りしが爲めなり。電話係の厚浦巡査は、夫れ此の間と云

ふ間に足は既に疊々たる煉瓦の上を飛び越えつつ、其の煉瓦を足場として、高さ六尺餘の板圍を、苦もなく飛びて、道路に出でたり。余も後を追ひしが、破裂せし水道管の水は、幾分道上に、乗り居たるも、往來の人影未だ多からず。驚異の眼は狂氣の如く、途上に出でし人は、徒らに右往左往し、異様なる人聲は、遠く耳朶を撃てり。而して途上は倒壊建物にて、彼所是所に狼籍たり。聽て途上に人影を加ると共に、水は途上に満ち、歩行道に上れり。余は周騒して、署の倒壊建物を中心に、右往左往せり。同僚の姿も又た余の如く周騒せり。森署長の令室は、裏庭の水中に立ち、立木を握りしまま「一」と、狂氣の如く呼べり。「一」とは署長が只一人の愛兒にして、當時中學二年に通ひし兒が見付からざる爲なり。五六の同僚も來りて、署長官舎の倒壊建物の屋根を剝し、柱を除き、餘震の危険を冒して、其兒を搜索せしも、發見せず。余は他の同僚と別れ、又た署の周圍を二三巡して、同僚の安否を氣遣ひ搜せり。助を叫ぶ聲は、倒壊せし署の建物の中に當つて、微かに聞えり。余は他の同僚と協力して一人、獨力にて一人下敷となり居る者を助けたり。何れも机の下より、逃れ出たり。助を呼ぶ聲と共に、片足の動く者あり。中には大なる建物の下敷となり居る爲め、獨力にて助け難きもあり。是等は他の同僚も來り、共に助けんと努力せしも、得物なくては不可能なり。同僚の四五人は、血に染りし同僚を外面

に助け出すもありたり。余は再び官舎へ到り見るに、尙ほ「君搜索中なり。」下駄々々と云ふ令聞の聲に、署長と共に官舎の裏出入口に到りしも、下駄はなし。多分逃れ出しなると、余は心中に思へり。(註一)再び片足の主を助けんと思ひしも、詮術なし。かかるうちに、濛々たる黒煙は、二〇四番の邊りに起ると共に、風漸く加はり、火勢は漸次猛烈となり、風下なる官舎の倒壊建物に移り、忽ち廳舎に移れり。時に街路は狂氣の如く、人の泣きつつ、又は荷物を擔ぎ、或は老幼を背負ひ、手を引づりつつ、公園方面目掛けて狂奔せり。洵や修羅の街火は猛烈を加へ、他方面にも黒煙の上るあり。廳舎は全く火に包まれたり。四五の同僚と前後して、公園地に避難の途上、人は先を爭ひ、公園地に向へり。餘震頻々として、半倒壊建物は動搖せり。公園に向ふ途上、煉瓦造の洋館の道路に向ひ、甚しく傾斜せるあり。其下の道路には、煉瓦にて埋れり。危険を感ずる人は、急ぎ足に此下を過ぎれり。年三十三四の女盲人一人、杖を曳き足駄を穿ち、避難の途すがら此下にかかれり。人は顧るものなし。余は職掌上、其盲人の手を採り、下駄を脱がしめ、引摺る如くして、公園地に近き處に連れ來りて、手を放てり。公園に來り見れば、多數避難者は充ち満てり。水上署長以下十五六人屯せり。荷物は彼所此所に散亂せり。四方を觀望すれば、煙は遠近の數箇所不起れり。避難の人は刻々増せり。數多の負傷者は數

人に擔かれ、或は脊負はれ來れり。血に染りしも多し。年十七八とも見ゆる赤髮婦人の、腰部を露出して避難し來れるをも見受けたり。

余は加賀町署の所在を表示すべき必要を思ひ、公園地内の笠重の半倒壊建物内に入り、一枚の板を外し、木炭にて署名を記せり。四五の人は來りて、サイダー、ビールの類を取り居たり。余は署名を記せしものを、築山近くの樹下に立掛けたり。

親を尋ぬる聲、子を尋ぬる聲は連綿たり。猛然たる遠近の火災を見つつ、右往左往して、火熱を避け、落ちたる麥藁帽を水に濡して冠り(註二)其邊に散棄てられたる裂布を拾ひ、之を水に濡して、身體を包みつつ、午後五六時と思ふ頃、公園地内の大難は確實に免れしと自覺し、幾萬市民と共に不安なる一夜を公園に明かし、翌日午前八九時と思ふ頃、家庭を案じて公園を出でたり。

右避難中哀れなりしは、公園地内築山上に避難せし男二人、女一人が、爆音と共に飛來せし「壓シユラガス」の爲め、無残なる死を遂げたるにてありき。

(註一)「君は九月四日、花園橋近くより、焼死體となりて現はれたり」

(註二)余は上衣を脱して、食事中なりしに、依り着帽せず

III 恐ろしかりし日の私

英國人 マーシャル・マーテン

八月の末頃、私は佛國領事デジャルダンさんから、永代借地權の事に就て説明して呉れとの依頼を受けましたので、九月一日午前十一時に、其等の資料を携へて、佛國領事館に参りました。佛國の委員長アイビッカーさんも、既に來てをられました。領事さんは、私を机の邊りに御案内下さつて、私は右側の椅子に着席し、暫くの間二三の點に就いて説明してをりましたが、後ろの庭の方の入口から吹き込む風がなかなか強く、机上の書類を飛ばさうとしますので、領事さんは扉を閉めやうかと云はれました。私はいや、扉は閉めなくつても、私共の後ろの窓をお閉めなさつてはと申しますと、領事さんは其通り窓を閉めました。若しこの時扉を閉めたならば、恐らく私共は一人も逃げることは出来なかつたでせう。あのやうな際には、扉を開けやうとしたとて開けられるものでありません。思へばほんの四五秒ぐらゐのことであつたのです。十二時少し前、私が書類の一つを手にして、領事さんと一緒に讀んで居りますと、領事さんは突然私の左腕を握つて、部屋の一方を指ざし、「マーテンさん、あれは何でせう」と云はれました。私は元來僅な地震でも感じが敏いのですけれども、其の時は書類を餘りに熱心に讀んで

ゐたものと見えて、一向氣が付かず、領事さんが何でせうと云はれた時には、私は何か犬か猫かが椅子の下か部屋の隅かに紛れて來て居るのだらうと思つて、其指ざした方を見ました。丁度其の刹那、私は初めて建物の搖れてゐるのを感じましたので、地震ですと云つて、邊りを見廻しましたが、二三秒すると搖れが段々烈しくなつてくると同時に吾々は今高い煉瓦建物の中に居るのだなといふことに氣が付きましたので、私は「サア出ませう」と云つて、領事さんの手を引張つて立上がり、前に述べた入口の方へ向ひました。ビッカーさんも固より向ひました。入口まで凡そ二十尺もあつたでせうが、私達は二三歩急ぎ足で進みますと、又烈しく搖れ出しましたので、駆け出さずにはをられませんでした。そして戸口まで來ましたが、そこから地面まで石階が五六段あるのを、連も一段づつ下りてはをられぬので、私は一足飛びに飛び下りましたが、勢がついたので足がバタバタと自然に前に進みました。私が其の刹那に頭に浮んだことは、前に顛んで地面で掌を擦り切るであらうといふことでした。普通の場合ならきつとさうであつたかも知れないが、反對に後ろの方に倒れやうとしました。そこで私は後頭部を打つてはならぬと思つて、後ろに手をやつたのですが、後ろには倒れないで、更に前にのめり、さうかと思ふて更に右へ、更に左へといふ具合に、身體の重心がどうしても定まらず、

さうして遂に倒れさうで倒れずに、漸く突つ立つ事が出来ました。慙んなにして飛び下りてから十秒とも経たない時に、家屋の潰れる音や煉瓦や瓦の崩れる響が恐ろしく聞こえ、地鳴りさへも伴ひました。其時私の邊りには、黒いやうな黄なやうな雲のやうなもの、立置もつて、一寸先きも見えず、而もそれが爲に呼吸が苦しくつて、窒息するのではないかと思ひました。其れが口や鼻に入つた時のには、ひは恰も硫黄のやうで、吐き氣を催すやうで、或は火山でも爆裂して、硫黄の煙が來たのではないかとも思ひましたが、それでも何とも致し方なく、其處に立つて居りました。其時私は總ての人間、總ての物から離されて、自分一人だけになつたやうな氣持がしました。遠くの方で何だかおかしな音がするので、耳を澄ますと、それは多くの人の泣き叫ぶ聲でした。何分にも一寸先きも見えないので、進まうと思つても一歩も進めませんでした。其際私は今にも何かが落ちて來て、私を潰ぶしはしまいか、或はこの裏手の丘が崩れて來はしまいか、或は大地が裂けて自分を吞込んでしまひはしまいかといふやうな、不安に驅られてをりました。極めて冷靜に構へて、決して落付きは失つてをりませんでしたけれども、併しながら慙んな甚どい破壊力に直面しては、如何にして可いか更に判からず、非常な恐怖に襲はれてゐたことは正に事實です。暫くすると、谷戸坂の方面から強風が吹いて

來て、この雲のやうなものを段々吹き拂ひました。そこで第一に目に映じたのは、僅か十二三尺許り離れて立つてゐたビッカーさんの姿でした。ビッカーさんは黒い服を着てゐたのですが、それさへも見えなかつたのです。それから三十尺許りの所には、三分間前まで立派な建物であつた佛國領事館が、煉瓦や木材や瓦の破片の堆高い殘骸となつて横たはつてをりました。かの雲のやうなものはこの倒れた建物の塵埃であるといふことが初めて判りました。それが段々薄くなるに隨つて、通りの方も堀割の向ふ側も見えて來ました。そして其處に凄しい光景が展開されました。總ての家屋は倒潰して、唯其處此處に煙突や電柱などが傾きながら、僅に立つてゐるに過ぎず、其他は一帯に地上と平になつてをり、總ての物の上に例の黄色い埃がかぶさつて、遙か遠くに微かに野毛や、高島の山々が見えてゐました。

ビッカーさんと互に顔を見合せて、直ぐ思ひ出したのは、領事さんのことでした。領事館の庭を見ると、多數の人が居りました。而も是等の人々は、館の構内が安全だと思つて避難してゐたらしかつたのです。併し領事さんの姿は、其の中には見えませんでした。其時私は傍に唸き聲を聞きましたので、其の方に進んで見ますと、直ぐ前の倒潰物の中から、其聲が起つて來るのが判かりました。そこで私は其の倒潰物の上に攀ぢ

上つて、向ふ側に降りて見ると、丁度其處の石段の下に、領事さんが仰向けになつて倒れてゐるのです。驚いて引出ださうとしましたが、足元が蹣つてゐるのに、又もや大きな揺り返がきましたので、こんな不安定な足場では、又揺り返しの爲に煉瓦片が落ちかかるであらうと危ぶまれました。殊にまだ内部の壁がすつかり倒れずにゐたので、丁度其の側にゐた吾々は、可なり危険だつたのです。そこで私はビッカーさんと呼んで、崩れた物の上に飛上がつて、下へ飛び降りました。其時足の踝を折らなかつたのは、寧ろ不思議なくらゐでした。揺り返しが終つたやうなので、吾々は再び領事さんを引出しにかかりました。領事さんは身丈が六尺二寸、體格もそれ相當に立派でしたが、それでもやつと引出して、庭の土手の所へ寄り掛らせました。仔細に容子を檢べますと、唯右額に血がにちんでゐる外、別に傷も見えませんでした。ビッカーさんは、頻に奥さんや子息さんの安否を心配してをられるので、私は躊躇なくお出でなさるやうに勧めますと、ビッカーさんは、それではと云つて心残して去られました。其後で私は傍の池に行き、ハンケチを濡らして來て、領事さんの顔の血を拭ひました。顚顚の上の邊りに裂傷がありました。大した事ではあるまいと思ひました。領事さんは唯唸つてばかり居りますので、私は何處を傷されたか、何處が痛いかと幾度も尋ねましたが、其返事はなく、唯

「私の小さいベビー」「私の小さい娘」とばかり繰返されるのみでした。私はどうしやうかと思つて、邊りを見ますと、其時海岸通のオリエンタルホテルの方角に、例の黄色な埃の上から、眞赤な火焰が立騰つてゐました。其の内彼方にも此方にも、火焰や黒煙が揚がりだして、何か爆發する音さへも聞こえて出して、益々恐ろしい光景を現はしましたので、私はこの様子では横濱の下町全部は破滅の終りを告げるであらうと思ひました。果然今度は谷戸坂下の自分等から僅か二十間とも離れてゐない所から、火が起りました。私は慄うなつては、人手を藉りるより外に仕方がないと思ひましたので、直ぐさま坂下の交番所へ駆けつけましたが、其の交番所は、すつかり堀に落ちて、堀の石垣も崩れ、通りには大きな龜裂が出来、谷戸橋は陷落してをりました。そこで通り掛りの二三の人に手傳ひを頼んで見ましたが、誰も唯「エエ」と云つたきり立どまりもしないで、サッサと行き過ぎてしまふのです。氣が付いて見ると、其れは馬鹿げたことでした。それは當り前なのです。こんな場合に、自分の妻子の安否も判からぬのに、何で人に手を貸してゐる暇などあらう譯はないのです。私は仕方なしに、領事館に立戻りまして、領事さんを埋立地へでも連れて行かうと思つて、身體に手をかけて見ましたが、どうしても立上がりません。更に脊負ふとしましたけれども、矢張り駄目でした。それに動かすと、如何

にも苦しさうなので、致方もなく、もう憊うなつては諦めざるより外ありませんでしたけれども、併し火が段々迫つて来る。どうも見捨てゐるに忍びない。若し火が側まで來たら、領事さんは池の中へでも引入れて、火の熄むまで待つより外はないと思ひました。暫くすると副領事のシュバリエさんが來られましたので、更に二人して領事さんに話しかけましたが、痛いとも何とも云はず、唯「私の小さいベビー」を繰返すのみでした。そこでシュバリエさんは領事の自宅へ行かれ、手傳人を二三人連れて來られて、私には私の家を見廻るやうにお勧め下さいました。それは零時四十分頃でした。仍つて私は心は残れど、天沼と北方との間に在る私の家に歸らうと思つて谷戸坂を上らうとしましたが、倒れ家や火焔で迎も通れませんか。已むなく堀割に沿うて元町に出で、俗稱外人墓地を経て、山手へ出やうとしましたが、之も道が塞がつてゐたり、一部が河に落ち込んでゐたりしてゐて、矢張り駄目でした。其内、元町方向にも、火が起つたやうでした。そこで更に方向を變へて、谷戸橋を渡り、本牧に近い埋立地の端を廻つて、北方に入り、潰滅したキリンビール會社の側を通つて、漸くのことゝで自宅に着きました。それが正に午後二時三十分でした。北方を通つた時は、恐ろしい猛焔で、それが爲に、西から北の小山は見えなかつたので、方角がとんと判からず、それに道は倒れ家で塞がつて、どう通ほつて可

いか惑はしく、そこで電車線路を便つて、漸く千代崎町と覺はしき所まで來ると、又道がわからなくなりまして、けれども、それでもどうやらかうやら自宅まで辿り付いたので、す。辿り付いたものの、家はすつかり潰れて、地面と平になつてをりました。それに北方方面から屋根板や何か軽い物の燃えてゐるのが、どんどん飛んで來まして、それが落ちると、其處から直ぐ火が燃え出すのです。私は初め庭の芝生に居ましたが、風が強くて顔を向けることもならんで、庭樹の影に隠れ込みましたが、かうして居ると、火に圍まれさうなので、遂に自宅を見棄てました。其時は既に北向ふの家や隣の家に火が來てゐました。私は急いで墓地の方に出で、クライストチャーチを通抜けて、アメリカ海軍病院の邊まで來ました。當時困りましたことは、佛國領事館の机の上に、私の遠視の眼鏡を置いたまま來たので、往來するに非常に難澁しました。病院の側を通つてゐると、圖らず私の名を呼ぶ婦人の聲が聞こえますので、其方を見ると、病院の庭に何やら二つ白いものがありました。この大きな病院も全く倒潰し、クライストチャーチも劇場グレート座も、同様の有様で、其れ等の慘憺たる光景を見ては、眞に胸を引裂くやうな思がしました。倒潰物の上を跨がつて、更に進みますと、先刻白く見えたのは婦人の姿で、其一人は院長のドクター・ウェップさんの夫人、今一人は其のお友達であることが判りました。

ウェップ夫人は、主人が潰れ家の下になつて、今助けやうとしてゐますから、どうぞ手を藉して下さい」と云はれました。其時は丁度三時でした。私は手傳つてあげやうと思つて、大きな崩れ物の上を越えて、窪い所へ入込みますと、其處には米國水兵二人と病院に於ける日本人の傭人一人とが居て、横杆で倒れ物を持上げてゐますし、穴の底にも更に二三人居て、上下から大勢で合圖してゐました。私はお手傳しませうと云ひますと、何、少こし負傷はして居られるけれど大丈夫でせう」と云ひますので、私は上から聲を掛けますと、下からウェップさんが「大丈夫です、今直きに出るやうになります」と答へて、間もなく出て來られました。そこで私は火の來ない内に、早く安全地へお連れするが可いと注意をして、其處を去りました。谷戸坂を降りやうと思つて、坂の上に来て下を見渡すと、もう一帯の火の海で、其煽りが顔に蔭しぐらに來て、逆も立つては居られませんでした。それを見た時の感じは、丁度鰻屋の大火鉢に、炭火をかかん煽こしたてたやうでした。そこで已むなく英國海軍病院、それも全潰してゐましたが、兎も角も其構内に入りました。併し長くも居れないので、佛國領事のお住居の後ろ側の細道から、埋立地へ降りやうとしましたが、矢張り火に遮られて、降りられませんでした。洵に困つてしまつて、已むなく今來た道に引還へして北方から向ふの方に行かうと思ひましたが、併し

此方面も、今の今、僅か十分程前に通つたばかりの所なのに、もう一面の火になつてゐました。三方は火で、一方は崖、遁げ路がなく、どうしたら遁げあふせるだらうと思つて、右往左往してをりますと、崖の方に人が降りたらしい所を見出しました。其處にテニスの網があつて、一方の端が樹に結び付けてありましたので、是れ幸と、其の網に掴まつて、届くだけ降りて、それから滑べつて降りました。此處は崖崩れがして、其土で斜面になつてゐて、滑べるにはさして苦もなかつたが、下に落ちた時には、土で腰まで埋まりました。此處は海岸の廣い埋立地で、家も何もなく、隨つて被害はないので、外人や日本人が澤山避難して居りました。そして其中には重輕傷を負ふた人が尠からずありました。私はホツと一息ついて、暫く休みつつ、扱て是れからどうしたものであらう。自分一人は朝までかうして居ても可いが、此多くの怪我人はどうしたら可からう。朝まで此儘に置くと、助かるべき者でも助からないかと默考しました結果、兎に角、ランチかボートかを頼んで、沖に碇泊してゐる船舶に、救助を求めるより外に方法はないと決心しました。そこで水際の方へ歩を移しますと、運好くランチが見つかりました。そしてクライストチャーチのストロングさんや、其他の人が其處に居られて、何れも私と同じ考へであつたので、其のランチに傷の甚しい人から、順々に沖の船に運ぶことになりました。

た。其船は英船のドンゴラ號でした。斯様にして一たび送り届けると船長のフィリップソンさんは他の船とも相談してボートを續々寄越しました。そして負傷者のみならず、船に收容されたいといふ希望の人を其ボートに乗せランチが其れを曳いて、二三の船に往きました。此仕事は幾度も繰返されて、其夜の十時半頃までも續きました。私も力の續く限り、其仕事を手傳ひました。そして私も最後に英船ラケーオン號に送られました。船から眺めてゐると、神奈川方面の石油タンクが盛に爆發して、其火焔が高く天に昇つたり、市内一面に紅い火焔が渦捲いたりして、如何に恐ろしい事が既に起り、又起りつつあるであらうといふ考へを、起さずには居られませんでした。東京方面の火焔も遙に見えまして、其の恐ろしき被害の程も想像されました。其時の物凄い光景は、今思ひ出しても身の毛がよだちます。それから私は海路で五日に神戸に送られ、私の義姉(八十歳)とヨーロッパから遙々來てゐた私の弟とに會ひました。此圖らざる恐ろしい體驗は、私が縦ひ百五十歳まで生き永らへてゐても、きつと新しい事のやうに思はれるであります。

三一 震 災 日 誌

英國人 ユーシテス・ストロング

(ストロング師はクライストチャーチの僧なり)

九月一日及二日(土曜日及日曜日)私は一日の正午少こし前には、海岸通のシーメンス・クラブに居りました。そしてクラブの支配人ヤーネル氏と連れ立つて出て、ヨコハマユナイテッドクラブへ向ひました。十一時五十四五分の頃、私共は其入口まで來て、石段を登らうとした時、ふと私共は氣が變つて、今日は止さうといふことになりました。この氣の變つたのが勿怪の僥倖となつて、クラブ内に居た總ての人は死んだにも拘らず、私共は死なないで済んだのです。實に四五分間のことであつたのです。突然あの大地震が起りました。ヤーネル氏は直ぐ通りまで駆けだしました。私は戸口の前に立つて戸に掴まつて居りました。すると建物はどつと倒潰したけれども、良い案配に大戸が私を庇ばつて助けて呉れたのです。私は足が蹣めいて歩くことも、叶はず、暫く蹲まつてゐましたが、二度目の揺り返しが來て、崩壊物の中に抛り出されました。漸くのこととで脱がれ出て見ると、往來にヤーネル氏とキャプテン川上と、今一人クラブの人とが、無事に立つて居りました。壁の崩れた際、二人の日本人男女が、下敷になりましたので、通りがかりの二三外人の手を藉りて、漸くにして引出しました。私はどうしたら可からうかと思つて、先づ十二時二十分頃、海岸通に出て、二十尺もある崩壊物に攀ち上

ぼつて見ますと、數百の人が香港銀行の方へ駈けて行くのでした。そしてオリエンタルホテルが海岸の方へ倒れて、盛に燃えてをりました。其他市中一帯は各所から起つた火災の爲に、諸所黒い幕を覆ふせたやうになつて、其間から火が見えてをりました。山手の方も同様で、尙崖崩れも數箇所見えました。私は先づ山手へ行かうと決心しまして、オリエンタルホテルの邊りまで來た時には、ポートハウスも既に燃えてをりました。併し海岸の水の中を通つて、どうやら通り抜けました。其時は十二時四十五分頃でした。谷戸坂の方は火でもう行かれませんでしたので、新山下町の埋立地へ出まして、どうかして崖を登らうとしてゐますと、上から繩が下りましたので、それに掴まつて漸くのこと、英國海軍病院の庭に登りました。其處には凡そ二百五十人程の人が集まつて居りましたが、人數は刻々に殖えて、間もなく五百人位になりました。私は其處で食糧や藥劑類や毛布などを崖下へ下ろす手傳をしまして、それから一般病院の方へ行きしました。其途中、アメリカ病院の側で、家の下敷になつた院長のウエップ氏を引出してゐる人々に會ひました。ウエップ氏は火の來る僅五分間許り前に、危ふく助け出されたといふことです。私はそれ以上行けませんので、已むなく引還へし、クライストチャーチの傍を通つて、自宅の方へ歸りました。教會は全潰し、私の家は半潰してゐました。それか

らゼームス・マーテン夫人のお宅へ參りますと、同夫人とトレサイス夫人と、其子息ゼームス・トレサイスさんの三人が、庭に出て居られました。セントジョセフ學校の方から、火が段々近寄つてゐますので、私はお三人に英國海軍病院へお出でになる様勧めました。そしてそこにあつた綱で、崖下へ降りたいと云はれる方々を、どんどん下ろしました。多くの人々は其れを恐ろしがつてゐましたので、私は今に火が迫つて來れば、どうしても下りなければなりませんよ、早くお下りなさいと云ひましたが、果して其れが明瞭になつて、火は病院の隣の百十二番と百十三番まで來ましたので、人々は崖上に押寄せました。さうなると一本の綱では足らぬので、私は旗の綱をもう二本切つて、人々を下ろしました。傷の重い人から順次に下ろしましたが、其のうち火は容捨なく來て、最後の二人の下りる時には着物を少し焼いてをりました。私共は其處で埋立地に居た外人を一箇所に集めました。そして負傷した人々は、其に居る立派な働をして呉れた、英國海軍病院の傭人に看護を願ふことに致しました。三時四十五分、マーシャル・マーテン氏とフリップソン氏とが、ランチを一艘都合されて、外人十二名、其の他は日本人といふやうな、室を割當てられました。そこで私は傷の最も重い十二名の連名をつくり、それをドンゴラ號に送り込みました。暫くすると海岸通が少し通れるやうになり、そしてポー

トが其處及埋立地まで來ましたので、其處に居た多くの避難者を乗せて行くことが出來ました。それから私は本牧へ通ふ埋立の端の方へ行き、山手を上ぼつて百五十二番に出ました。此處は燒残つてをりました。其處で少し負傷者の手當をして、もう薄暗くなつた頃、私は山手の上通りを海軍病院の所まで來ました。此邊は一帶に灰燼になつてゐました。驚いたことは、病院内に死骸の澤山ある中に、一人の生きた婦人が左足を折つて、困つてゐるのです。此婦人はステイブルトン氏の家庭教師で、ロシア人でした。谷戸坂の上で、ノルウエーの水兵とドクター・ヤーネル氏に會ひましたので、負傷したロシア婦人の爲に、擔荷を造り、之に載せて崖下の海岸に下ろしました。それから私は、他の水兵と一緒に、尼寺の外側のレッツ氏の家の所まで參りました。其處には一般病院の患者が集まつて居り、順次にやはり海岸へ送つてをりました。丁度夜中頃、親切な看護婦の手助けに依つて、總ての患者を救助し終つてから、私共は山手公園に參りまして、其處に居る負傷者の救助に従事しました。獨逸病院は夜中の二時頃、火が付きました。山手公園も危険のやうに思はれたので、外人の或者等は、根岸の運動地の方へ避難しました。朝四時、私は海岸に下りて、ボートに乗つて、エムプレス・オブ・オーストリア號に行きました。私は有志の者を募つて、二つに分ち、一は山手公園に往き、一は根岸に往

き、外人に會つたら、何でも皆船に來るやうに傳達させました。地藏坂の上の所で、二百二十番と二百二十一番の庭の中に、負傷者を見付けましたので、直に吾々の擔架隊に收容されました。午前七時三十分頃、根岸のゴルフクラブに着きました處、皆もう傳達を受けて、今最後の一團がレイシ氏の指揮の下に、船に向はふとしてゐる所でした。夫から私はモリソン氏とホームズ氏とのお宅を訪ねましたが、丁度モリソン夫人は庭に出てゐました。家は燒けてはゐませんでした。私は船に行くことをお勧めしましたが、此處に残つて居ると云はれました。聞けば後で盜賊の爲に其處を逐ひ出されたといふことです。午前九時頃、百十二番の「赤門」へ行き、其庭で一時間許り寢ました。十時に根岸の海岸よりの家を探ねました。此邊は被害の程度少く、二三外人が殆ど負傷もなく居るのを見ました。土地の人は朝鮮人を逐うてゐました。私は本牧へ廻りました。夫から十二天を経て、十一時三十分、埋立に着きました。其時、港内に石油の燃えてゐるのを見ました。埋立の堀割の中にも、石油の燃えてゐる所がありました。其音が實にえらい音で、煩は百尺位も上がつて居りました。併し私は十間位側迄近寄つて見ても、別に氣持、惡くもありませんでした。つまり熱は皆上の方へ放散されてしまふらしいのです。正午頃、堀割の入口に近い英國々旗掲揚竿の側に來ますと、其邊りで、戦

慄すべき慘劇が公然行はれつつあるのでした。私は支那人其他の避難者をポートに乗せる爲、暗くなるまで其處に居りました。其時巡査から握飯を御馳走になりました。夜に入つて、エムプレス・オブ・オーストリアに行きました。委員會を組織して、救護に着手することになり、ゾルター氏を會長に推し、私は書記となり、取敢へず死者の名簿を作り、又まだ陸上に在る外人の爲に、搜索隊を派遣することとなりました。

三日(月曜日)、私は船に留り、エムプレス・オブ・カナダ號に移される負傷者の取扱を爲し、又死者・負傷者・行衛不明者の名簿を作つてゐました。

四日(火曜日)、搜索隊と共に上陸し、本町通に於て、フリーデル氏・メンデルソン夫人・ジェンクス氏其他の死體を發見しました。午後にイギリス波止場近くに於て、支那人の火葬を監督しました。

五日(水曜日)、搜索隊は鷺山及根岸に向ひました。根岸に掠奪が行はれると、このことを聞きました。英國軍艦デスバッチ號が到着し、水中の死體を引揚げて、検査を開始しました。

六日(木曜日)、英國水兵の助力を得て、第一回の死體埋葬式を英國領事館跡で行ひました。領事館側の死體の數は、四十五程算へられました。モリソン氏の死體を検査した

結果、噂されたやうに殺されたものではありませんでした。此間に於けるジュウエット氏の御盡力は大なるものでした。番兵が各所に駐屯するやうになりました。

七日(金曜日)、ドクター・ウイラー、アベイ、レフロイ、トム・トーマスの各氏其他多くの人々の遺骸を、英國海軍病院地内に埋葬しました。搜索隊は公園及南京街に向ひました。

八日(土曜日)、キャプテン・ロビンソン氏及フィッツ・ジェラルド氏の出席を得て、G、P、R、會員二名の埋葬を行ひました。

九日(日曜日)、根岸のモリソン氏の宅を訪問しました。救援隊到着の報が、各所に公告されました。私は外人の死體を搜索すべく、南京街を歩きました。エムプレス・オブ・オーストリア號が出帆しますので、私共は佛船アンドレルボン號に引移りました。

十日(月曜日)、午頃、英國軍艦ホーキンスが到着しました。英國代理總領事ボールター氏より、司令長官レビッソン氏の言として、總ての英人は直に神戸に行く方が可いといふことを通告されました。

十一日(火曜日)、私は米國水兵と共に上陸して、アメリカ海軍病院・山手ホテル及キング氏邸内の死體を埋葬しました。此日私共はプレシデント・ウイilson號に引移り、甲板に寝ました。

十二日(水曜日)災後初めて外人墓地の米國人の部に於て、正式埋葬を行はれました。クライストチャーチの金庫を、私共の面前で米國水兵に開かせて見ましたが、總ての記録は皆役に立ちませんでした。ブレンデント・ウィルソン號からブレンデント・マキンレ一號に引移りました。

十三日(木曜日)米國領事及同夫人の死骸は、日本當局の手に依つて、立派な棺に納められ、根岸の新しい墓地に運ばれ、バランレーン氏代理領事及米國ヒューロンの僧リデル氏の臨席を得て、私が正式に葬儀を執行了しました。それから米國驅逐艦に便乗して、東京に行き、ヘーズレット僧正のお宅に泊りました。

十四日及十五日(金曜日及土曜日)帝國ホテル内の米國救護委員會より、被服類が供給されました。明日の日曜日に、横濱で行ふべき歿死者追悼會の準備が爲されました。

十六日(日曜日)天候悪き爲、追悼會は延期されました。

十七日乃至二十二日(月曜日、乃至土曜日) 略す。

二十三日(日曜日)英國總領事館路に於て歿死者追悼會を執行されました。

九月二十四日より十月二十九日まで、私は或は神戸へ行きて、避難者を見舞ひ、或は横濱で發見された死骸の埋葬に従事しました。終始日本人の各階級より、極めて禮儀厚

い取扱を受け、又永く食糧の供給を受けましたことを、衷心より感謝して居ります。唯一度訝かしく思つたことは、海軍水兵かと思はれる數名の人々に對して、惡臭ある三つの死骸を埋葬することをお頼みした時、不法法の舉動を示されたことでした。其人々は「吾々水兵は死骸など取扱ふものぢやない」と云つて、威張つて行き過ぎました。其死骸は其れから尙三日も其處に置かれてありました。此以外、私は格別亂暴な態度も見受けませんでした。そして掠奪とても、私自身の目撃した所では一つもありませんでした。

三三 震災當時の思ひ出

中華民國人
代理總領事 孫 傑
駐橫濱總領事館副領事 朱 芾
隨 習 領 事

日本人のみならず、我々中華民國人も、永久に忘れ得ない日本の大正十二年九月一日、此日私達兩人は、公務を帯びて上京し、所用を済ましたので、お茶ノ水驛から省線電車で歸濱しやうと、駿河臺下まで來かかつた際、圖らず遭遇したのが、あの大地震で、道路沿ひの店舗も住宅も、轟然の響をなして倒潰し、或は傾斜した。私達も足は地に着かず、忽ち

のうちに倒れた。起きては倒れ、倒れては起き、暫くは電車線路の上に右往左往してゐたが、其うち震動が止んだので一刻も早く歸濱しやうと思つたが、交通機關が悉く杜絶したので、何とも仕様がなく、兎も角も永田町なる我國の公使館へと志し、お茶ノ水橋まで來たのであるが、道路の混雜は大變なもので、通行も出來ぬほど、家財道具が運び出され、折柄所々に火災が起つたので、到る所避難民が群集し、婦女老幼が號泣しつつ駆け廻るなど、其悲惨實に言語した。此様子では、連も公使館へは行けさうもない。暫く佇立して、道行く人に聞いて見ると、永田町方面にも火災が起つたといふことで、我公使館の運命も、大概想像がついたであつた。私達は行くことも出來ず、如何にせんかと、八方に目を光らせてゐたが、其間火の粉が絶えず飛んで來て、危険極まるので、只遁げ行く市民の後に跟いて、上野方面に避難するより外はなかつた。漸くにして上野公園に來て見ると、もう數萬の人が押寄せてゐたが、其間に僅に身を容るるに足る程の場所を求めて、其處に横たはつた儘燃え盛る猛火を眺めつつ一夜を明かしたが、翌日になつても火は消えず、遂に園内で三晝夜寝ず食はずに過ごした。四日目に下山しやうとしたが、丁度其頃は鮮人騒ぎで、動もすれば我々にも危険が迫りさうなので、私達は領事たる資格を以て山下の下谷警察署に行き保護を求めた處、同署では直に警視廳及憲兵隊に通告し

た結果、此際下山することは今暫く見合はすが可からうといふことになり、其日私達は、心ならずも園内なる美術學校に收容され、六日に至つて始めて憲兵隊の附添を得て下山し、更に永田町なる獨逸大使館内に收容せられたのである。其内横濱の狀況は詳にせぬが、噂に據れば全滅したといふ事で、約五千に上る我在留民の安否が氣掛りでななかつたが、大使館で圖らずも我國の代理公使張元節氏に邂逅し、始めて氣心は落付いたけれども、横濱の狀況がどうやら噂に違はないとの由を聞いて、實に悲痛に堪えず、一日も早く歸濱したいと思つては、寢食も安からず、斯くて十一日の朝、私(朱芑)は張代理公使に随つて、霞ヶ關なる外務省を訪問し、此際歸濱し得るやう、何等かの方法を講せられたいと懇請した處、幸に快諾を得、直に陸軍省に交渉せられ、少佐某氏と兵士四名、別に外務書記官某氏の附添を受け、張代理公使及私とで都合八名、二臺の自動車に分乗して、其日正午、霞ヶ關發横濱へ向つた。途中、品川の町外づれまで來ると、一臺の自動車は故障を生じて、一步も進まずなり、已むなく八名とも、他の一臺に合乗し、窮屈な思ひを爲しつつ、午後三時半頃、漸くにして横濱に着いた。着いて見て實に驚いた。固より斯くあらんとは想像してゐたのであつたが、實際を見て今さらの如くに驚かざるを得なかつた。あの殷盛であつた大港市、あの宏壯であつた數多の建物は、殆ど悉く潰滅し、燼滅し

て、山下町は尙殘燄が所々こ燦ぶつてをり、宛ながら別世界に來たかの思ひ、就中我南京街の慘狀は全く言語に絶し、道路が何處にあつたか、見界ひもつかず、居留せる我同胞約五千人の中、二千人といふ多數は無殘にも歿死を遂げ、死骸は尙到る所に轉がつてゐるといふ有様で、如何に大自然の威力とは云へ、餘りの殘虐さに悲痛を超越して、暫くは茫然自失の體であつたのである。當時殘存者の約三千名は、既に神戸に避難して、在留者は僅に二百名に充たず、それも何へか姿を隠してゐて、懐かしき同胞に會ふことも叶はず、其心細さは喻へん方もなかつたのである。我總領事館はといふと、無論燼滅した上、地盤が一尺以上も低下したので、室々の位置さへも定かならず、總領事長福氏も、令息二人枕を並べて、館内に歿死を遂げられたことで、俯仰低徊立去るに忍びなかつたのである。當日私は市内の何れへか身を寄せて早速にも跡片付や救護に取掛かうと思つたのであるが、鮮人騒ぎが止んだやうで、實はまだ全く止まず、中華人である私に、或は危険でもあつては申譯ないから、今數日間是非東京に居るやう。さもなければ自分達の責任が濟まぬからといふ、少佐殿及外務書記官殿の強つての言葉に、私達は否む由もなく、其言葉に随つて、同日深夜再び上京し、元通り獨逸大使館内に保護住みとなつた次第である。それより兩三日を経て、十四日には、横濱中華會館理事長孔雲生氏上京せられ、張

代理公使に會つて、在濱國人の救護、其他始末に關し、責任者がなくて困るに就ては、此際私孫士傑を總領事代理に任せらるるやう、本國政府に稟請せられたること、に、張代理公使は實にもとて、早速其手續を執られた。其後私達は歸濱の心矢の如く、遂に十八日朝、兩人相携へて無蓋列車で歸濱したが、差當り假領事館に充つべき適當の家屋なく、孔氏の奔走で、漸くにして西戸部町池ノ坂なる里吉時次郎氏方の一室を借り受けて、事務を開始した。先づ何は扱措いても、南京街の屍體を片付けねばならぬので、主として中華會館と、阪神より來た掘屍團との協力を得、毎日之に従事すること一箇月餘、凡そ一千餘體を拾收したが、其他日本街に散在してゐた屍體の中で、中華人と思はれるのが七百餘あつた。尙其の他行衛不明と思はれるのが尠からずあつたのである。此間、九月二十六日には、私孫を總領事代理に任する旨、本國政府より通告があつた。救護事務にも銳意従事したのであるが、夫れ迄に縣や市からも相當救護に盡されたことで、其厚意は實に感謝に堪へない。一面神戸から歸濱する者も日々絶えぬので、其假住宅を建つるの必要に迫られ、乃ち安河内知事及渡邊市長に懇請して、新山下町埋立地に、二百人以上を收容し得べき大バラックの建設を得た。是れ實に南京街復興の根據であつたのである。其後十二年末には、居留民四百三十四人に達し、續々假家を設け、假舗を開いて、落

付くことになった。十三年一月二十六日には、周氏が新に總領事に任せられ、爾來館員一同熱心に復興事務に従事し、一面日本官公廳よりも焼跡の整理を遂げられ、六月には各大商店や假領事館や中華學校なども建てられて、山下町では南京街が眞先に復興の魁を爲したのである。此間神戸へ避難した同胞へも、頻に歸濱を促がした結果、八月末に居留民約一千一百人に達したのである。洵に當時の事を回想すれば夢のやうである。

三三 骨肉十四人と外に雇人數人を犠牲にした私の一家

中華民國人 鮑 明 常

私は震災の爲に歿しました鮑焜の長男です。父の焜は廣東省廣州府の生れで、お國の明治維新頃、夙くも此横濱に渡來して輸入業を始め、後には貿易經理の業務、即ち私の國から參つた輸入業者に保證を與へて、無事に取引を爲さしめる業務に従事し、永年の間に相當の資産を造りまして、在留中華人の中では、屈指の實業家として名譽を得てゐたのでありましたが、這般測らず大震災の爲に、第二の故郷實は故郷よりは一層關係の深い此横濱に於て、家族十三人と共に、果敢なき最期を遂げたのであります。在留同胞

約五千人の中、二千人といふ多數が歿死したことで、其慘狀は實に言語に絶するのであります。一家で以て十四人、外に雇人數人の犠牲を拂つた私の家庭の如きは、洵に慘中の慘たるものであらうと思ひます。元來私の一家は家族は頗る多く、二つの世帯に分かれてをりました。其一つは父の焜を中心とするもので、北方小學校の眞上なる山手百二十七番に住ひ、父母弟其妻第二の弟、其妻第三の弟、第五の弟、姉第二の姉弟等の子女四人、父の第二夫人計十五人、外に家庭教師一人、庭作り一人、僕婢五人（此等雇人の中には日本人もあり）といふ多人數でありました。又一つは私を中心とする世帯で、谷戸坂の上なる山手百九番に住ひ、私夫婦と子女七人、外に僕婢五人で、之も相當多人數でありました。震災當日父の家庭では、父は永らく病氣で靜養中であり、第二の弟と第五の弟とは、山下町に勤めに出てをり、私の家庭では私一人が矢張り山下町のチャータード銀行内なる、私父子の事務所勤めてゐたのです。突然激震が起りますと、私のゐた人造石建の銀行は、一堪まりもなく倒潰して、二十人近くの死者を出したのであります。私は幸に怪我もせず、飛び出すと、直ぐ歸宅の途に就いたのであります。山のやうな壊れ家を踏み超えたり、渦捲く猛煙を潜つたりして、命からがらの態であつたことは、申すまでもありません。漸くにして宅の邊りまで辿り着いて見ましたが、其時最早一面の火

で、逆も寄り着けません。無論父の家の邊りも同様でした。遂らつてゐると、私も火に包まれさうなので、已むなく本牧和田山の下まで遁げ延び、其日は某家の鳥小屋の中に横はり、鳥糞に塗みれながら、一夜を明しました。翌日再び山手に還つて、彷徨つてをりますと、圖らず同國人に出會ひ、其言に據りますと、私の世帯の家族は、一同無事に立退いて、佛國汽船アンドレルボン號に收容されてゐるらしいのです。それで一先づ安心して、父の居宅に往つて見ますと、跡形もなきまでに全焼してゐました。堆き灰燼の底には、父母を始め數多の兄弟姉妹や、雇人等が白骨となつてゐるであらうと思つたのですけれども、哀愁と疲勞と飢餓とで、殆んど人心地もなき私には、逆も掘返して見るだけの勇氣も力も出ませんでした。それから漸くのことで、ルボン號へ訪ねて參り、息災である妻子に回ぐり會ひました。聞けば私宅は絶壁の上にあつたので、忽ち三方を火に包圍されて、遁げ場を失ひ、一同困惑してをりますと誰であつたか一人の白人が長い繩を一筋呉れて、是れを樹に結び付けて絶壁を降りよとのことで、一人一人其れに吊り下がつて新山下町の埋立地に降り一家八人、辛くも死を免かれたとのことでした。父の宅では、勤めに出てゐた第二の弟と、第五の弟とが、宙を飛んで歸つたのださうですが、第二の弟は父母兄弟姉妹等と運命を共にし、第五の弟だけが助かつたのです。斯くてそれか

ら十二日間を船中に過ごし、二十日程して本國の親戚孔兆成といふが見舞に參りましたので、それと力を協せて、父の宅跡を發掘し、果して誰々といふことは判かり兼ねるが、十數人分の遺骨を收めて、相澤なる中華墓地の管理所に預けて置いた次第です。當時雇人も悉らく大部分は死んだことと思ひます。當時の事を想ひ出しますと、悲痛に堪へませぬので、何事も天命と觀じて、成るべく想ひ出さないやうにして、相變らず父の遺業に従事してをります。

18077
昭和 29.10.13
横浜市図書館
2990143

刷印日四十月二十年二和昭 行發日八十月二十年二和昭		
印刷所 大橋活版印刷所 横浜市相生町三丁目五十一番地	印刷人 大橋徳壽 横浜市根岸竹ノ丸三、二八八番地 電話本局〇七九三番	著作兼 發行人 横浜市役所市史編纂係
品 賣 非		

横濱市震災誌第五册大尾







